鳥取県教育文化財団調査報告書　71

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡名和町

大塚岩田遺跡
大塚塚根遺跡

２００１

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書　７１
一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
鳥取県西伯郡名和町
『大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡』
２００１　国土交通省倉吉工事事務所
財団法人鳥取県教育文化財団

大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡正誤表

頁	行	誤	正
例言	23	11. 本報告書中の遺構名	11. 本報告書記載の大塚岩田遺跡の遺構名
図版目次		PL.19　SK－１（２・S2・S４）	PL.19　SK－１（２・３・S2・S４）
15 文中写真		SI－1 遺物出土状況（東から）	SK－1 遺物出土状況（東から）
39	13	このうち、181･182 は	このうち、182 は
39	14	もの、183･184･189 は	もの、181･183･184･189 は
49	S20	（短軸）お	（短軸）9.8
49	S29	（重量）空欄	（重量）10.60
49	S30	（重量）3.40	（重量）3.40 g
49	S31	（重量）8.60	（重量）8.60 g
49	S32	（重量）8.20	（重量）8.20 g
PL.19 キャプション		SK－１（２・S2・S４）	SK－１（２・３・S2・S４）

大塚岩田遺跡SD-2　遺物出土状況（北から）

鳥取県教育文化財団調査報告書　71

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡名和町

大塚岩田遺跡
大塚塚根遺跡

２００１

財団法人　鳥取県教育文化財団

国土交通省　倉吉工事事務所

序

鳥取県は、本州の南西部にあり、北は日本海を隔てて大陸と向き合い、南は中国山地が日本海側にせり出す山地の多い地形の中に、風紋の美しい鳥取砂丘や白砂青松の山陰海岸、その姿から伯耆富士と称される秀峰大山など風光明媚な自然環境が存在します。また、農林水産資源も豊かであり、さらに妻木晩田遺跡や上淀廃寺跡などの歴史遺産も数多く存在します。このような中、毎年多くの観光客が本県を訪れていますが、交通網整備の立ち遅れは否めない状況が見られ、人や物資の流通が円滑に行えているとはいえません。特に、基幹道路である国道９号線の整備高速化は急務であります。

このような中、今回一般国道９号（名和淀江道路）の改築工事に伴い、「大塚岩田遺跡」「大塚塚根遺跡」の発掘調査を実施しました。今回の調査は小規模な面積の調査ではありますが、どちらの遺跡とも当該地域の歴史を解き明かしていく上で欠くことの出来ない貴重な情報を提供できたと考えています。

本書は、この発掘調査の成果を後世に「記録」として保存するためにまとめたものです。本書の「記録」が、文化財に対する認識と理解を深める一助となり、教育及び学術研究のために広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝すると共に厚くお礼を申し上げます。

平成13年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有　田　博　充

例　言

1．本報告書は、平成12（2000）年度に調査を実施した一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う大塚岩田遺跡、大塚塚根遺跡の発掘調査記録である。

2．大塚岩田遺跡には、国土座標第Ｖ系に対応する10m単位のグリッドを設定し、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で図示しグリッド名とした。大塚塚根遺跡は、調査地が東西方向に細長いため調査時には任意の方眼グリッドを設定して調査を実施し、後に国土座標第Ｖ系に対応する全体図を作成した。方位は共に国土座標第Ｖ系に基づく座標北であり、レベルは海抜標高を表す。

3．本報告書に掲載の周辺遺跡分布図には国土地理院発行の５万分の１地形図「美保関」（平成３年修正版）、「米子」（平成７年修正版）、「赤碕」（平成６年修正版）、「大山」（平成６年修正版）を使用した。

4．本文は調査員が分担して執筆し目次に執筆者名を記載した。編集は岡野が担当した。
　遺構実測は調査員、遺構図の浄写・遺物の実測並びに浄写は西部埋蔵文化財名和調査事務所で実施した。遺構写真は調査員が撮影したが、遺物写真は奈良国立文化財研究所の牛嶋茂、杉本和樹の両氏に撮影をお願いした。

5．大塚岩田遺跡の調査後空中写真は、業者に委託してラジコンセスナ機で撮影したものである。

6．出土した石製品の石材鑑定を鳥取大学名誉教授赤木三郎氏にお願いし、御教示をいただいた。
　大塚岩田遺跡SK-6埋土の脂肪酸分析を業者に依頼した。

7．出土遺物に注記した遺跡名は右の略称を用いた。　大塚岩田遺跡：大ツイワ　大塚塚根遺跡：大ツツカ

8．本報告書における遺構記号は下記のように表す。
　SI：建物　SK：土坑　SD：溝状遺構　P：柱穴・ピット

9．遺物実測図では須恵器が断面黒塗り、それ以外は断面白抜きとした。記号は下記のとおりである。
　├────┤：擦り範囲　├----------┤：敲打範囲

10．遺物には、遺跡名略称、遺構名、取上番号、取上年月日を記入した。報告書掲載遺物には実測者番号を記入したシールを貼り付け、実測原図にも実測者番号を記している。

11．本報告書中の遺構名には報告書作成時に発掘調査時の遺構名から変更したものがあるが、出土遺物には発掘調査時の遺構名が記入されている。遺構名の変更は以下のとおりである。

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SI-１内	SK-3	SD-4	SD-6	SD-11	SD-7	P-2	P-18	P-7	P-23	P-12	P-13
SK　1		SD-6	SD-４南側	SD-12	SD-10	P-3	P-19	P-8	P-24	P-13	P-14
SK-3	SK-8	SD-7	SD-2	SD-13	SD-11	P-4	P-20	P-9	P-25	P-14	P-12
SD-2	SD-3	SD-8	SD-13	SD-14	SD-12	P-5	P-21	P-10	P-15		
SD-3	SD-4北側	SD-10	SD-8	P-1	P-17	P-6	P-22	P-11	P-16		

12．出土遺物・図面・写真は鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。

13．文章中に述べる土器型式名および時期（年代観）は、下記のものを参考にした。
　弥生土器……清水真一「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　―山陽・山陰編―』木耳社　1992
　　松本岩雄「出雲・隠岐地域」　〃
　須恵器……大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
　陶器……大橋康二「肥前陶磁の製品の変遷」『肥前陶磁』ニューサイエンス社　1989

14．現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。（五十音順、敬称略）
　石川日出志　会下和宏　佐伯純也　下高瑞哉　高田健一　田原敦史　辻 信広　中川　寧
　中原 斉　仁木 聡　西尾克己　濵田竜彦　百瀬正恒　森岡秀人　山田康弘　米田美江子

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次
挿表目次
図版目次

第１章　調査に至る経緯 ……西川…… 1
　１．発掘調査に至る経緯 …… 1
　２．調査体制 …… 2

第２章　位置と環境 ……西川…… 3
　１．地理的環境 …… 3
　２．歴史的環境 …… 4

第３章　大塚岩田遺跡の調査 ……西川・岡野…… 9
　１．調査の経過と方法 …… 9
　２．調査地の現状と基本層序 …… 9
　３．発掘調査の成果 …… 10
　(1)　建物跡…… 10
　(2)　土坑…… 12
　(3)　溝状遺構…… 16
　(4)　ピット…… 38
　(5)　遺構外出土遺物…… 39
　４．近世墓…… 40
　５．まとめ …… 50
　６．自然科学分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社…… 51
　　大塚岩田遺跡における土坑内埋土の脂肪酸分析…… 51

第４章　大塚塚根遺跡の調査 ……岡野…… 54
　１．調査の経過と方法 …… 54
　２．基本層序 …… 54
　３．発掘調査の成果 …… 58
　(1)　暗褐色土（⑥層）上面検出の遺構…… 58
　(2)　黒色土（⑤層）出土遺物…… 60
　(3)　黒褐色土（④層）の遺物出土状況…… 60
　４．まとめ…… 60

第５章　考察
　大塚岩田遺跡出土の弥生時代前期後半の土器について ……岡野…… 64

図　　版
報告書抄録

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡周辺地形図　1
Fig. 2　遺跡位置図　3
Fig. 3　周辺遺跡分布図　6

大塚岩田遺跡

Fig. 4　遺構全体図　7・8
Fig. 5　基本層序図　9
Fig. 6　SI-1内SK1遺構図、出土遺物実測図　10
Fig. 7　SI-1遺構図　11
Fig. 8　SK-1遺構図　12
Fig. 9　SK-1底面遺物出土状況図　12
Fig. 10　SK-1出土遺物実測図　13
Fig. 11　SK-2遺構図　14
Fig. 12　SK-3遺構図　14
Fig. 13　SK-4遺構図　14
Fig. 14　SK-6遺構図　15
Fig. 15　SK-5遺構図　15
Fig. 16　SK-7遺構図　15
Fig. 17　SK-3・6・7出土遺物実測図　15
Fig. 18　SD-1遺構平面図　16
Fig. 19　SD-1土層断面図、遺物出土状況図　16
Fig. 20　SD-1出土遺物実測図（土器1）　17
Fig. 21　SD-1出土遺物実測図（土器2）　18
Fig. 22　SD-1出土遺物実測図（礫石器）、出土ポイント平面図　19
Fig. 23　SD-1出土遺物実測図（石器）　20
Fig. 24　SD-2遺構平面図　21
Fig. 25　SD-2遺物出土状況図、土層断面図　21
Fig. 26　SD-2出土遺物実測図（土器1）　22
Fig. 27　SD-2出土遺物実測図（土器2）　23
Fig. 28　SD-2出土遺物実測図（石器）　23
Fig. 29　SD-3（59・60・62）・SD-4（61）出土遺物実測図　23
Fig. 30　SD-3・4・5遺構平面図、土層断面図　24
Fig. 31　SD-5・6遺構平面図、土層断面図　25
Fig. 32　SD-5出土遺物実測図（土器1）　26
Fig. 33　SD-5出土遺物実測図（土器2）　27
Fig. 34　SD-5出土遺物実測図（礫石器）　28
Fig. 35　SD-5出土遺物実測図（石器）　29
Fig. 36　SD-6出土遺物実測図　29
Fig. 37　SD-7・8・9遺構図、土層断面図　31・32
Fig. 38　SD-7・8出土遺物実測図　33
Fig. 39　SD-7出土遺物実測図　33
Fig. 40　SD-8出土遺物実測図　33
Fig. 41　SD-9出土遺物実測図　33
Fig. 42　SD-7・8出土遺物実測図（石器）　34
Fig. 43　SD-10・11・12遺構平面図、土層断面図　35
Fig. 44　SD-13遺構図　35
Fig. 45　SD-14遺構図　36
Fig. 46　遺構外出土遺物実測図（土器1）　36
Fig. 47　遺構外出土遺物実測図（土器2）　37
Fig. 48　遺構外出土遺物実測図（土器3）　38
Fig. 49　遺構外出土遺物実測図（土器4）　38
Fig. 50　遺構外出土遺物実測図（石器）　39
Fig. 51　近世墓位置図　41
Fig. 52　西伯耆における弥生時代前期の環濠出土遺跡　50

自然科学分析

図1　試料採取位置図、分析結果　52

大塚塚根遺跡

Fig. 1　基本層序図　54
Fig. 2　調査区グリッド配置図　54
Fig. 3　暗褐色土（⑥層）上面遺構平面図(1)　55・56
Fig. 4　黒色土（⑤層）上面地形測量平面図　55・56
Fig. 5　調査区東西方向土層断面図　55・56
Fig. 6　暗褐色土（⑥層）上面遺構平面図(2)　57
Fig. 7　黒褐色土（④層）出土遺物分布図　58
Fig. 8　SK-1遺構図　58
Fig. 9　SD-1遺構図　58
Fig. 10　ピット埋土中出土遺物実測図　59
Fig. 11　黒褐色土（④層）出土遺物実測図（土器）　59
Fig. 12　黒褐色土（④層）出土遺物実測図（石器）　59

Fig. 13　黒色土（⑤層）出土遺物実測図　60
Fig. 14　やや暗い灰褐色土（③層）出土遺物実測図（土器）　60
Fig. 15　やや暗い灰褐色土（③層）出土遺物実測図（石器）　60

考察
図1　土器分類図　65
図2　器種組成　66
図3　ヘラ描き沈線文の条数　67

挿表目次

大塚岩田遺跡
Tab. 1　SI-1ピット規模計測表　11
Tab. 2　SD-1・2出土礫計測表　20
Tab. 3　SD-5・7・8出土礫計測表　30
Tab. 4　ピット規模計測表　39
Tab. 5　近世墓一覧表(1)　40
Tab. 6　近世墓一覧表(2)　41
Tab. 7　土器観察表(1)　42
Tab. 8　土器観察表(2)　43
Tab. 9　土器観察表(3)　44
Tab. 10　土器観察表(4)　45
Tab. 11　土器観察表(5)　46
Tab. 12　土器観察表(6)　47
Tab. 13　土器観察表(7)　48
Tab. 14　石器観察表　49
Tab. 15　環濠出土遺跡一覧表　50

大塚塚根遺跡
Tab. 1　ピット規模計測表　61
Tab. 2　遺物観察表(1)　61
Tab. 3　遺物観察表(2)　62
Tab. 4　遺物観察表(3)　63

考察
表1　甕形土器組成表　66

図版目次

PL. 1　1．調査地空撮（北から）
　　2．調査地空撮（北から）
PL. 2　1．SI-1完掘状況（北から）
　　2．SI-1内SK1遺物出土状況（北から）
PL. 3　1．SK-1完掘状況（北東から）
　　2．SK-1底面遺物出土状況（北東から）
PL. 4　1．SK-2完掘状況（南東から）
　　2．SK-3土層断面（北西から）
　　3．SK-4完掘状況（南西から）
　　4．SK-5完掘状況（西から）
　　5．SK-6遺物出土状況1（北東から）
　　6．SK-6遺物出土状況2（北西から）
PL. 5　1．SD-1完掘状況（南から）
　　2．SD-1礫出土状況（北から）
　　3．SD-1土器出土状況（南西から）
　　4．SD-1土層断面1（北から）
　　5．SD-1土層断面2（北から）
PL. 6　SD-2遺物出土状況（北から）
PL. 7　1．SD-2完掘状況（南から）
　　2．SD-2遺物出土状況（南から）
　　3．SD-3完掘状況（南から）
　　4．SD-2土層断面（南から）
　　5．SD-3土層断面（南から）
PL. 8　1．SD-4・5・6完掘状況（南から）
　　2．SD-5完掘状況（北から）
　　3．SD-5・4土層断面（北から）
　　4．SD-5土層断面（北から）
PL. 9　1．調査地東側完掘状況（南西から）
　　2．SD-5遺物出土状況（南から）
　　3．SD-5礫出土状況（北から）
PL. 10　1．SD-1・7・8完掘状況（南東から）
　　2．SD-7・8完掘状況（南から）
PL. 11　1．SD-8礫出土状況（北から）
　　2．SD-7・8土層断面（北から）

3．SD−7土層断面（南から）
4．SD−7・8土層断面（北から）
PL.12　1．SD−9礫出土状況（南から）
2．SD−14完掘状況（西から）
3．SD−10完掘状況（南から）
4．SD−9土層断面（南から）
5．SD−10土層断面（北西から）
PL.13　SD−1（14・25）、SD−2（42・45・50・52）出土遺物
PL.14　1．SD−1出土遺物
2．SD−1出土礫（一部）
3．SI−1内SK1出土石材チップ
4．遺構外出土匙形土製品
PL.15　1．遺構外出土遺物①
2．SD−1出土遺物（土器底部）
3．SD−1（S5〜S10）、SD−7・8（S25〜S29）出土礫石器
PL.16　SI−1（S1）、SK−1（S3）、SD−2（S14）、SD−5（S15〜S21）、遺構外（S34）出土礫石器
PL.17　1．遺構外出土遺物（表面）②
2．遺構外出土遺物（裏面）②
3．SD−1（S11・S12）、SD−2（S13）、SD−5（S22・S23）、SD−7（S24）、遺構外（S31〜S33）出土石器、遺構外出土石材
PL.18　SD−2出土遺物
PL.19　SK−1（2・S2・S4）、SK−6（7・8）、SD−3（60）、SD−6（117）出土遺物
PL.20　SD−5出土遺物
PL.21　1．SI−1（1）、SK−7（9）、SD−4（61）、SD−5（86・90〜92・94・96〜98・100）、SD−9（131）、遺構外（189）出土遺物
2．遺構外出土遺物③
PL.22　遺構外出土遺物④
PL.23　暗褐色土（⑥層）上面遺構完掘状況（東から）
PL.24　1．黒色土（⑤層）上面検出状況（東から）
2．黒褐色土（④層）遺物出土状況（東から）
3．暗褐色土（⑥層）上面遺構完掘状況（東から）
4．SD−1完掘状況（東から）
5．SD−1土層断面（北西から）
PL.25　ピット埋土中（1・2）、⑤層（37〜46）、④層（3・4・6・8・9・12〜14・16〜20・27・28・30・31・33・36）出土遺物
PL.26　1．黒褐色土（④層、5・7・10・11・15・21〜25・29・32・34・35）、灰褐色土（③層、48〜58）出土遺物
2．④層（S1・S2）、③層（S4）、⑤層（S4・S5）出土遺物

第１章　調査に至る経緯

１．発掘調査に至る経緯

一般国道９号は京都市から福知山市を経由して鳥取県・島根県の日本海沿いを西走し、山口市を経て下関市に至る山陰地方にとって無くてはならない物流の大動脈であるが、冬季においては積雪や凍結のため事故も発生しており、改良工事を実施することでより快適で安全な道路にすることが求められている。

道路改良工事の一環として名和町大塚地内で道路の改築が実施されるのに伴い、合流する町道の付け替えが必要となり、工事が開始された。この時点で工事用地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は認められていなかったが、工事着手後の平成12年３月30日に遺跡発見があり、同年４月10日付で遺跡発見の通知が提出された。その後、名和町教育委員会が確認調査を行い、土坑や弥生土器などが出土した。

また、同じく道路改築工事に伴い大塚岩田遺跡の約200m東に存在する老人ホームの国道への出入り道部分が道路改築の対象範囲に含まれることになり、掘削によって使用できなくなるため代替道を建設する必要が発生した。代替道予定地は平成11年度に名和町教育委員会が圃場整備に伴い発掘調査を実施した大塚塚根遺跡の隣接地であり、名和町教育委員会が実施した試掘調査においても土器、石器類が多く出土していることからも遺跡が継続していることが明らかとなった。

２遺跡とも発掘調査の必要性が認められたが、名和町教育委員会は早急な発掘調査の実施には対応できない状況にあったため、鳥取県教育委員会事務局文化課（以下、文化課）、財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）、建設省（当時、現在は国土交通省）倉吉工事事務所の３者が協議を行い、財団が調査を実施することとなった。そのうえで、西部埋蔵文化財名和調査事務所が調査を実施することになった。

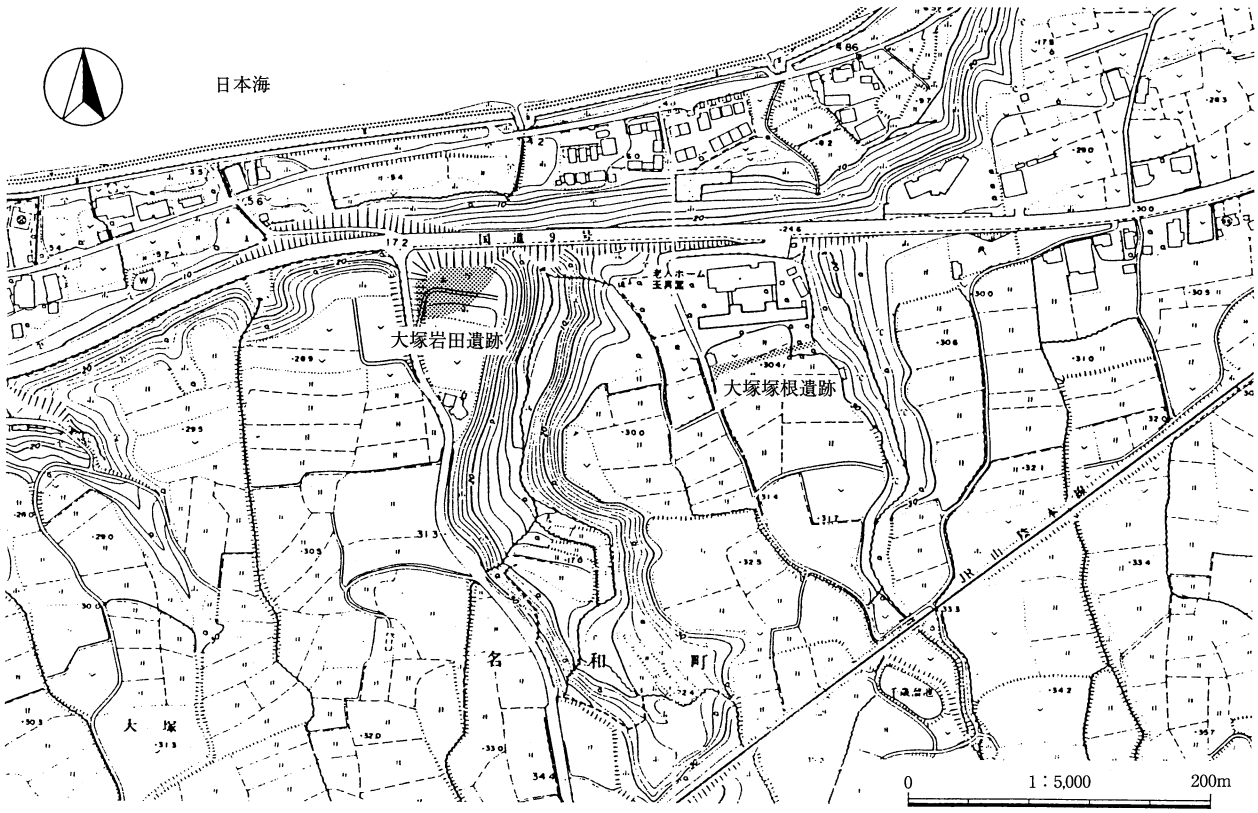


Fig. 1　遺跡周辺地形図

２．調査体制

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　有田博充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事　関　敏之（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　岡山宏徳

財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター

所　長　古井喜紀（鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　長　八木谷昇
調整係長　山枡雅美
文化財主事　高垣陽子
主任事務職員　矢部美恵
事務職員　小林順子

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財名和調査事務所

所　長　西村成徳
主任調査員　西川徹
調査員　岡野雅則
整理員　山崎裕子
　　小椋美佳

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力　名和町教育委員会

SD-１　土器出土状況（北から）

第２章　位置と環境

１．地理的環境

鳥取県は、本州の西部、中国地方の北東部に位置する。東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県とそれぞれ接し、北は日本海に面している。中国地方は標高1,200mを越える山々を擁する中国山地に隔てられ、瀬戸内海に面する山陽地方と日本海に面する山陰地方に分けられるが、鳥取県は山陰地方に属している。山陰地方と山陽地方では冬季の気候環境に大きな違いがみられ、山陰地方ではどんよりとした鉛色の雲が拡がり雪が多いのに対し、山陽地方では晴れて乾燥した日が続く。

鳥取県の県域は、東西約126km、南北約62km、面積約3,507㎢で、日本全体の約１％を占める。県内は、鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちであり、山地が県総面積の86.3％を占める。それぞれの地域には、県下を代表する三大河川である千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）が流れ、その下流域には、鳥取平野（東部）、北条・羽合平野（中部）、米子平野（西部）が発達している。各平野の海岸線には、全国的にも有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

人々の生活領域は、山間の谷奥平野と海岸に開けた沖積平野に展開している。鳥取平野には鳥取池田藩三十二万石の城下町として発展してきた鳥取市が位置し、現在県庁所在地となっている。天神川中流域には伯耆国の国府が置かれていた倉吉市が位置している。米子平野には「山陰の商都」と呼ばれ商業の町として発展してきた米子市が位置し、現在も交通の要所として発展している。米子市の北西に延びる弓が浜半島の突端部には国内有数の漁業基地である境港市が位置しており、前述した４市を中心とする39市町村により構成されている。

名和町を含む大山の北麓地域は弥山などから噴出した名和火砕流や弥山火砕流などを基盤とし、阿弥陀川などの扇状地堆積物によって土砂の堆積がさらに進行してなだらかに日本海に続く地形が形成された。その後、暴れ川であった阿弥陀川が活発な浸食を繰り返したため流域には崖となっている所も多く、海岸部も波の浸食により急な海崖が形成されている。浸食の影響をあまり受けなかった微高地部は結果として台地として残されることになり、名和町はまさにそのような地形上に位置する。東西約９km、南北約10kmのほぼ三角形状の町域を呈し、面積は約45㎢である。

調査地は近接しており、共に台地の縁辺部に位置する。大塚岩田遺跡は阿弥陀川の東方約800mの海崖上に位置する。眼下には日本海が広がり、島根半島や晴れた日には遠く隠岐も眺望する事が出来る。大塚塚根遺跡は大塚岩田遺跡の東方約200m、海崖端部から約100m南側に位置する。遺跡を挟んだ東西それぞれに南北方向に伸びる谷状地形が形成されており遺跡を区画している。今回の調査地は東西200m、南北500m程度広がると推測される遺跡のほぼ北端部にあたる。

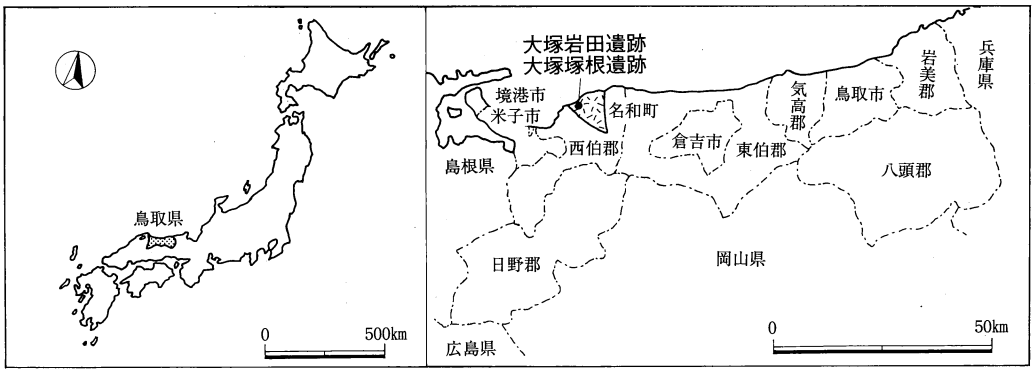


Fig. 2　遺跡位置図

２．歴史的環境

鳥取県内では明確な旧石器時代の遺構は確認されていないが、関金町野津三第１遺跡や米子市泉中峰遺跡、淀江町の小波などの大山山麓一帯を中心として旧石器が発見されている。

縄文時代草創期頃のものとされる尖頭器は、名和町の東坪字陣構、門前字上大山で有舌尖頭器、西隣の大山町内では荘田から木葉形有舌尖頭器、坊領からも有舌尖頭器が見つかっている。また、東隣の中山町からは羽田井字石立・退休寺原から槍先形尖頭器、松河原・殿河内からも有舌尖頭器が見つかっている。

縄文時代草創期の土器は見つかっていないが早期の押型文土器は名和町内の上大山第一遺跡（１）や角塚遺跡（２）から、大山町でも大道原遺跡（３）、蔵岡第１遺跡（４）、塚田遺跡（５）から、中山町では飛渡り遺跡や岩伏遺跡から出土している。前期には大山町の中高遺跡、中期には中山町の細工塚遺跡などがある。後期には大山町の原畑遺跡（６）や名和町の古御堂遺跡（７）・南川遺跡（８）がある。南川遺跡からは五角形の石組炉を持つ住居跡が検出されている。鳥取県では縄文時代の住居跡はほとんど見つかっておらず貴重な例である。また、大山山麓の丘陵部を中心に縄文時代の落し穴と推測される土坑が多数検出されている。

弥生時代前期の遺跡には大山町の上野遺跡（９）や名和町の大塚岩田遺跡（10）がある。大塚岩田遺跡からは全体形は不明ながら前期後半の土器が含まれる環濠の可能性もある溝状遺構が出土している。大山町との境に近い淀江町の今津岸の上遺跡は、海岸近くの微高地上に位置するが、Ｖ字状の断面を呈する前期末の環濠と推測される溝が検出されている。中期には名和町の茶畑山道遺跡（11）、大山町の新田原遺跡（12）、淀江町の角田遺跡（13）などがある。茶畑山道遺跡は中期中葉～後葉段階が中心で遺跡の全体像は明確とはなっていないが掘立柱建物を主とする拠点集落と位置づけられており、銅鐸形土製品など類例の少ない遺物も出土している。角田遺跡からは建物や船などを描いた線刻土器が出土している。後期の遺跡には東高田遺跡（14）がある。後期になると茶畑山道遺跡は衰退するが、代わって盛行する拠点集落が淀江平野を眼下に望む晩田丘陵上に位置する妻木晩田遺跡（15）である。淀江町から大山町にかけての幾筋もの尾根上にわたって存在する遺跡は尾根ごとに居住域や墓域などに用途が分かれており、計画的な集落構造が復元されている。この遺跡からは四隅突出型墳丘墓が大小含めて10数基まとまって出土し注目されている。

名和町において古墳時代の拠点集落は見つかっていない。さらに古墳も後期の群集墳が大部分であり、前期・中期の様相は明らかとなっていないが、妻木晩田遺跡の東方約１㎞の地点には方墳とされる徳楽方墳（16）が存在する。名和町の中期後半頃の径33mの円墳であるハンボ塚古墳（17）からは円筒埴輪と共に人物型や水鳥型の形象埴輪が出土しており貴重な資料となっている。後期には淀江町の向山丘陵上に長者ヶ平古墳や岩屋古墳などの首長系譜が辿れる向山古墳群（18）が築造されており、淀江平野を中心とする勢力が西伯耆地域で１つの勢力圏を形成していたことが判る。名和町内では茶畑古墳群（19）、門前古墳群（20）、高田古墳群（21）などが形成される。このうち、高田25号墳からは家形石棺が２基見つかっている。

白鳳時代になると寺院の建立が始まる。淀江町の上淀廃寺（22）では、調査によって彩色壁画片が出土した。白鳳期の彩色仏教壁画は法隆寺金堂壁画に次いで２例目である。さらに、伽藍配置では南北に瓦積基壇が近接して２塔並び、その北側にも基壇はないがもう１つの心礎が見つかり、３つの塔心礎が南北に並ぶ特異な伽藍配置をしていたことが明らかとなった。名和町の高田原遺跡（23）は奈良時代の寺院跡と推測される遺跡で、軒丸瓦などが出土している。

律令制の施行によって、現在の鳥取県域は西側の伯耆国と東側の因幡国という２つの国に編成される。伯耆国の政治の中心となる伯耆国庁は現在の倉吉市国府に置かれ、周囲に伯耆国分寺、国分尼寺も建立される。承平年間（931～937）に編纂された『和名類聚鈔』によれば、伯耆国は６郡で構成され、東から河村郡、久米郡、八橋郡、汗入郡、会見郡、日野郡となっている。このうち、汗入郡には東から束積郷、汗入郷、奈和郷、尺度郷、高住郷、新井郷の６郷が置かれていた。現在の名和町域は汗入郡の奈和郷に相当する。郡衙の位置は不明であるが、郡名と同じ郷名をもつ汗入郷にあったのではないかと推測される。

『平城宮跡出土木簡』には「伯耆国汗入郡尺刀郷中男作物腊一斗天平十七年十月」という平城宮に中男作物を納めた際の木簡があり、『延喜式』（927）に見える伯耆国の中男作物「紙、紅花、蓆、椎子、鮐皮、煮乾年魚、雑腊」に対応しており、律令体制下における税の一端が明らかとなっている。

奈良時代になると各国をつなぐ官道が整備され、伯耆国には因幡国から続く山陰道が設けられる。『延喜式』によれば伯耆国内には東から笏賀駅、松原駅、清水駅、和奈駅、相見駅の５駅が置かれていたという。このうち和奈駅は奈和駅の誤りと考えられるが、その位置は明確にはなっていない。しかし、汗入郡唯一の駅が名和町周辺にあったのは間違いなかろう。

律令体制の根幹を為す公地公民制は奈良時代のうちには崩れ始め、荘園という私有地が形成されていく。汗入郡内にも荘園が存在したことが記録に残されている。大山町内には国延保や所子荘・稲光保・保田荘があったが記録に現れるのは鎌倉時代以降であり、平安時代については明確ではない。名和町域については記録が残されておらず不明である。

平安時代末期になると末法思想が広まり、経典を後世に残すため経塚が作られるようになる。伯耆国においても経塚の発見はあるが、多くは東伯耆地域であり、汗入郡を含む西伯耆地域からはあまり発見されていない。そのうち、大山町の壹宮神社境内にある壹宮神社経塚は江戸時代に発見されたもので、経筒と紙本経、和鏡12枚が出土したという。盗難のため和鏡８枚が現存するのみだが、和鏡から平安時代後期の経塚と推測される。古代・中世の遺跡はあまり明らかではないが、大塚塚根遺跡（24）や押平弘法堂遺跡（25）・茶畑六反田遺跡（26）で調査が行われている。

鎌倉時代には武士の勢力が次第に強力になり始める。正嘉２（1258）年銘の残る「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」からは、地頭の荘園侵略の様子が窺われる。国延保においても貞和２（1346）年に中分状が作成され、貞和５（1349）年には権門の醍醐寺蓮蔵院と守護代との間で和与状が取り交わされている。

南北朝時代の延元２年〔建武４〕（1337）年に伯耆守護に任じられた山名時氏は、正平18〔貞治２〕（1363）年には因幡守護にも任じられ、因幡・伯耆両国に勢力を誇った。伯耆国統治の拠点となる守護所は倉吉市の田内城に置かれていたが後に打吹城に移され、山名氏による伯耆国支配が行われた。しかし、大永４（1524）年に出雲の尼子経久が伯耆に侵入し、打吹城を落城させたことで山名氏による伯耆国支配は終わりを迎えた。その後、尼子氏に替わり毛利氏が因幡・伯耆国に勢力を拡げたが、天正９（1581）年の羽柴（豊臣）秀吉によって鳥取城が兵糧攻めを受け敗れたことにより因幡国は織田氏の勢力下に入った。

翌年、織田信長が本能寺の変によって倒れると秀吉は毛利輝元と和議を結び、伯耆東３郡は羽衣石城主の南条元続、西３郡が毛利一族の吉川広家に与えられた。広家は後に隠岐国・出雲３郡・安芸１郡が加増されて十二万石余の大名となり、新たな居城とすべく米子城の構築に取りかかるが、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いで石田三成の西軍に属したため領地が岩国に転封された。また、西伯耆の南条元続も同じく西軍に属したため除封された。

その後、伯耆一国は中村忠一が領有し米子城を築くが、忠一は慶長14（1609）年に病没したため領地は没収された。その後、米子城主として加藤貞泰が入城するが元和３（1617）年には伊予国大洲に転封となり、同年には鳥取城主池田長幸、鹿野城主亀井政矩、若桜城主山崎家治もそれぞれ転封となった。入れ替わりに姫路藩主の池田光政が鳥取城主として転封してきた。翌元和４（1618）年には黒坂城主の関一政が領地を没収され光政に加増されたため、因伯両国はすべて光政の統治下に置かれることとなった。しかし、寛永９（1632）年に岡山藩主の池田光仲が国替えによって鳥取藩主に転封となり、以後明治維新まで鳥取藩は池田氏の支配下に置かれた。汗入郡は69ヶ村、拝領高は20,986石４斗であった。

明治４（1871）年廃藩置県により鳥取藩は無くなり、管下の播州３郡を姫路県に割譲する一方、隠岐国を併合して新たに鳥取県が設置される。しかし、明治９（1876）年には全国府県の整理統合に伴い鳥取県は島根県に併合されてしまった。その後、鳥取県再置運動が行われたこともあり、明治14（1881）年に再び鳥取県が分離・組織され今日に至る。

1．上大山第一遺跡	2．角塚遺跡	3．大道原遺跡	4．蔵岡第１遺跡	5．塚田遺跡
6．原畑遺跡	7．古御堂遺跡	8．南川遺跡	9．上野遺跡	10．大塚岩田遺跡
11．茶畑山道遺跡	12．新田原遺跡	13．角田遺跡	14．東高田遺跡	15．妻木晩田遺跡
16．徳楽方墳	17．ハンボ塚古墳	18．向山古墳群	19．茶畑古墳群	20．門前古墳群
21．高田古墳群	22．上淀廃寺	23．高田原遺跡	24．大塚塚根遺跡	25．押平弘法堂遺跡
26．茶畑六反田遺跡				

Fig. 3　周辺遺跡分布図

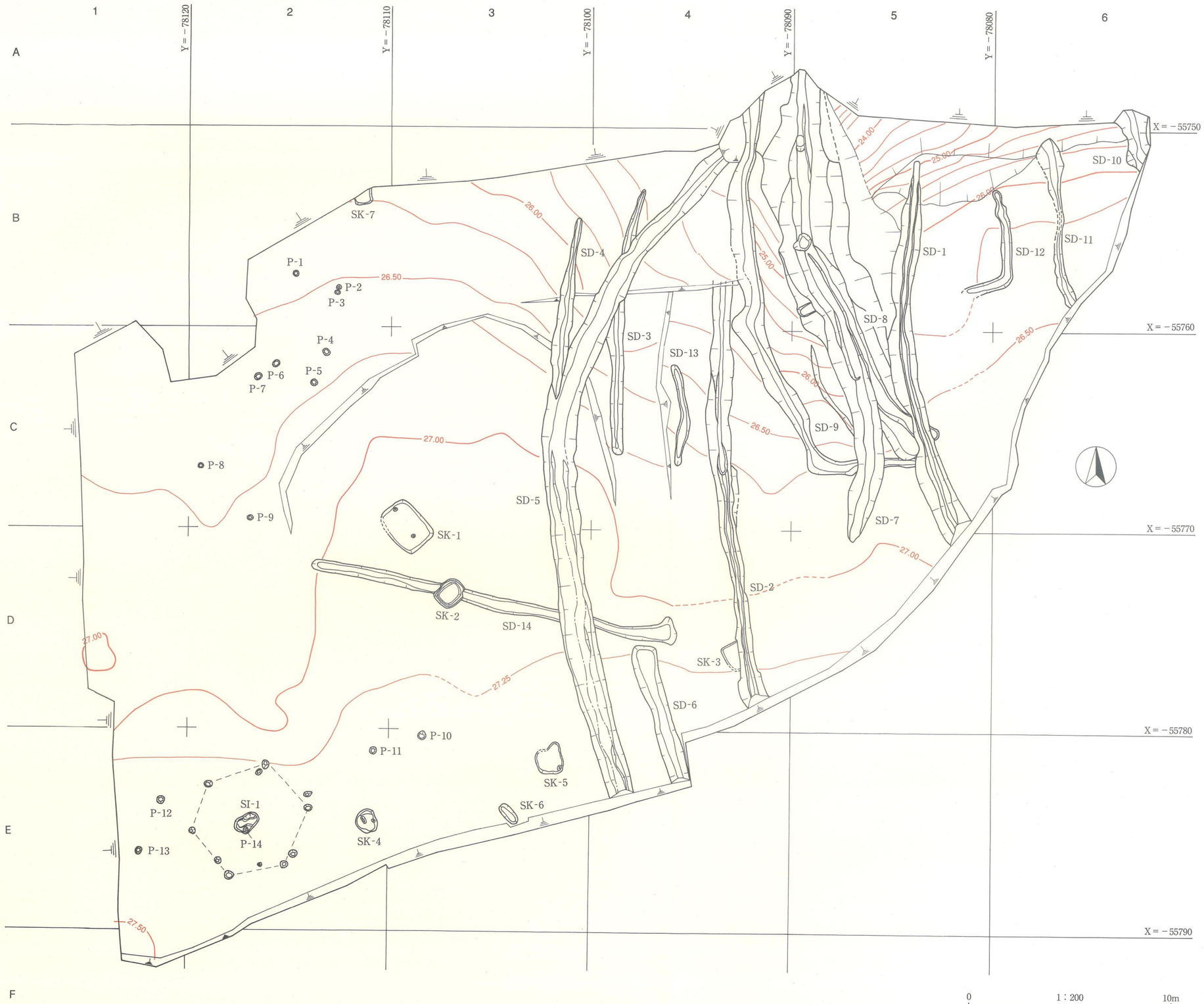

1
2
3
4
5
6
A
B
C
D
E
F
Y = −78120
Y = −78110
Y = −78100
Y = −78090
Y = −78080
X = −55750
X = −55760
X = −55770
X = −55780
X = −55790
SK-7
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
P-12
P-13
P-14
SK-1
SK-2
SK-3
SK-4
SK-5
SK-6
SI-1
SD-1
SD-2
SD-3
SD-4
SD-5
SD-6
SD-7
SD-8
SD-9
SD-10
SD-11
SD-12
SD-13
SD-14
24.00
25.00
25.50
26.00
26.50
27.00
27.25
27.50
0
1 : 200
10m

Fig. 4　遺構全体図

第３章　大塚岩田遺跡の調査

１．調査の経過と方法

大塚岩田遺跡は工事施工業者が重機による掘削工事に取り掛かって遺跡が発見された経緯もあって、国道に面する遺跡の北西側には重機の進入路が掘削によってすでに造られており、それに続く遺跡北側を中心とした部分は遺物包含層である黒色土が削平され、近世墓と推測される土坑や南北方向に伸びる溝がすでに現れていた。発掘調査は６月５日から重機、作業員の稼働を開始した。まず、重機によって黒色土の上面まで表土などの土剥ぎを行い、近世墓を検出した。表土剥ぎにおいては削平によってすでに輪郭を表していた土坑等を壊さないように注意を払った。排土は調査地北側の国道との間に落として処理した。表土剥ぎ終了後に業者に委託して国土座標第Ｖ系に基づく座標杭及び標高の設定を行った。

近世墓は掘り下げ後に人骨、遺物等の出土状況写真を撮影しそれらを取り上げていった。最後に近世墓位置図を作成して近世墓については作業を終了した。

遺構面を確認するため黒色土にトレンチを設定し掘り下げたが、黒色土中に遺構面は確認出来なかった。黒色土直下からは遺構が出土したことから、遺構検出のためには黒色土を除去することが必要と判明した。しかし、トレンチ掘り下げ時に黒色土中から多くの遺物が出土しており、分層が困難な黒色を呈する土のため認識は出来なかったが、遺構面は本来黒色土中に存在する可能性も想定され、人力により慎重に掘り下げを行った。

溝状遺構からは多数の遺物の出土が想定されたため、層位ごとの取り上げを目的として約５m間隔にベルトを設定し、土層断面観察を行いながら掘り下げを実施した。

調査がほぼ終了を迎えた８月５日（土曜日）に現地説明会を開催した。暑い盛りではあったが地元の方を中心に見学者があり、遺跡周辺の以前の様子なども聞くことができた。８月10、11日に業者に委託してラジコンセスナ機による調査後空中写真を撮影し、11日をもって調査を終了した。

２．調査地の現状と基本層序

調査地の現状　大塚岩田遺跡は大山町と名和町の町境をなす阿弥陀川の河口部東岸約800mの地点に位置する。阿弥陀川の東岸は台地状となっているが、この台地は新期火山麓扇状地堆積物および河岸段丘堆積物によって形成されたものであり、浸食によって河床の低下した阿弥陀川とは10m程度の比高差が存在している。

調査地は、調査実施前には畑地及び雌竹が繁茂する荒れ地であった。

基本層序　土層堆積状況の観察は、調査地南西隅の壁面で行った。表土から厚さ20cm程度の耕作土（①層）の直下は、大山の火山噴出物に由来する黒色系（②層、③層）の土壌が厚さ50～60cm程度堆積する。近世墓は②層上面において検出した。②層中には多量の弥生時代前期の土器を包含する。分層は困難であるが、観察を行った調査地南西隅の壁面周辺では、27.6～27.7m前後のレベルにおいて遺物が出土しており、本来の遺構面は②層の中に存在するものとみられる。同時に検出した古墳時代後期の遺構も②層に遺構面をもつとみられることから、②層は弥生時代前期～古墳時代後期を中心とする時期に堆積したものと考えられる。③層は、②層と④層の漸位的な様相を呈している。基本的には③層上面において遺構検出を行った。③層及び④層から遺物は出土していない。

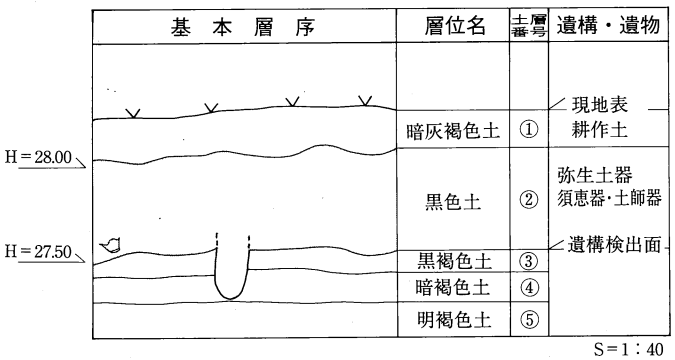


Fig. 5　基本層序図

３．発掘調査の成果

(1)　建物跡

SI－１（Fig. ６・７　Tab. １　PL. ２・14・16・21）

調査地南西隅のE－２グリッドに位置する。P－１～P－６の６本を主柱穴とする建物と想定される。検出面からは遺物が出土していないことから、床面は黒色土中に存在するものと想定される。竪穴状の掘り込み、周壁溝は確認できないが、遺構面が上層の黒色土中にあると推測されることから、本来的には浅い掘り込みを伴う可能性もある。

柱穴間距離は、P－１―P－４間が約5.9m、P－２―P－５間が約5.9m、P－３―P－６間が約5.6mである。

主柱穴の掘り方の直径は38～49㎝程度であり、底面の標高は、いずれの主柱穴とも27.0m前後であり、大きな差違はみられない。P－７～P－11は補助的な柱もしくは建て替えに伴う可能性がある。P－２、P－６の埋土中から土器片が出土した。

主柱穴で囲まれた中央部において土坑１基（SI－１内SK１）を検出した。規模は、長軸1.32m、短軸0.88m、検出面からの深さは最も深い中央部において16㎝を測る平面がいびつな楕円形を呈する土坑である。埋土中から、弥生土器の底部１、敲打痕を有する礫石器S１、多数の石材のチップが出土した。

チップには、黒曜石のほか、碧玉、サヌカイト、磨面をもつ粘板岩の小片が存在した。出土状況は、平面的には土坑の中央付近における分布密度が高く、周辺部は密度が低い。埋土の一次堆積層（③層）からの出土も皆無ではないが、全体の８割以上が①層ないし②層から出土したものである。黒曜石のチップが最も多く総重量28.0g、サヌカイトは17.0gである。石器製作に関連する土坑と考えられるが、製品や未製品、石核とみられる破片は出土していない。

ピット埋土中、および土坑埋土中から出土した土器は、砂粒を多量に含む胎土、調整などから、弥生時代前期から中期にかけての特徴と一致する。また、SI－１上層の黒色土中から出土した土器は、弥生時代前期の範疇を逸脱するものは皆無である。調査地内の遺構分布状況などからみても弥生時代前期後半の所産と考えられる。

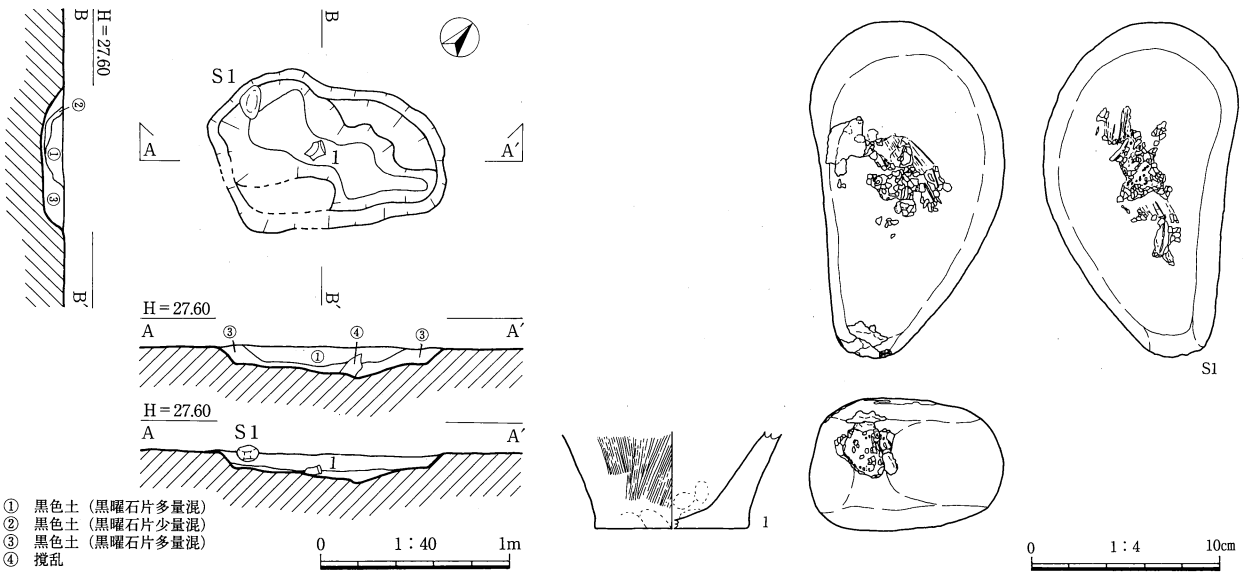


Fig. ６　SI－１内SK１遺構図、出土遺物実測図

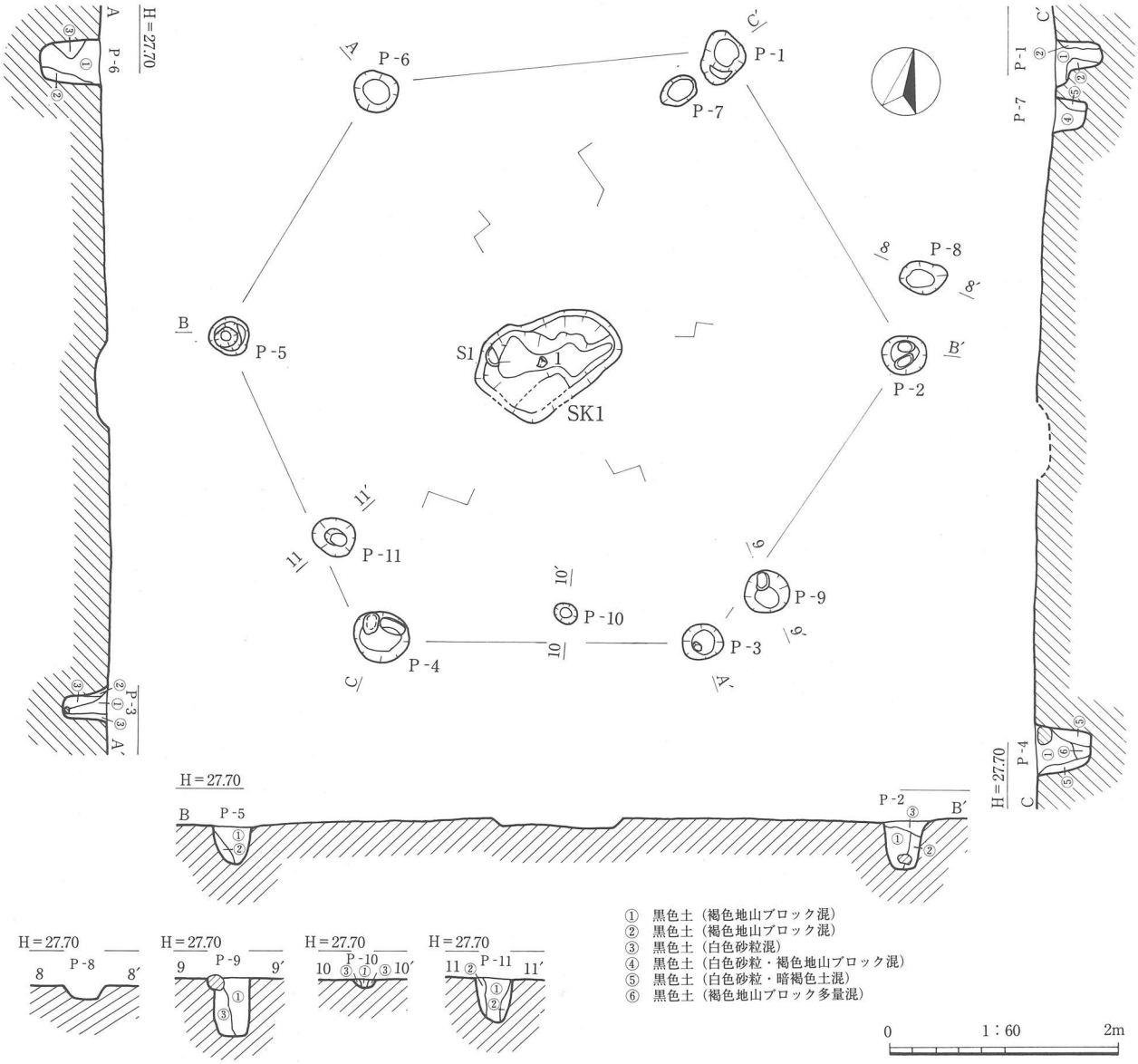


Fig. 7　SI-1遺構図

SI-1内SK1出土石材チップ

ピット番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　物
P-1	47	35	43	—
P-2	42	34	43	土器片
P-3	35	33	37	—
P-4	49	45	52	—
P-5	34	32	38	—
P-6	38	36	32	土器片
P-7	35	23	28	—
P-8	41	30	13	—
P-9	44	40	38	—
P-10	20	17	9	—
P-11	37	33	42	—

Tab. 1　SI-1ピット規模計測表

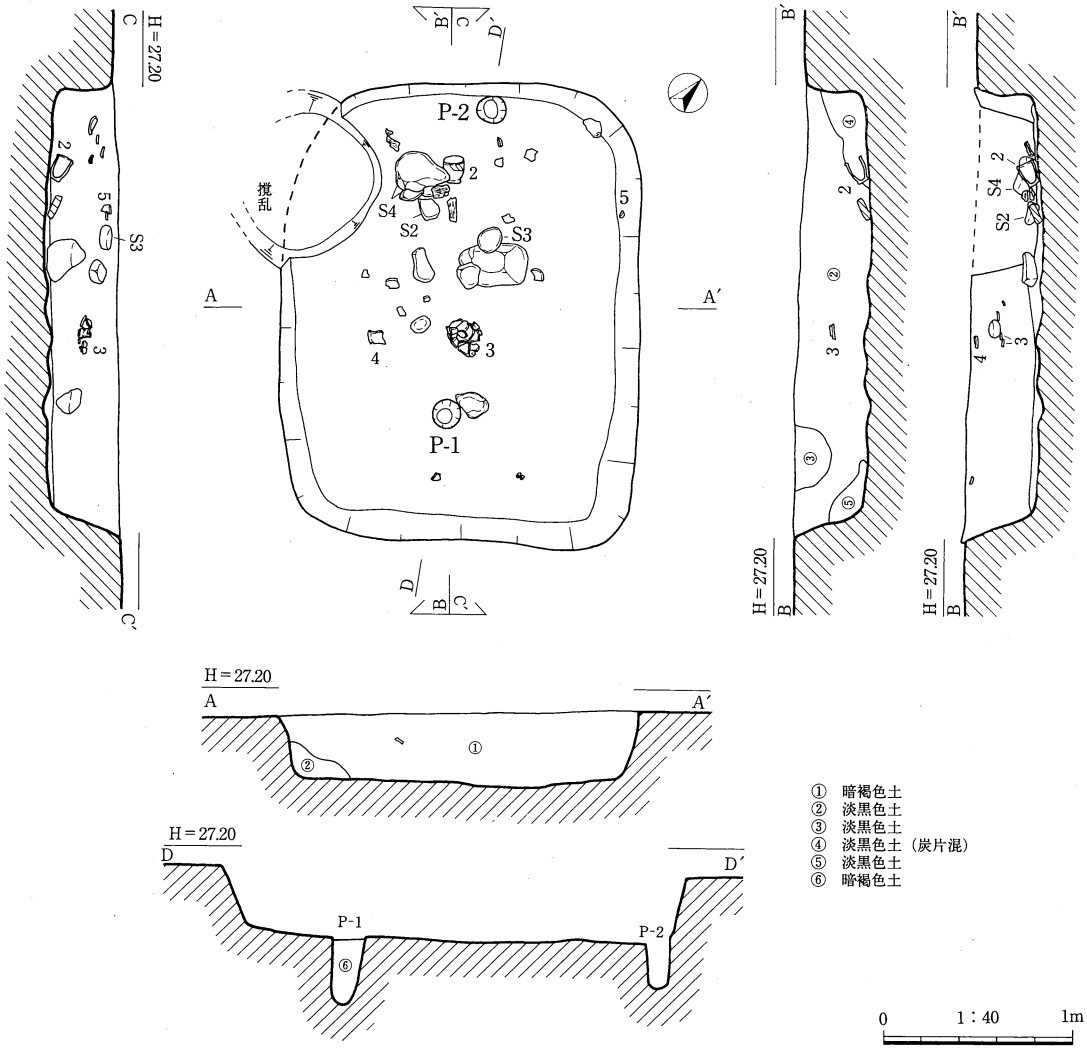


Fig. 8　SK－１遺構図

(2)　土坑

SK－１（Fig. 8～10　PL. 3・16・19）

C－３、D－３グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈するが、西隅を近世墓に破壊されている。長軸2.45m、短軸1.89m、検出面からの深さは最も深い土坑中央付近において約40cmを測る。底面の標高は26.7mでほぼ水平である。

埋土は黒褐色土であり、下層においては炭化物を含有する。堆積状況は自然堆積とみて矛盾しない。底面に２個のピットを検出した。規模は、P－１が直径15cm、土坑底面からの深さ34cm、P－２は直径14cm、深さ25cmである。

土坑内北西側の底面直上から、小型の甕２、砥石S２、礫石器S４、炭片が出土した。上面が平坦で、敲打痕・磨り痕をもつ礫S４の南東側には砥石S２があり、北側には、ほぼ完形の甕２が口縁部を北西方向に向けて倒れた状態で出土した。いずれの遺物も火を受けた痕跡がうかがわれ、周辺の埋土中からも多量の炭化物が出土した。

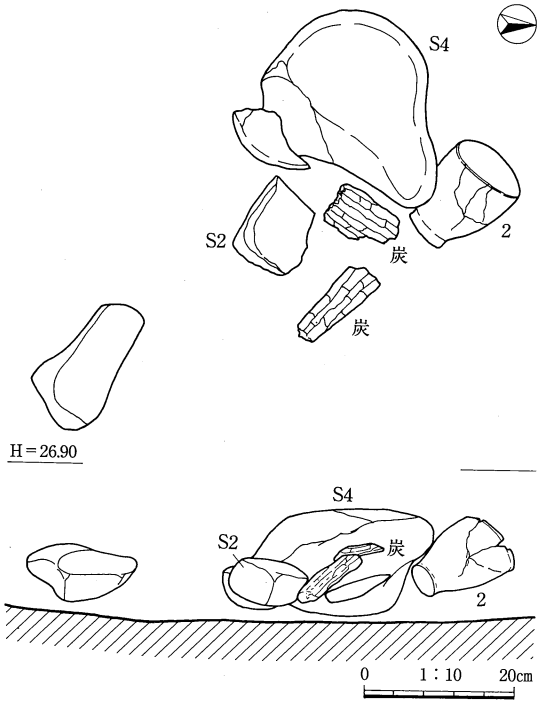


Fig. 9　SK－１底面遺物出土状況図

埋土中からは、ほぼ完形に復元できる甕3、甕4、混入と思われる突帯文土器5、礫石器S3が出土した。また、使用痕の認められない礫6個体も出土している。

遺構の時期は、甕2・3・4から弥生時代前期後半に比定される。

SK-2（Fig.11　PL.4）

D-3グリッドに位置する。土坑中央付近を東から西に向けてSD-14によって切られている。

規模は、長軸1.49m、短軸1.26m、検出面から底面までの深さは土坑中央付近で15cmを測る。平面形は、隅丸長方形状を呈する。底面の周囲には、浅い溝が掘削されている。溝底での幅が7～15cm、土坑底面からの深さは2～3cm程度である。底面の標高は27.0mでほぼ水平である。埋土は黒褐色系であり、土層断面から自然堆積とみられる。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK-3（Fig.12・17　PL.4）

D-4グリッドに位置する。後述するSD-2と切り合うが、その前後関係は不明である。埋土から自然堆積とみて矛盾しない。全体形は不明であるが、残存部分から方形状を呈していたことが推測される。残存部の規模は長軸95cm、短軸86cm、検出面からの深さは最大で8cmである。

遺物には弥生土器の底部6がある。砂粒を含む胎土や調整などから弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

SK-4（Fig.13　PL.4）

E-2グリッドに位置する。いびつな楕円形状を呈する底面には深さ2～3cm程度のごく浅い窪みが2ヶ所存在する。長軸120cm、短軸100cm、検出面からの深

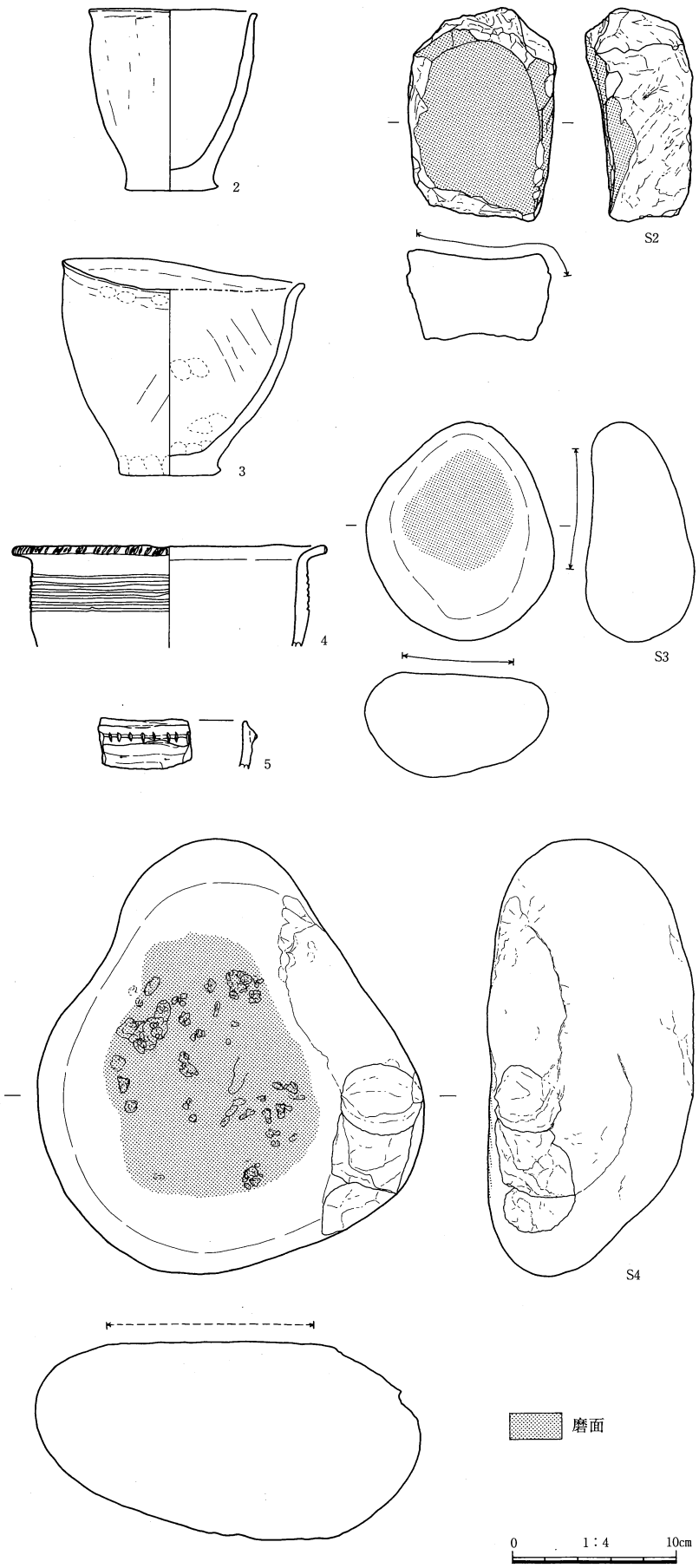


Fig.10　SK-1出土遺物実測図

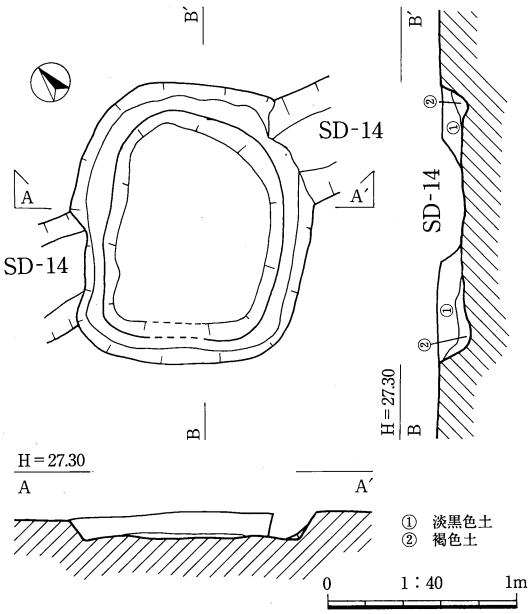


Fig.11　SK－２遺構図

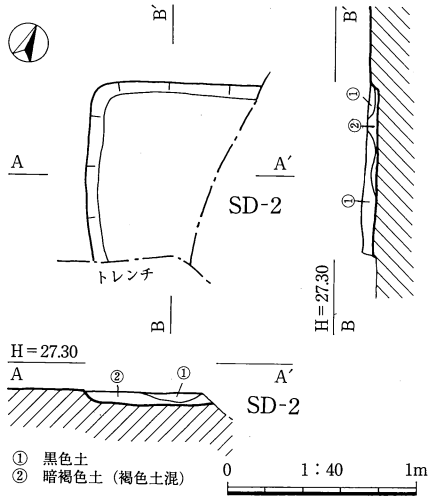


Fig.12　SK－３遺構図

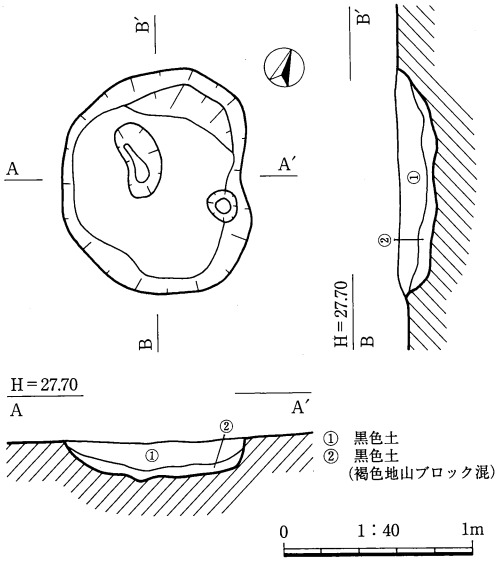


Fig.13　SK－４遺構図

さは最大で22cmである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK－５（Fig.15　PL.４）

E－３グリッドに位置する。長軸166cm、短軸151cmの不整な平面形態を呈する。検出面からの深さは最大で13cmを測る。底面の東南隅に深さ５cm程度の窪みが１つある。底面の標高は27.3mでほぼ水平である。

埋土から自然堆積とみて矛盾しない。埋土中から長軸16cm、短軸８cmの礫が出土したが、使用痕は認められなかった。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK－６（Fig.14・17　PL.４・19）

E－３グリッドの調査地際に位置する。平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、長軸長118cm、短軸長56cm、検出面からの深さは最大で18cmである。

土坑の南東端からは、須恵器の坏身７と土師器の碗８が共伴して出土した。土器は、底部を上にした須恵器坏身７の上に、土師器碗８が同じく底部を上にして重ねられていた。

埋土は黒褐色系の土である。

出土した土器から６世紀中葉の土坑と推測される。

土器の出土状況から土壙墓の可能性を考えて埋土の脂肪酸分析を実施した。詳細は６．自然科学分析を参照していただきたいが、遺体の埋葬は考えにくいとの結論であった。ただし、これは分析試料採取地点が適当でなかった点や、試料点数が少ないなどの点から判断は困難であるという前提の上での結論であり、遺体埋葬の可能性が完全に否定されたものではない。調査地内からは他に同様の遺構が検出されていないため比較検討が出来ないが、少量ではあるがアラキジン酸などの哺乳類の臓器などに由来する可能性が高い脂肪酸が検出されている点はこの土坑が土壙墓である可能性を否定するものではない。

SK－７（Fig.16・17　PL.21）

B－２グリッドに位置する。土坑北側が削平されているために全体形は不明であるが、残存部分から平面形は方形状を呈していたと推測される。残存部での長軸88cm、短軸70cm、検出面からの深さは最大で27cmになるが、調査開始以前にかなり削平を受けており遺存状態は悪い。

土坑からは、出土状態が明確ではないものの、弥生土器の甕９が出土したことから、弥生時代前期後半の遺構と推測される。

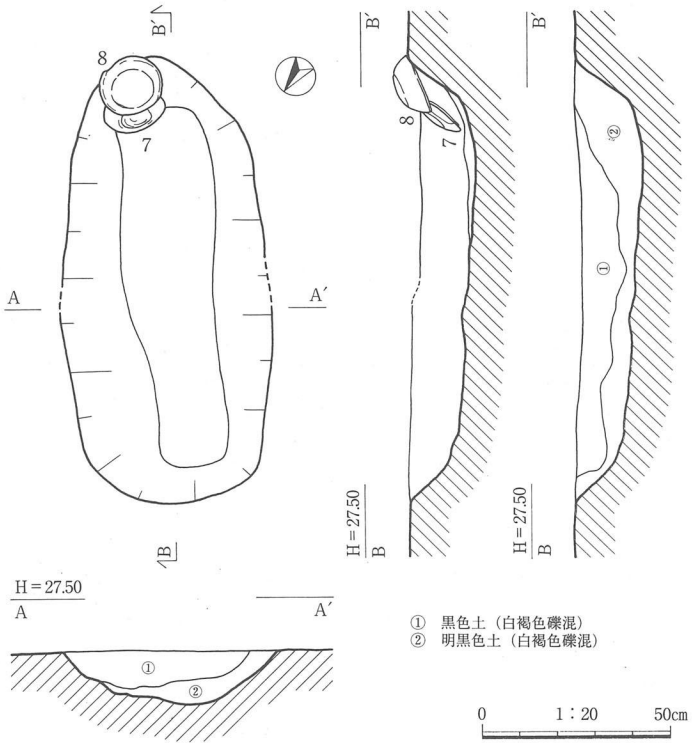


Fig. 14　SK－6 遺構図

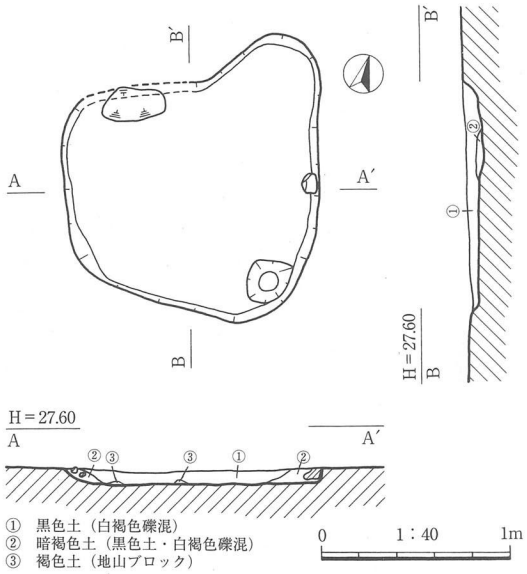


Fig. 15　SK－5 遺構図

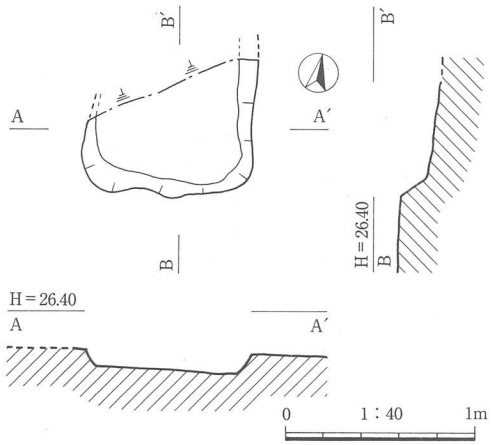


Fig. 16　SK－7 遺構図

SI－1 遺物出土状況（東から）

調査地を望む（西から）

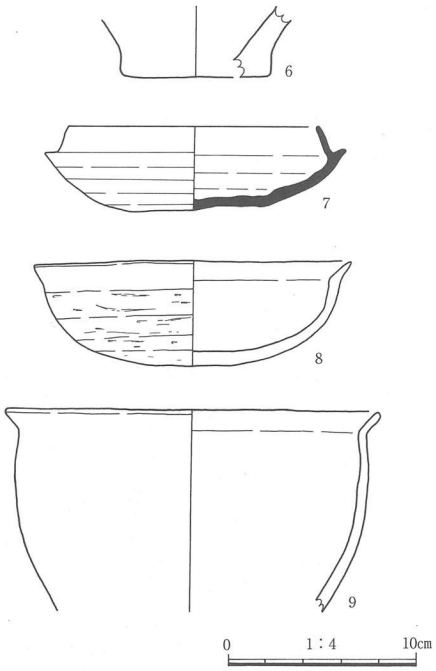


Fig. 17　SK－3・6・7 出土遺物実測図

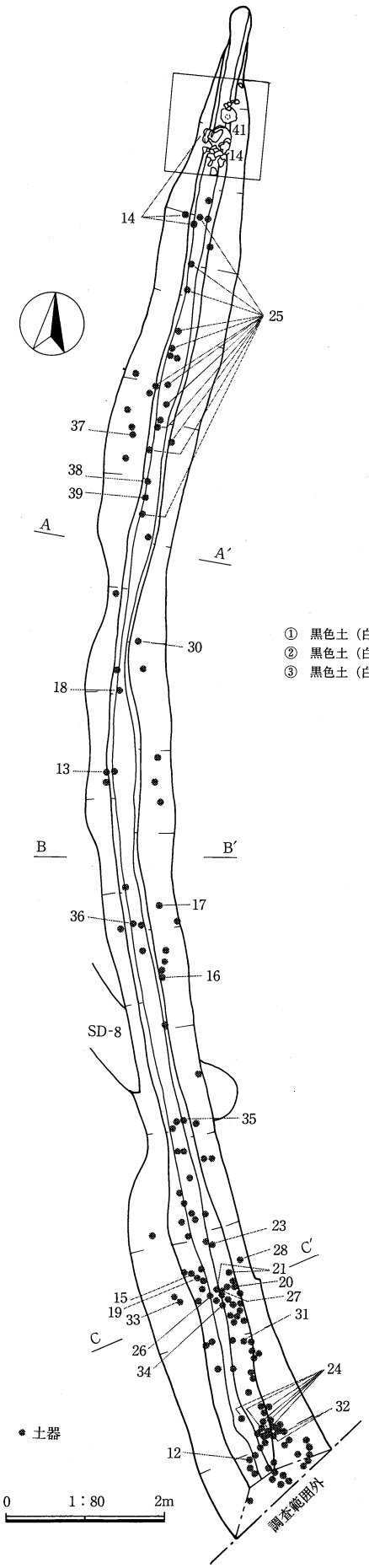


Fig. 18　SD－１遺構平面図

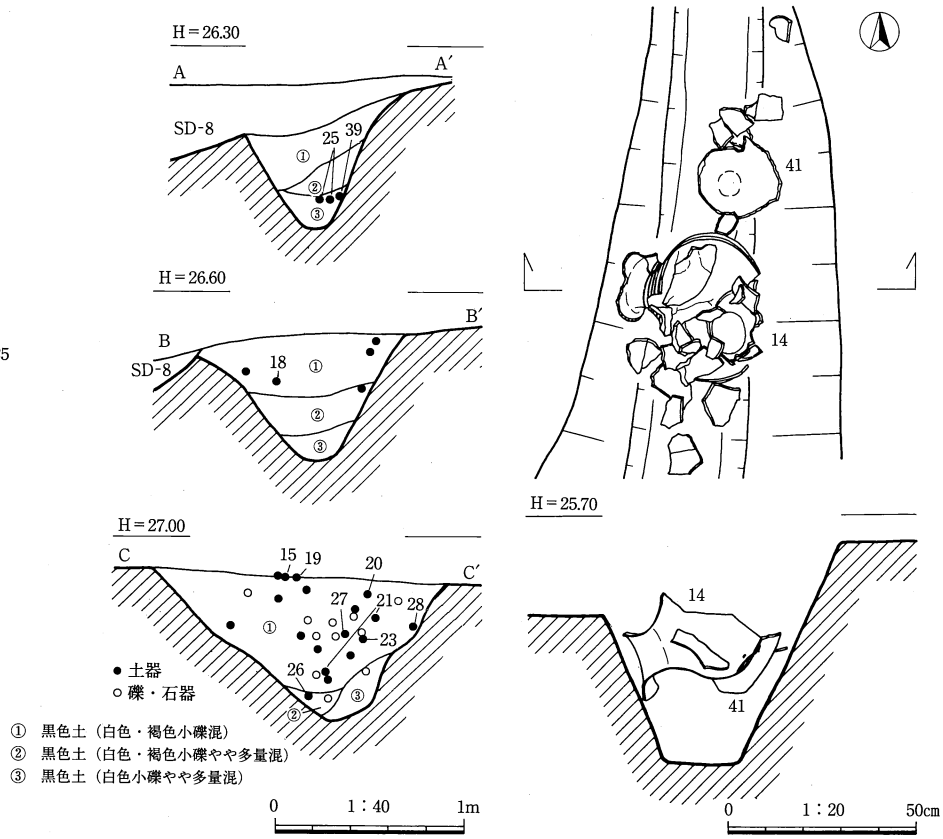


Fig. 19　SD－１土層断面図、遺物出土状況図

(3)　溝状遺構

SD－１（Fig. 18～23　Tab. 2　PL. 5・10・13～15・17）

遺構　B－４、C－４グリッドに位置する。南北方向を主軸とし、東側へゆるやかに湾曲する溝状遺構である。北端部は削平されているが、本来的にはさらに北方向に伸びていたものと推測される。検出した全長は19.6m、最も残存状態の良い南端部においては幅1.6m、検出面からの深さ0.85m、底面の幅は10～16cmを測る。断面形はV字状を呈するが、底面から約10～30cmのレベルにおいて弱い傾斜変換が認められる。底面での標高は、最も高い遺構南端において26.1m、北端では24.9mであり、南から北へ緩やかに傾斜している。

埋土は、いずれも黒褐色系の土である。掘り直しが行われた痕跡は窺えない。堆積状況からみて自然堆積と考えられるが、遺構の東西どちらか一方からの顕著な流入は認められない。遺物出土状況の項目で述べるが、層位的に厚さ35cmの範囲から出土した複数の土器が接合している（甕25）。また、遺構内から出土した遺物に風化や摩滅が認められないことから、比較的短期間に遺構は埋没したものと考えられる。

遺物出土状況　埋土中から、土器、石製品、多量の礫が出土した。土器は、壺10～15、甕16～20・22～32、鉢21、土器底部33～41である。同一個体を排除した上で、未実測のものも含めて口縁部１点を１個体

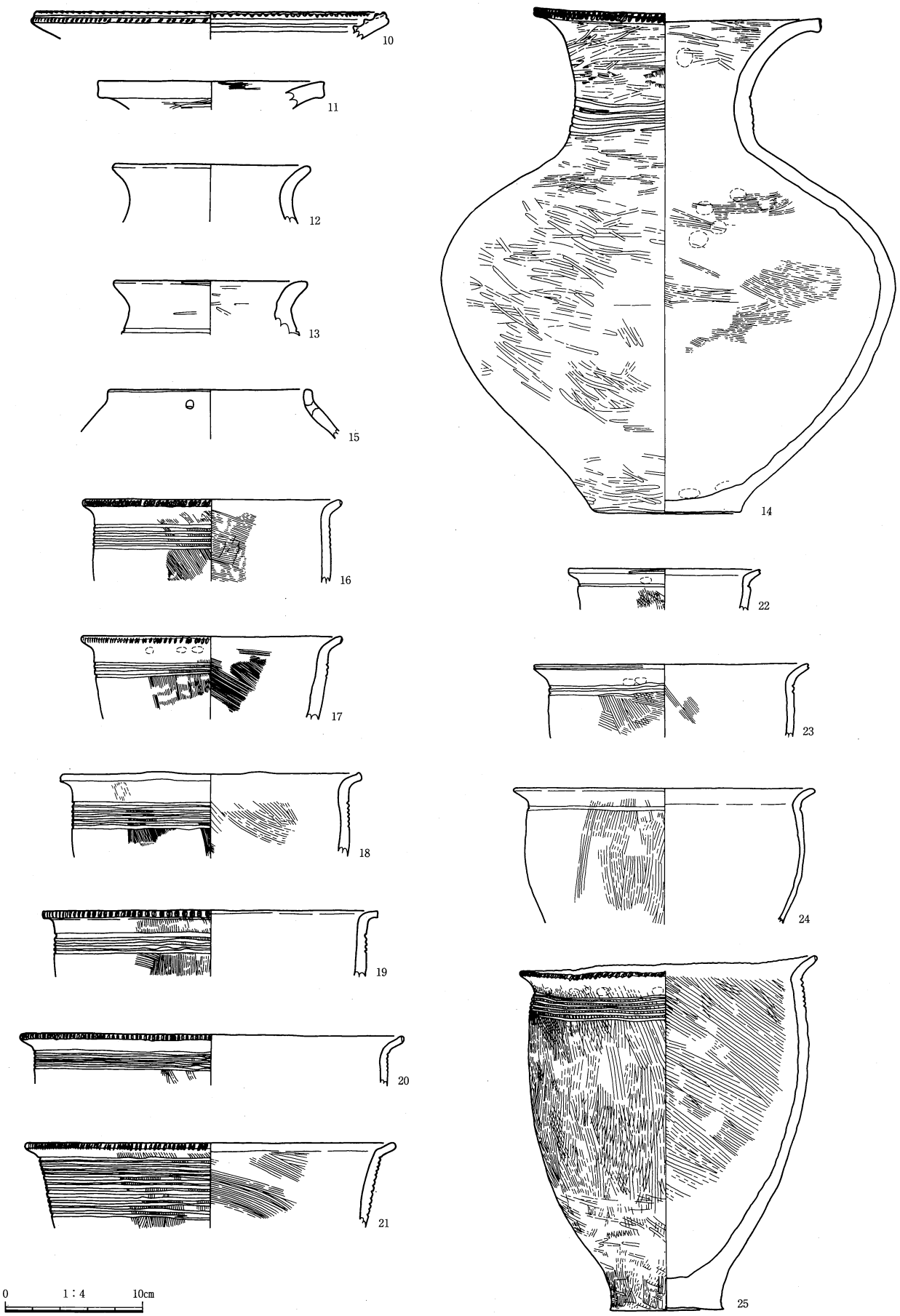


Fig. 20　SD−1 出土遺物実測図（土器 1）

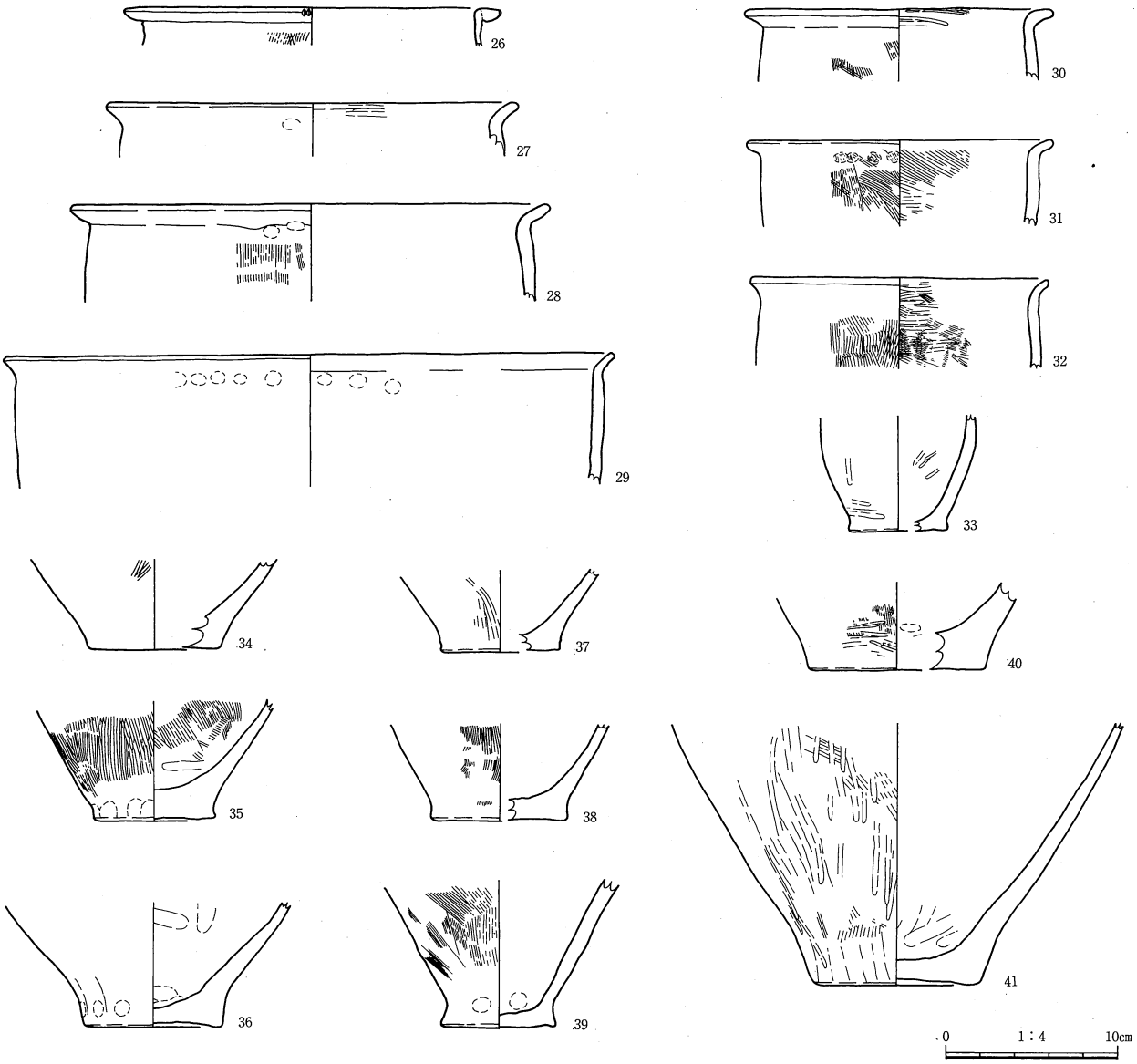


Fig. 21　SD−１出土遺物実測図（土器２）

として換算すると、壺８個体、甕18個体、鉢１個体となる。

遺物のうち、一次堆積層（③層）内から出土したものは僅かであり、実測に耐えない。大半の遺物が底面から20～50cm程度浮いた状態で出土した。出土状況は、壺14を除くと平面的にも層位的にも散在的である。北端付近から壺14が出土した。底面から20cm程度浮いた位置から、口縁部を西側に向け倒れた状態で出土した。ほぼ完形に復元できる個体である。壺14の南側より甕25が出土した。平面的には長さ約3.9mの範囲、層位的には底面から35～70cm浮いた状態で出土した破片が接合し、胴部の一部を除いてほぼ完形に復元できた。

礫は計116個が出土しており、中には石器として使用された痕跡が窺える個体８個が含まれる。このうち、S５～10を図化した。出土状況は、遺構北半分は平面的にも層位的にも散在的な様相を呈するが、南端付近においては約70個が集中して出土した。南端付近出土の礫は底面からすべて20cm以上浮いており、30～50cm程度浮いた状態のものが最も多い。礫の大きさは、長軸が10～15cm、重さ0.8～1.5kg程度のものが最も多い。詳細は出土礫計測表（Tab. ２）を参照願いたい。

石製品にはS11がある。底面より29cm浮いて出土した。粘板岩製で大部分が欠損するが、石鏃や石剣など武器形の石製品の先端部と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物の器形や、ヘラ描き沈線文を多条に施文した個体の存在などから、前期後半（松本岩雄編年Ｉ−４段階）に相当するものと考えられる。

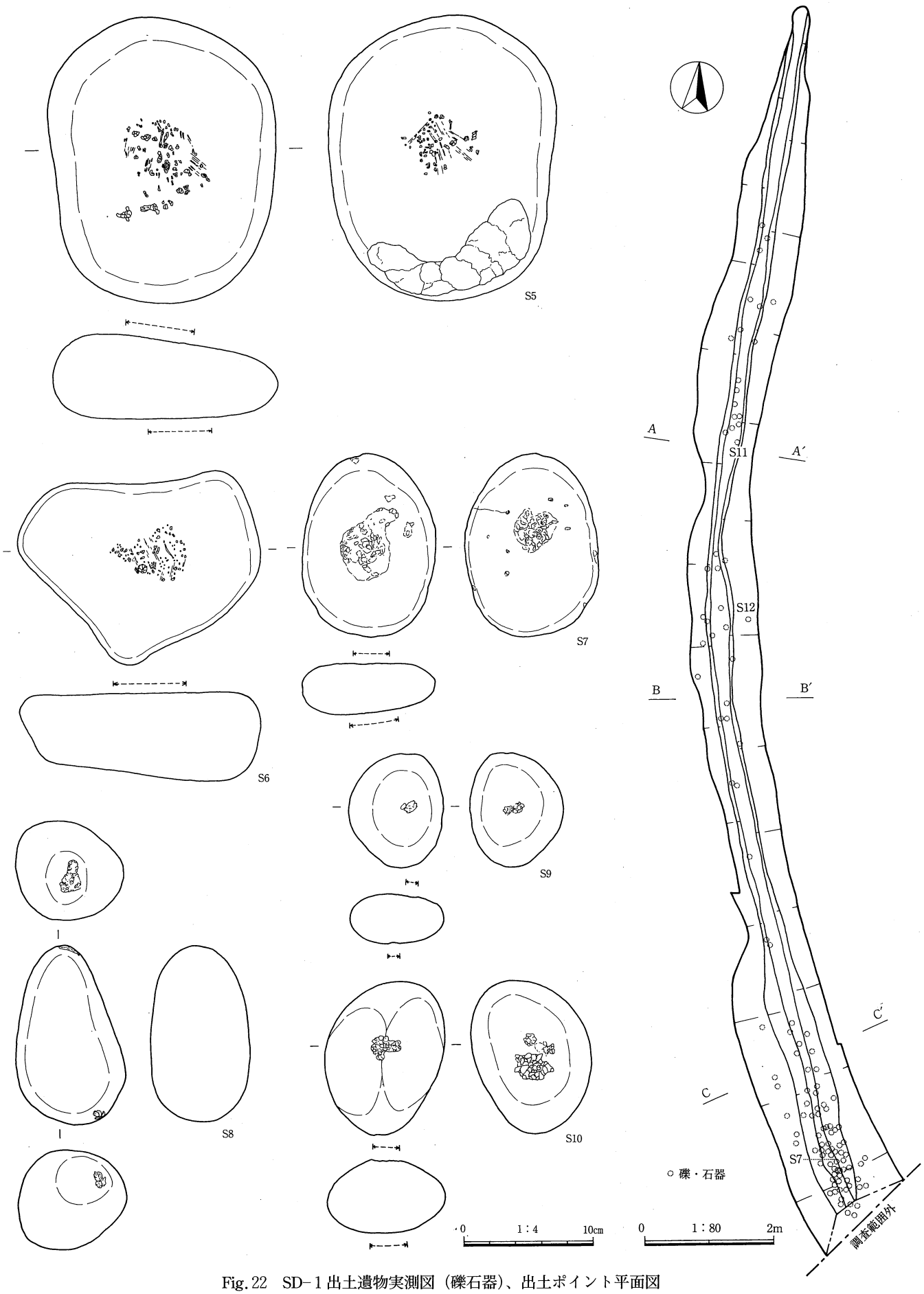


Fig. 22　SD−1 出土遺物実測図（礫石器）、出土ポイント平面図

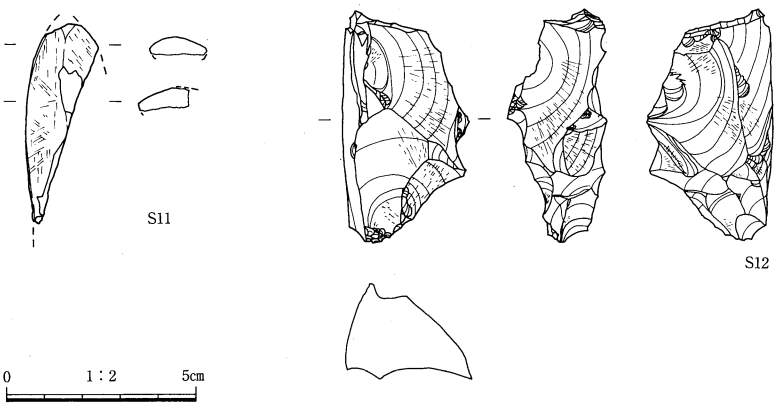


Fig. 23　SD－１出土遺物実測図（石器）

SD－２（Fig. 24～28　Tab. 2　PL. 6・7・13・16～18）

遺構　C－４、D－４グリッドに存在する。削平により北側の状況が明らかではないが、SD－１、SD－３同様に、緩やかに東方向に湾曲する平面形態を呈していたと推測される。検出した全長は21.3m、幅は0.5～1.3m、検出面から底面までの深さは、概ね0.5～0.6mであるが、残存状況の良くない土層断面D-D′ライン付近は0.2～0.3m

遺構名	遺物番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)
SD－１	S５	22.2	17.3	6.5	3.92
SD－１	S６	13.9	18.8	6.8	2.04
SD－１	S７	14.3	10.3	4.0	0.85
SD－１	S８	13.7	8.3	7.2	1.20
SD－１	S９	8.9	7.3	3.8	0.35
SD－１	S10	11.8	9.2	5.7	0.77
SD－１	—	21.0	18.5	13.8	3.16
SD－１	—	11.2	9.5	5.5	0.54
SD－１	—	21.0	13.7	9.2	3.05
SD－１	—	15.4	11.7	8.6	1.35
SD－１	—	13.7	10.8	9.3	1.18
SD－１	—	14.6	10.5	7.5	1.15
SD－１	—	13.2	12.3	8.1	1.22
SD－１	—	15.1	12.3	7.9	1.36
SD－１	—	16.2	13.0	10.7	2.26
SD－１	—	17.2	11.7	6.8	1.36
SD－１	—	14.7	9.5	3.1	0.46
SD－１	—	14.2	11.1	7.3	1.13
SD－１	—	16.1	13.3	8.4	1.21
SD－１	—	17.6	12.1	17.3	1.16
SD－１	—	16.5	9.3	7.0	1.05
SD－１	—	11.9	9.4	6.0	0.60
SD－１	—	13.6	10.3	8.6	1.02
SD－１	—	14.6	12.6	6.9	0.84
SD－１	—	12.4	9.6	5.9	6.80
SD－１	—	14.2	12.6	7.3	1.21
SD－１	—	18.7	14.8	4.5	1.23
SD－１	—	10.2	9.6	6.4	0.58
SD－１	—	10.8	10.5	8.7	0.81
SD－１	—	9.5	9.5	6.3	0.50
SD－１	—	13.7	11.4	5.1	0.84
SD－１	—	13.5	13.5	10.4	1.41
SD－１	—	14.2	7.6	4.1	0.23
SD－１	—	7.2	6.6	2.6	0.10
SD－１	—	12.2	11.0	4.1	0.60
SD－１	—	11.6	9.5	4.3	0.46
SD－１	—	13.1	11.9	5.0	0.77
SD－１	—	15.2	11.7	8.7	1.45
SD－１	—	6.0	4.7	3.1	0.07
SD－１	—	24.2	14.4	10.6	3.45
SD－１	—	19.9	16.4	7.0	3.70
SD－１	—	12.5	10.1	7.2	0.75
SD－１	—	18.1	15.0	11.0	3.54
SD－１	—	10.3	9.6	6.4	0.88
SD－１	—	12.6	12.4	8.6	1.39
SD－１	—	15.1	10.6	11.1	1.39
SD－１	—	13.8	9.9	8.2	1.23
SD－１	—	8.6	11.2	7.6	1.45
SD－１	—	11.3	9.3	8.1	1.03

遺構名	遺物番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)
SD－１	—	15.6	11.0	9.0	2.18
SD－１	—	19.5	16.1	7.9	3.16
SD－１	—	25.9	16.8	8.3	4.92
SD－１	—	19.4	14.8	6.4	2.71
SD－１	—	15.4	12.5	8.1	1.75
SD－１	—	22.7	16.0	7.6	3.44
SD－１	—	12.8	11.5	9.5	1.01
SD－１	—	13.4	10.7	6.6	1.19
SD－１	—	15.8	10.9	10.6	1.94
SD－１	—	11.0	9.6	6.5	0.82
SD－１	—	8.4	7.1	3.5	0.29
SD－１	—	7.6	6.9	3.2	0.20
SD－１	—	7.5	6.8	3.7	0.23
SD－１	—	9.1	7.8	6.0	0.48
SD－１	—	8.8	6.3	6.4	0.36
SD－１	—	10.9	9.4	6.0	0.57
SD－１	—	10.4	6.9	5.5	0.55
SD－１	—	11.5	10.4	8.3	1.10
SD－１	—	12.5	9.0	8.3	1.07
SD－１	—	9.7	8.7	7.0	0.64
SD－１	—	14.0	10.5	8.6	1.42
SD－１	—	13.7	9.4	6.9	0.96
SD－１	—	13.4	12.3	8.7	1.90
SD－１	—	10.1	8.6	7.5	0.88
SD－１	—	12.4	9.5	9.9	1.31
SD－１	—	12.5	11.8	7.0	1.20
SD－１	—	15.3	11.7	9.0	1.68
SD－１	—	10.4	10.4	8.4	0.95
SD－１	—	13.3	11.2	7.9	1.45
SD－１	—	16.1	11.5	8.2	2.52
SD－１	—	15.7	12.3	6.8	1.62
SD－１	—	12.2	12.2	6.8	1.29
SD－１	—	11.9	7.2	4.6	0.56
SD－１	—	11.1	8.5	4.1	0.53
SD－２	S14	30.5	18.4	9.6	4.56
SD－２	—	8.7	7.4	3.8	0.16
SD－２	—	11.8	9.0	7.6	1.04
SD－２	—	10.3	9.5	7.4	0.54
SD－２	—	12.6	9.4	6.6	0.91
SD－２	—	17.0	10.4	6.4	1.59
SD－２	—	1.6	10.7	6.9	1.12
SD－２	—	7.3	4.6	2.3	0.11
SD－２	—	7.5	6.1	2.4	0.15
SD－２	—	9.0	7.9	6.6	0.35
SD－２	—	10.9	9.4	8.0	0.97
SD－２	—	14.6	11.4	6.7	1.37
SD－２	—	14.9	13.8	7.5	1.83
SD－２	—	12.4	8.6	4.1	0.61
SD－２	—	8.8	6.4	5.6	0.39

Tab. 2　SD－１・２出土礫計測表

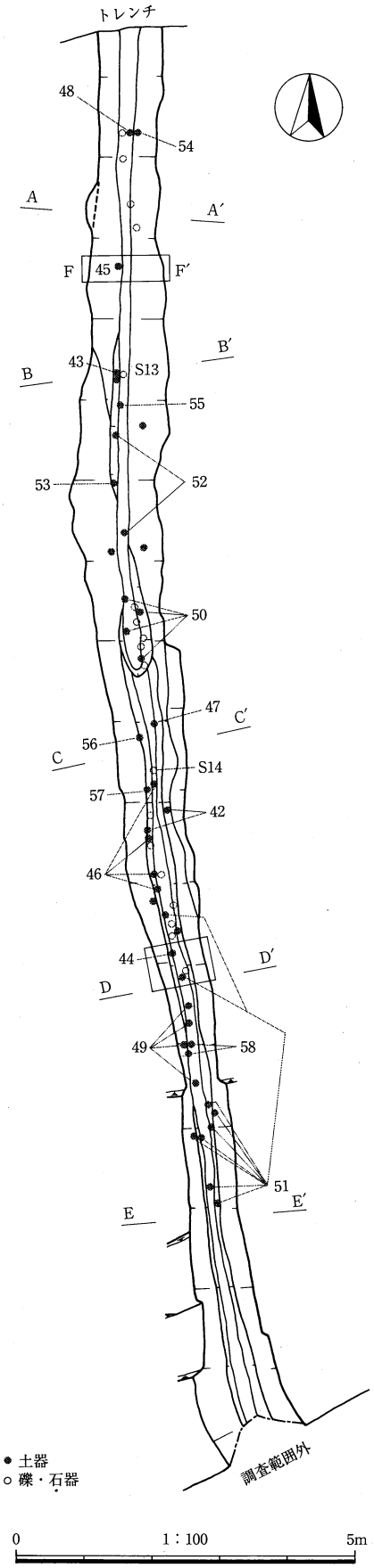


Fig. 24　SD－2遺構平面図

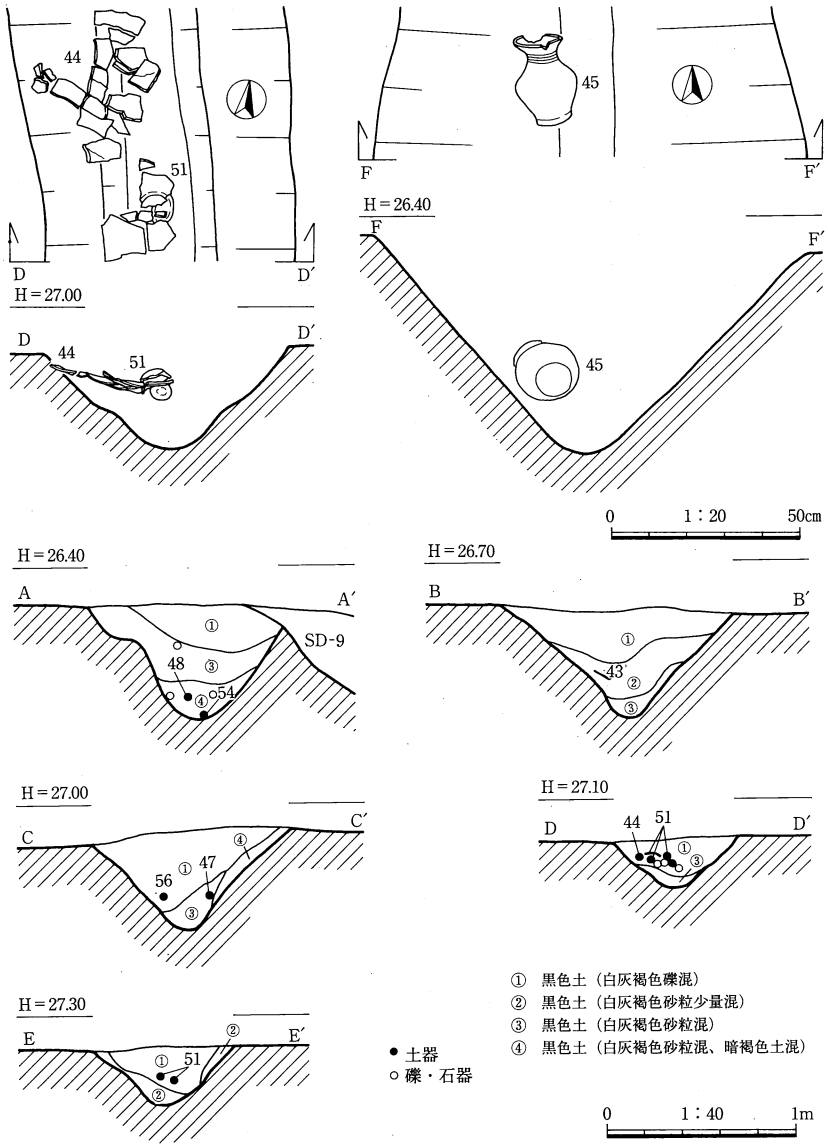


Fig. 25　SD－2遺物出土状況図、土層断面図

前後である。底面の幅は、5～22cmである。断面形はV字状を呈するが、底面から5～14cmの高さにおいて弱い傾斜変換が認められる。

埋土は、黒色系の土である。砂の混入など流水の痕跡は窺えない。土層断面に掘り直しの痕跡は認められないが、土層断面C–C′ライン北側付近において底面に4～5cm程度の段差が認められることから、掘り直しが行われた可能性もある。底面における標高は、最も高い南端で26.9m、北端では25.5mであり、南から北に向けて緩やかに傾斜している。出土した土器に風化や摩滅がほとんど認められないこと、ほぼ完形に復元できる個体が複数出土していることから、比較的短期間に溝が埋没したものと考えられる。

遺物出土状況　埋土中から多数の土器のほか、石器、礫が出土した。土器は、壺42～45、甕46～52、鉢53、蓋54、底部55～58である。同一個体を排除した上で、口縁部1点を1個体とみて換算すると、甕9個体、壺2個体、鉢1個体となる。出土した土器はすべて溝の底部より15cm以上浮いた状態で出土した。

Fig. 26　SD－２出土遺物実測図（土器１）

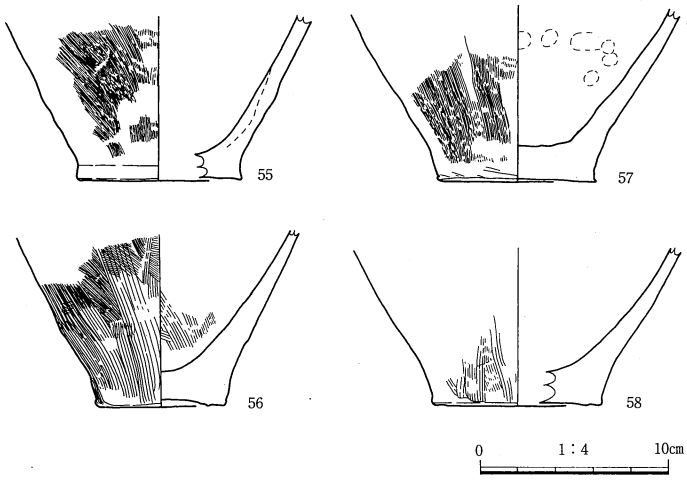


Fig. 27 SD－2出土遺物実測図（土器2）

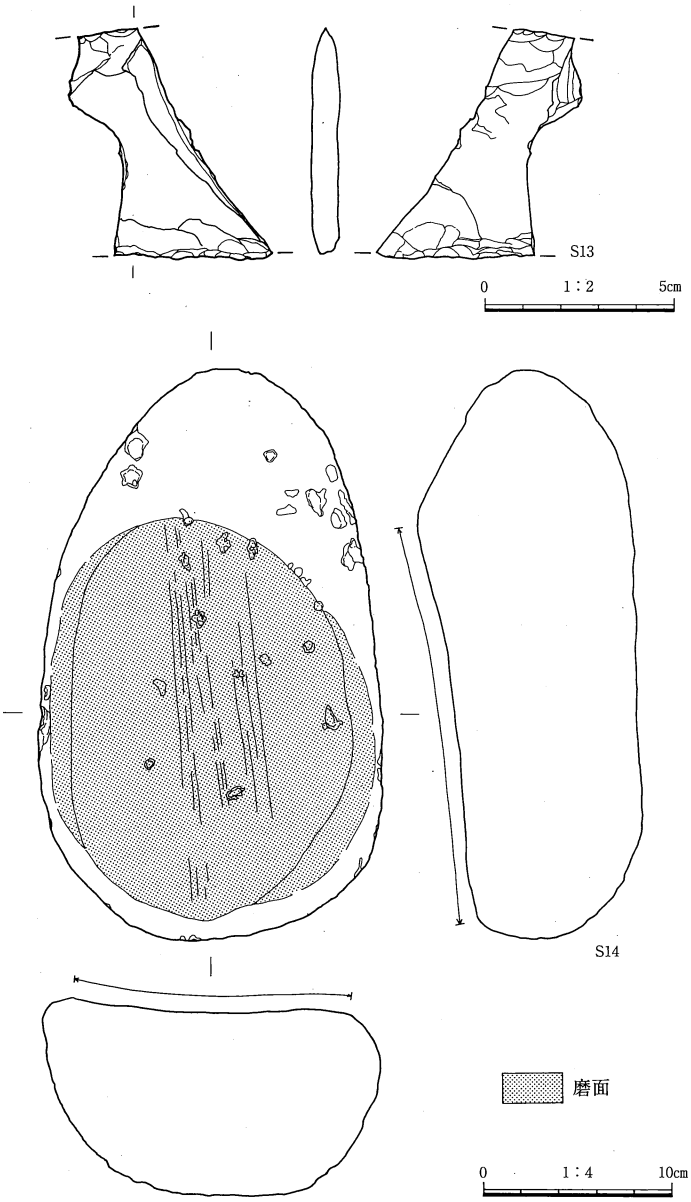


Fig. 28 SD－2出土遺物実測図（石器）

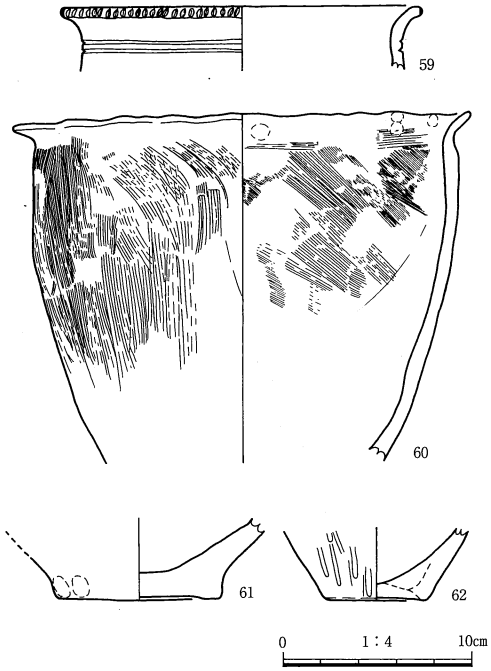


Fig. 29 SD－3（59・60・62）・SD－4（61）出土遺物実測図

このうち、遺構北端部付近において壺45が出土した。底面から15cm浮いており、口縁部を北側に向けて倒れた状態である。甕46・49・51・52は、底部を除く器形の大部分が接合し、甕46・51・52の如く1m以上離れた地点から出土した破片が接合した個体もある。こうしたことから、遺構が15～20cm程度埋没した段階において、極めて短期間にこれらの土器を投棄、もしくは土器が流入したものとみられる。

石器は、S13・14が出土した。S13は表裏の両端に調整がみられ、石製穂摘具の一部の可能性があるもので、底面より43cm浮いて出土した。S14は磨石であり磨面を下に向けた状態で出土した。底面から24cm浮く。礫は計16個が出土した。他の遺物と同様底面から20cm以上浮いて出土している。詳細は出土礫計測表（Tab. 2）を参照願いたい。

出土遺物から、弥生時代前期後半（Ⅰ－4段階）に掘削された遺構と考えられる。

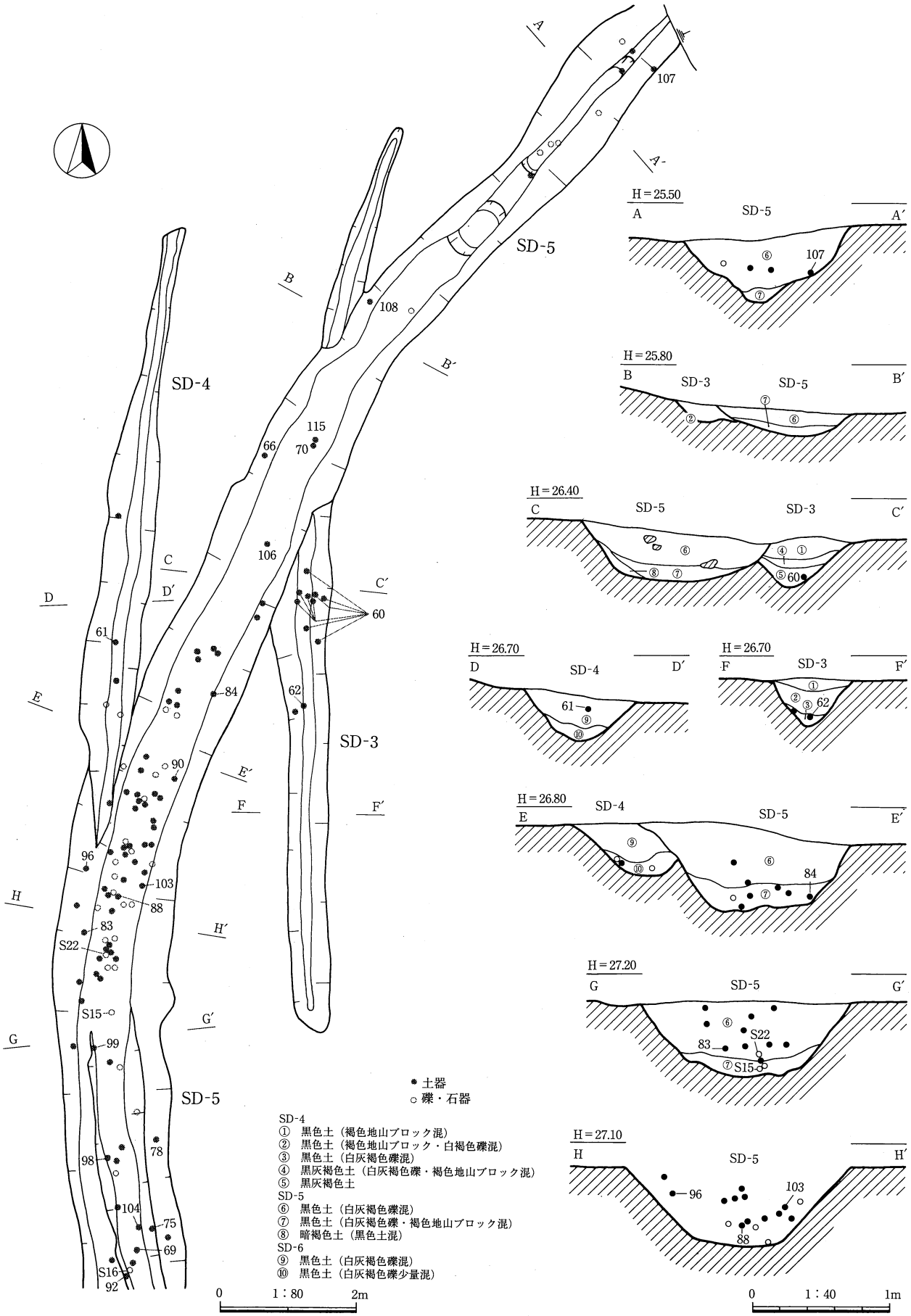


Fig. 30　SD－３・４・５遺構平面図、土層断面図

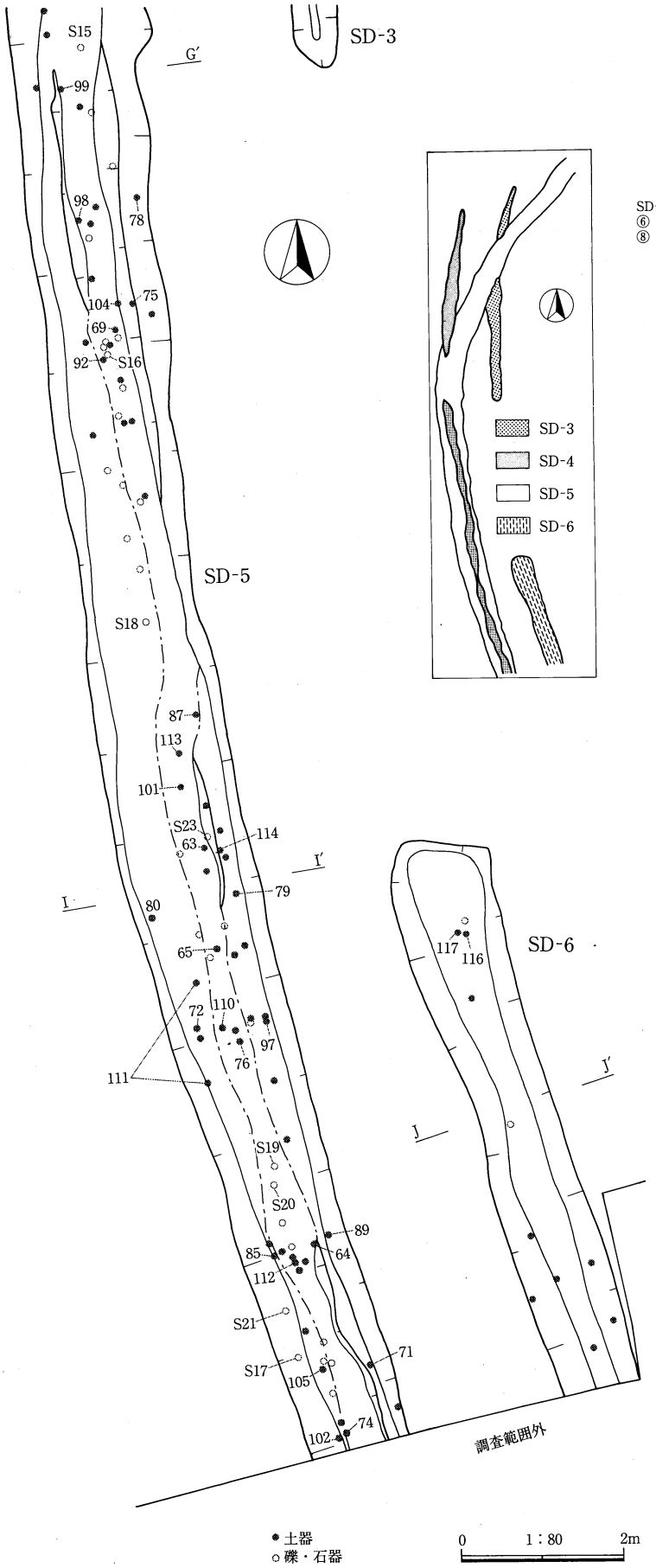
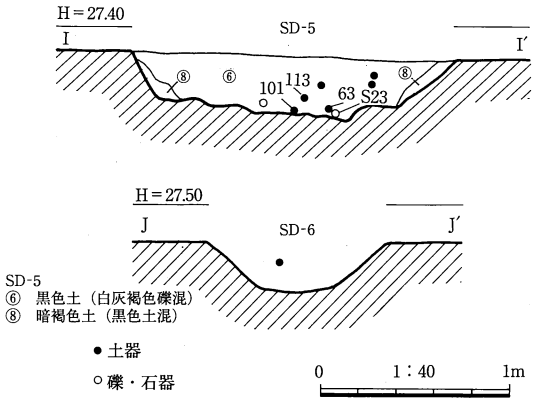


Fig. 31 SD−5・6遺構平面図、土層断面図



SD−3 (Fig. 29・30 PL. 7・8・19)

遺構 B−4、C−4グリッドに位置する。ほぼ南北方向を主軸とするが、北側は緩やかに東側に湾曲する平面形態をなす。検出した全長は13.3m、最も遺存状態の良いSD−5との切り合い部分の南側における規模は、幅0.85m、検出面からの深さ39cm、底面での幅14cmを測る。断面形状はV字形である。遺構の北端部は削平を受けたものと思われるが、南端部は検出面からの深さ27cmにおいて突然に途切れており、本来的にここで終わっていた可能性が高い。遺構は南から北に向けて傾斜しており、底面での標高は南端部分において26.5m、北端部分では25.2mである。

南北方向における中央付近においてSD−5と切り合うが、土層断面の観察からSD−5が新しい。

埋土は黒色系を呈し、自然堆積とみられる。堆積状況からは、掘り直しの痕跡、東西方向どちらか一方からの顕著な埋土の流入状況は窺えない。

なお、SD−3の南端部分から南へ9.5mの位置にSD−6が存在する。SD−3の断面形状がV字形であるのに対して、SD−6はU字形を呈しており断面形態が異なるものの、それぞれの延長線上に位置していることから、本来は併存していた可能性もある。

遺物出土状況 遺物は、甕59・60、底部62などが出土した。同一個体を排除した上で、口縁部1点を1個体とみて換算す

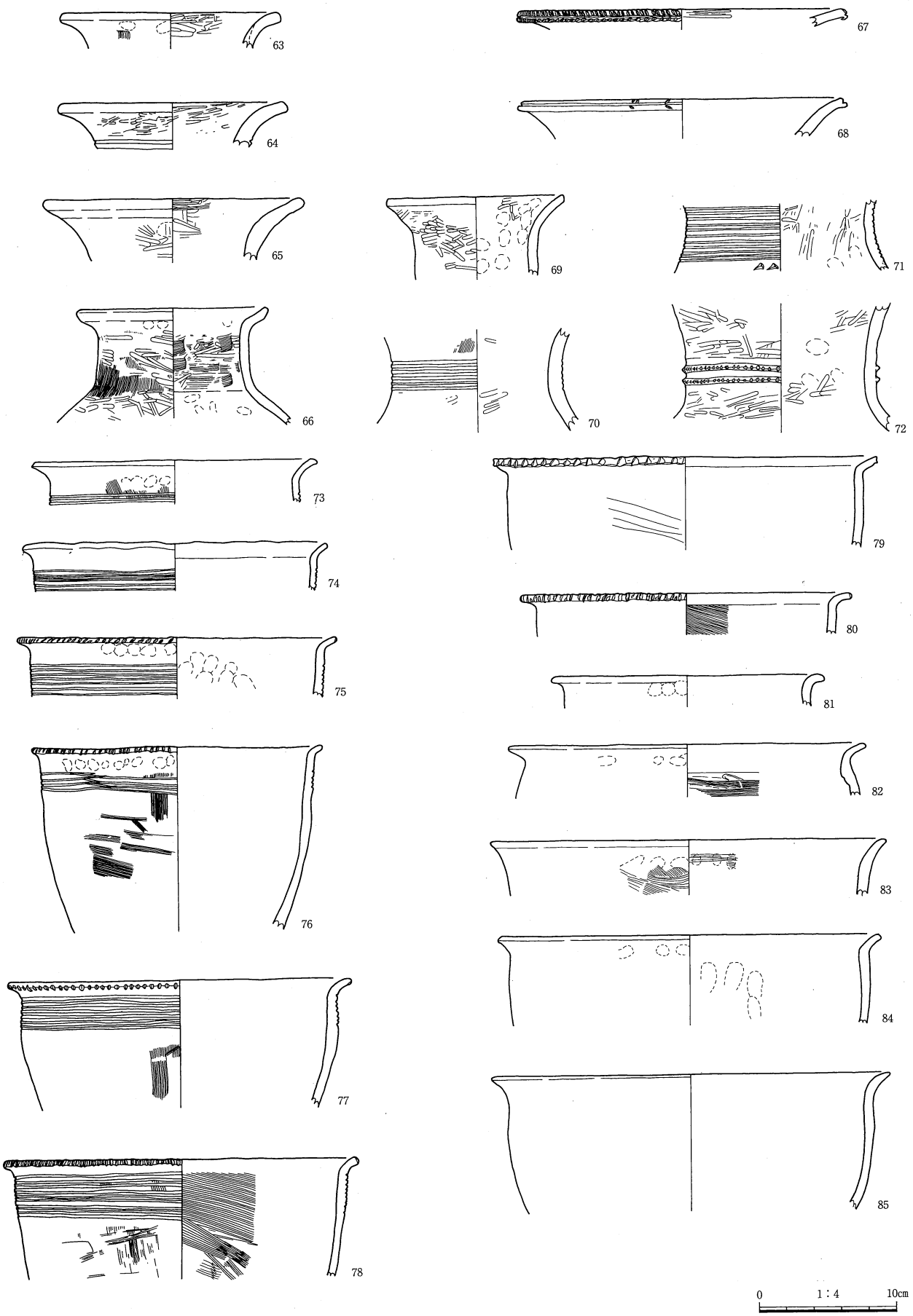


Fig. 32　SD－５出土遺物実測図（土器１）

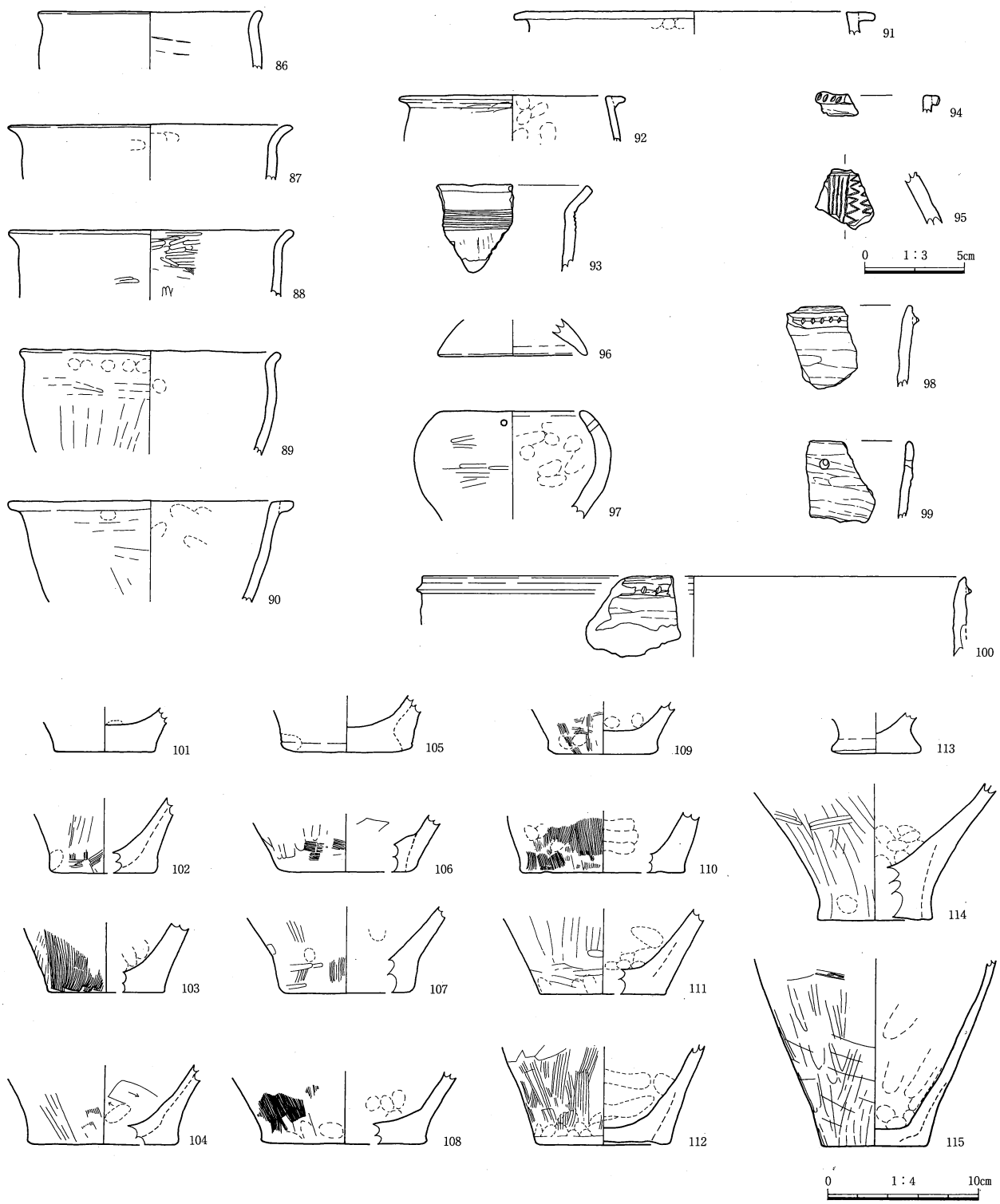


Fig. 33 SD-5出土遺物実測図（土器2）

ると、甕2個体となる。このうち、甕60は、SD-5との切り合い部分の南側において底面から20～25cm浮いた状態で出土した。底部を除くとほぼ完形に復元できる個体である。

出土遺物から、弥生時代前期後半（Ⅰ-4段階）に掘削された遺構と判断できる。

SD-4（Fig. 29・30 PL. 8・21）

遺構 B-3、E-4グリッドに位置する。SD-3とほぼ並行し、北側は緩やかに東方向に湾曲する平面形態をなす。検出した全長は9.2m、最も良好に残存するSD-5切り合い付近では幅0.8m、検出面からの深さ44cmを測る。

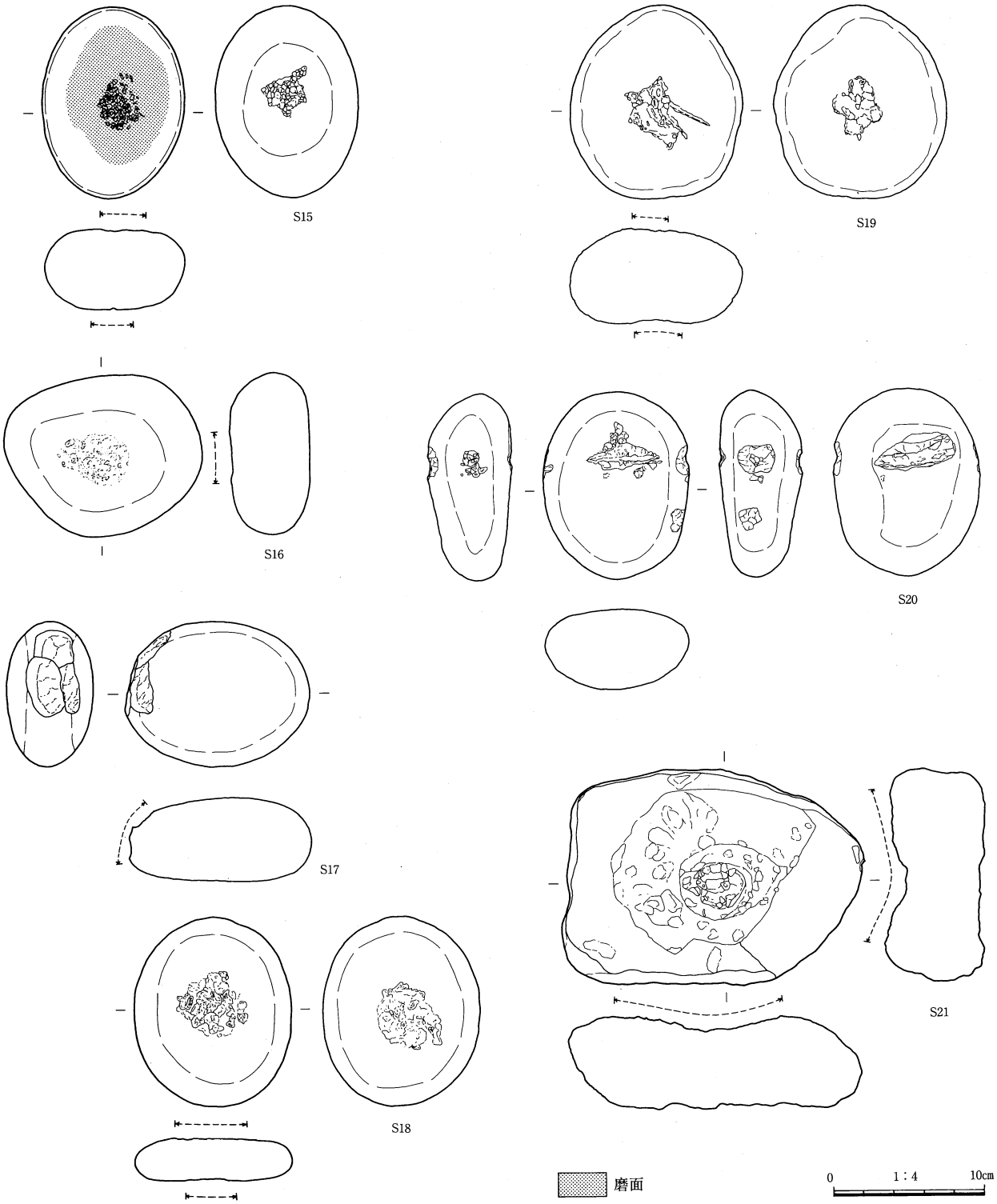


Fig. 34　SD－５出土遺物実測図（礫石器）

SD－４の延長線上にあたるSD－５の底面には、SD－４の底面の痕跡と推測される計４ヶ所の段が存在しており、それらの段を繋ぐようにわずかな溝状の窪みが認められた（Fig. 31で一点破線で表現）。そのため、本来は調査地南端までSD－４が掘削されていたとみられる。北端部分は、北方向へ伸びていた遺構が削平された結果とみられる。断面はV字形を呈する。

埋土は、黒色系であり自然堆積とみられる。堆積状況からは、掘り直しの痕跡、東西方向どちらか一方からの顕著な埋土の流入状況は窺えない。

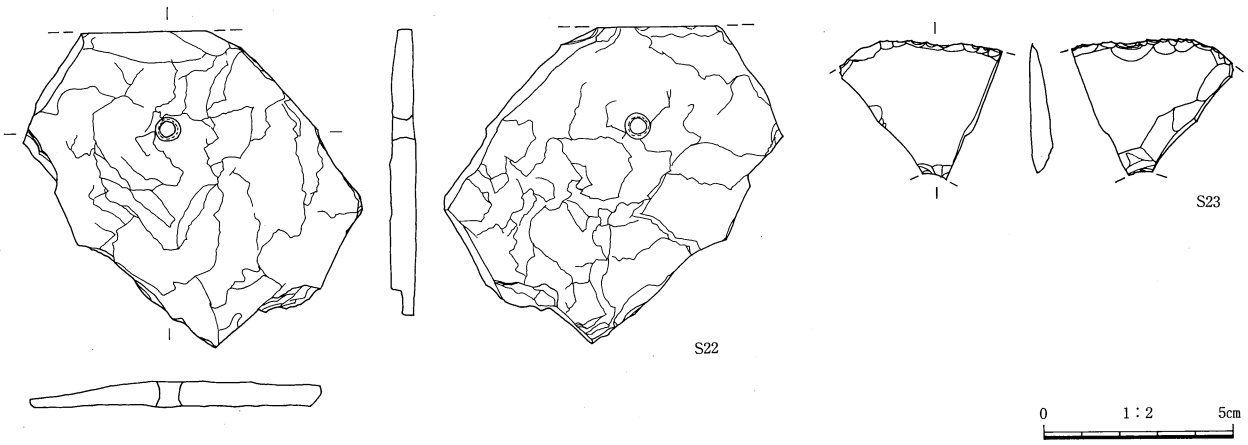


Fig.35 SD-5出土遺物実測図（石器）

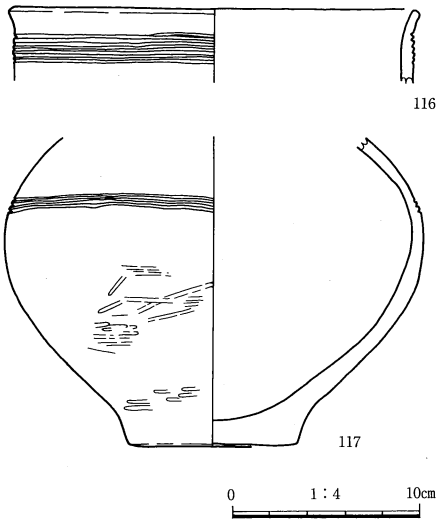


Fig.36 SD-6出土遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から底部61が出土した。底面から24cm浮いた位置からの出土である。

出土した土器やSD-5に切られていること、周辺の遺構の様相から判断して、弥生時代前期後半の所産と考えられる。

SD-5 (Fig.30～35 Tab.3 PL.8・9・16・17・20・21)

遺構 B-4、E-4グリッドに位置する。南北方向を主軸とするが、北半分は東方向に大きく湾曲する。規模は、検出面での幅1.0～1.7m、検出面からの深さは、最も良好に遺存するSD-4との切り合い部分付近で52cm前後である。断面形はU字形を呈する。SD-4との切り合い部分から南側の底面には、SD-4の底部の痕跡と推測される4ヶ所の段とそれらの段を繋ぐ溝状のわずかな窪みが存在する。SD-5の底面における幅は20～80cm、SD-5底面からの深さは5～15cmの部分もあるが、大半は1～2cm程度と極めて浅いものである（Fig.31で一点破線で表現）。SD-4との前後関係は、土層断面から判断してSD-4がSD-5に先行する。また、SD-3と切り合うが、土層断面から判断してSD-3がSD-5に先行する遺構である。遺構は南から北へ緩やかに傾斜しており、底面の標高は北端部分で27.1m、SD-4との切り合い部分付近で25.9m、北端部分では24.8mである。

埋土は黒色系の土であるが、下層には若干の地山土の混入が認められる。堆積状況からは、SD-5を掘り直した痕跡、および東西方向どちらか一方からの顕著な埋土の流入状況は窺えない。

遺物出土状況 埋土中から出土した遺物は、土器では壺63～72、甕73～89・91～94、鉢90、突帯文土器98・100、深鉢99、底部101～115などである。石器は礫石器S15～21、剥片石器S22・23が出土した。弥生時代の土器について、同一個体を排除したうえで、口縁部1点を1個体とみて換算すると、壺8個体、甕23個体、鉢1個体、無頸壺1個体となる。遺物の分布は、SD-3との切り合い部分から南側に集中する。土器の出土状況は、平面的にも層位的にも散在的な様相を呈する。底面直上から出土した遺物は僅かであり、図化できたものは90・92の2点である。器形の半分以上が復元できる個体はない。

礫は計58個が出土しており、このうち6個に使用痕が認められた。詳細は出土礫計測表（Tab.3）を参照願いたい。石器には、敲打痕を有するS15～21のほか、打製の穂摘具とみられるS22、打製の石鎌の可能性があるS23がある。S15・19・23は底面直上より出土し、他は底面から10cm以上浮いて出土した。

沈線文が多条化した壺・甕の存在などから弥生時代前期後半（Ⅰ-4段階）の遺構と考えられる。

遺構名	遺物番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)
SD-5	S15	12.7	9.3	5.4	0.85
SD-5	S16	13.0	10.0	5.3	1.08
SD-5	S17	12.0	9.7	5.7	0.87
SD-5	S18	12.3	10.4	2.8	0.50
SD-5	S19	13.0	11.4	6.4	1.22
SD-5	S20	12.4	9.6	5.3	0.90
SD-5	S21	19.5	14.2	6.0	2.29
SD-5	—	14.4	12.6	11.2	2.35
SD-5	—	11.5	11.3	9.3	1.35
SD-5	—	11.5	10.2	6.1	0.91
SD-5	—	10.2	8.3	7.2	0.82
SD-5	—	13.2	10.7	4.3	0.75
SD-5	—	12.5	6.8	4.5	0.60
SD-5	—	10.1	9.0	4.5	0.53
SD-5	—	10.3	9.2	7.0	0.76
SD-5	—	11.8	10.2	7.7	1.15
SD-5	—	11.6	11.5	8.6	1.36
SD-5	—	12.9	9.8	7.3	1.28
SD-5	—	17.5	15.8	8.6	2.04
SD-5	—	10.2	9.8	9.2	1.16
SD-5	—	12.9	11.2	8.4	1.42
SD-5	—	14.8	11.5	9.2	1.81
SD-5	—	13.7	11.9	7.8	2.08
SD-5	—	15.0	12.0	8.9	1.50
SD-5	—	16.0	9.8	7.5	1.42
SD-5	—	17.9	13.2	6.8	1.99
SD-5	—	17.4	8.0	7.6	1.23
SD-5	—	16.5	14.5	10.0	3.05
SD-5	—	11.3	8.2	7.3	0.87
SD-5	—	13.3	10.0	8.8	1.46
SD-5	—	9.4	9.0	4.9	0.48
SD-5	—	7.6	7.3	3.2	0.15
SD-5	—	7.0	5.8	5.8	0.08
SD-5	—	7.5	5.5	2.6	0.09
SD-5	—	15.9	14.3	9.6	1.78
SD-5	—	13.1	9.1	7.2	0.99
SD-5	—	19.3	16.0	12.6	5.74
SD-5	—	12.0	7.9	7.4	0.82

遺構名	遺物番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)
SD-5	—	8.9	8.9	4.8	0.48
SD-5	—	10.0	10.0	6.3	0.71
SD-5	—	12.3	10.8	7.7	1.17
SD-5	—	9.8	8.6	6.2	0.70
SD-5	—	10.0	6.7	5.4	0.31
SD-5	—	13.5	9.3	7.5	0.97
SD-5	—	12.5	7.7	6.0	0.77
SD-5	—	13.3	9.5	8.1	1.40
SD-5	—	14.7	13.2	8.5	1.29
SD-5	—	14.6	10.1	9.8	0.79
SD-5	—	16.1	13.5	9.2	2.50
SD-5	—	10.2	8.7	4.7	0.50
SD-5	—	8.9	8.2	3.8	0.38
SD-5	—	11.5	6.4	3.5	0.38
SD-5	—	13.5	10.6	5.1	0.92
SD-5	—	13.0	8.8	6.4	0.80
SD-5	—	12.4	9.4	8.2	1.06
SD-5	—	9.1	8.6	6.7	0.55
SD-5	—	15.2	11.7	9.5	2.03
SD-5	—	15.1	12.3	10.7	2.60
SD-5	—	11.4	8.5	7.1	0.72
SD-5	—	14.8	14.7	11.5	2.82
SD-5	—	15.7	12.8	9.7	2.20
SD-5	—	12.9	12.0	7.6	1.70
SD-5	—	10.9	10.4	7.3	1.11
SD-5	—	7.6	5.7	3.2	0.19
SD-7・8	S25	11.3	8.4	3.5	0.46
SD-7・8	S26	14.1	13.8	5.1	1.47
SD-7・8	S27	14.2	11.2	5.0	0.99
SD-7・8	S28	8.0	8.3	5.0	0.37
SD-7・8	S29	34.3	18.8	12.5	10.90
SD-7・8	—	13.6	9.4	5.6	0.98
SD-7・8	—	15.4	14.2	6.9	1.67
SD-7・8	—	13.8	12.3	6.4	1.56
SD-7・8	—	16.1	12.6	6.0	1.62
SD-7・8	—	12.8	12.6	9.9	2.04
SD-7・8	—	13.9	10.9	9.8	1.56

Tab.3　SD-5・7・8出土礫計測表

SD-6（Fig.31・36　PL.19）

D-4、E-4グリッドに位置する。南北方向を主軸とし、西側約2mに位置するSD-5とほぼ並行する。検出した規模は、全長6.9m、幅1～1.2m、検出面からの深さは24～27cmである。埋土は黒色系の土である。堆積状況から掘り直しの有無などは判断できない。遺構北端は立ち上がりによって終わっている。

北側の延長線上にはSD-3が存在する。

遺物は、土器のほか2点の礫が出土している。甕116、壺117はいずれも検出面からの出土である。

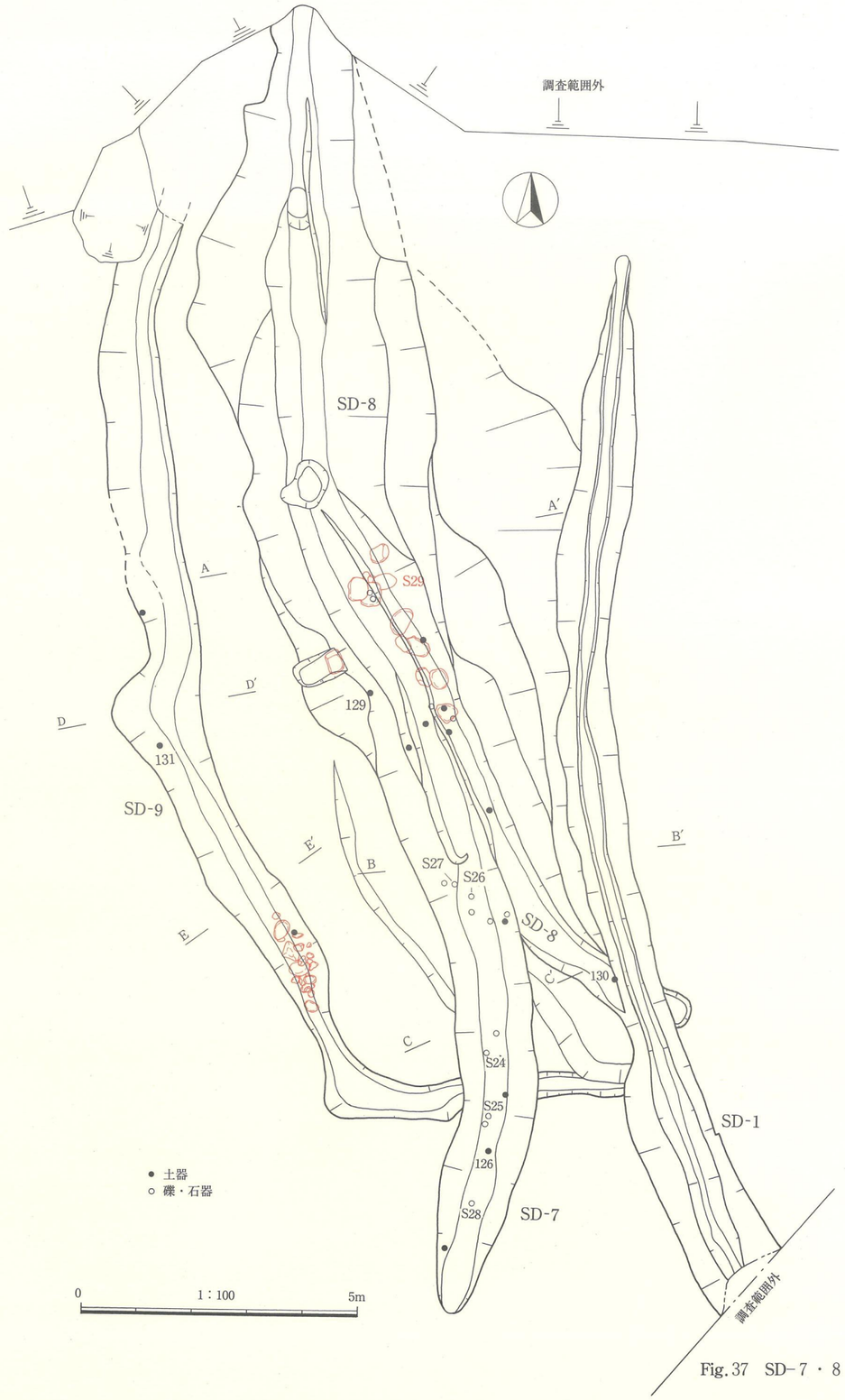
出土遺物から、弥生時代前期後半の遺構とみられる。

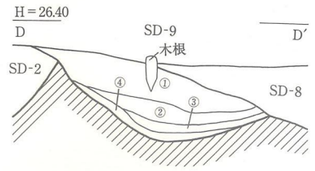
SD-7・8（Fig.37～40・42　Tab.3　PL.10・11・15・17）

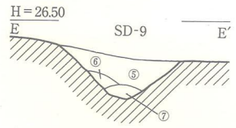
遺構　B-5、C-5グリッドに位置する。SD-7・8ともに、緩やかなS字状に湾曲しつつ、南端から北に向かいスロープ状に下降する。両者は切り合っており、SD-7がSD-8に先行する。

SD-7は、検出面での幅は南端部付近では1.5m前後、SD-8との切り合い部付近においては最大7m前後であったと推測される。断面形は、南端部付近では緩やかなU字形であるが、切り合い部付近ではV字形を呈する。切り合い部分北側において、土層断面の最下部にSD-7の埋土がわずかながら残存する（Fig.42、土層断面A-A′、⑭層）。このことから、底面でのレベルや平面形態など、本来的にはSD-8と同様の形態を呈したものと推測される。底面における標高は、南端部で26.8m、北端部では21.2m前後である。

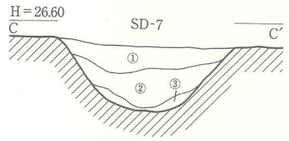
埋土は黒色土系であり、自然堆積とみて矛盾しない。掘り直しの痕跡は窺えない。



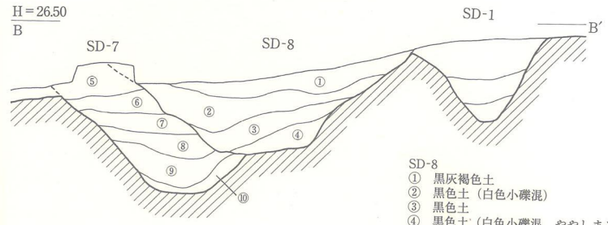




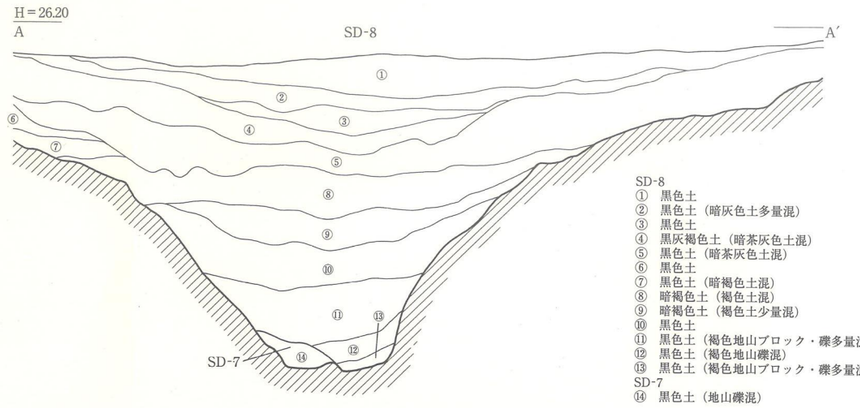
SD-9
① 黒色土（暗褐色土混）
② 黒色土（白褐色礫混）
③ 黒色土
④ 黒色土
⑤ 黒色土
⑥ 黒色土（⑤層よりやや黒い）
⑦ 黒色土（⑥層よりやや黒い）



SD-7
① 黒色土（暗褐色土混）
② 黒色土
③ 黒色土



SD-8
① 黒灰褐色土
② 黒色土（白色小礫混）
③ 黒色土
④ 黒色土（白色小礫混、ややしまる）
SD-7
⑤ 黒色土
⑥ 黒色土（褐色地山礫多量混）
⑦ 黒色土
⑧ 黒色土（白色小礫混）
⑨ 黒色土
⑩ 黒色土



SD-8
① 黒色土
② 黒色土（暗灰色土多量混）
③ 黒色土
④ 黒灰褐色土（暗茶灰色土混）
⑤ 黒色土（暗茶灰色土混）
⑥ 黒色土
⑦ 黒色土（暗褐色土混）
⑧ 暗褐色土（褐色土混）
⑨ 暗褐色土（褐色土少量混）
⑩ 黒色土
⑪ 黒色土（褐色地山ブロック・礫多量混）
⑫ 黒色土（褐色地山礫混）
⑬ 黒色土（褐色地山ブロック・礫多量混）
SD-7
⑭ 黒色土（地山礫混）

0　1：50　2m

Fig. 37　SD−7・8・9遺構図、土層断面図

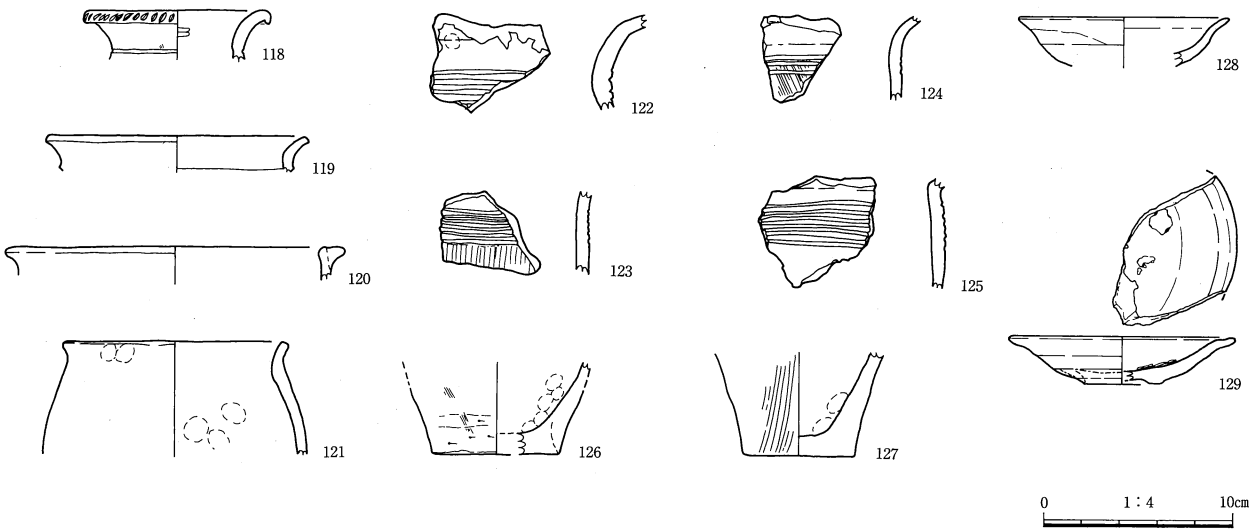


Fig. 38 SD−7・8出土遺物実測図

SD−8の切り合い部分から北側については、SD−7の埋土を再掘削したものとみられるが、南側はSD−7の東側の壁面を掘削し、東側へ湾曲する平面形態をなす。幅は、切り合い部分付近で最大7m前後であろう。底面の標高は南端部が26.3m、北端部では21.2mである。断面形は、逆台形またはV字形を呈する。

埋土は黒褐色土を主体とするが、⑧層（Fig. 42土層断面A−A′）の上層には暗褐色土を含む土が堆積する。自然堆積とみて矛盾しない。

遺物出土状況 SD−7埋土中から、太型蛤刃石斧S24のほか、若干の土器片が出土した。S24は底面から約50cm浮き、検出面直下から出土した。流紋岩製であり、大山北麓域では採取困難な石材であることから、他地域から持ち込まれたものと考えられる。SD−8との切り合い部分から南側で出土した土器に図化できるものはない。

SD−7・8の底面が接する部分から北側の埋土中においては、弥生土器の壺118、甕119〜121、胴部122〜125、底部126・127の他に、上層から陶器128、129が出土した。128は①〜④層埋土中（Fig. 42土層断面A−A′）、129は④層（同左）に相当する標高から出土した。底面直上から出土したものは皆無である。128は16世紀後葉、129は17世紀前半の遺物とみられる。これらの遺物は再掘削されたSD−8が埋没する段階で混入した遺物である。

SD−8埋土中からは、長軸が30cmを越える礫が10個以上出土した。いずれも底面から20cm以上浮いた位置にあり、東側の壁に沿うようにして出土した。石の中には打ち欠きによって整形を施したように見えるものも存在した。これらの礫は、前述したSD−1などから出土した礫とは異なり、かなり大型のものである。

遺構の時期は明確にできないが、SD−8埋土中からは、④層（Fig. 37、土層断面A−A′）から17世紀前半の遺物が出土しており、中世から近世初頭にかけての時期と考

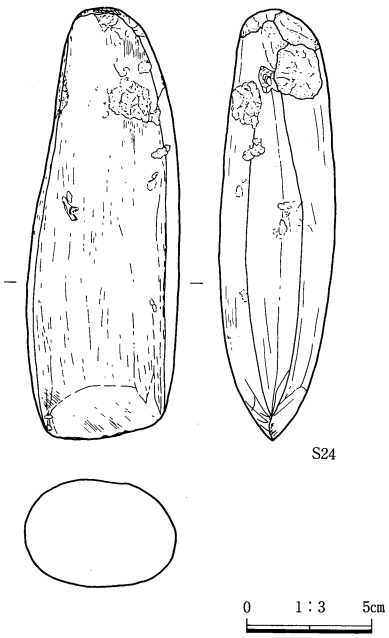


Fig. 39 SD−7出土遺物実測図

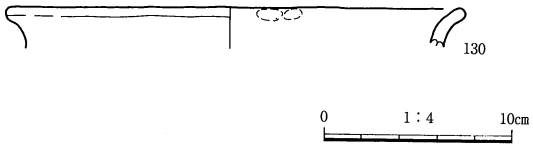


Fig. 40 SD−8出土遺物実測図

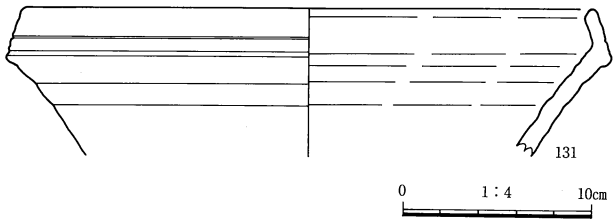


Fig. 41 SD−9出土遺物実測図

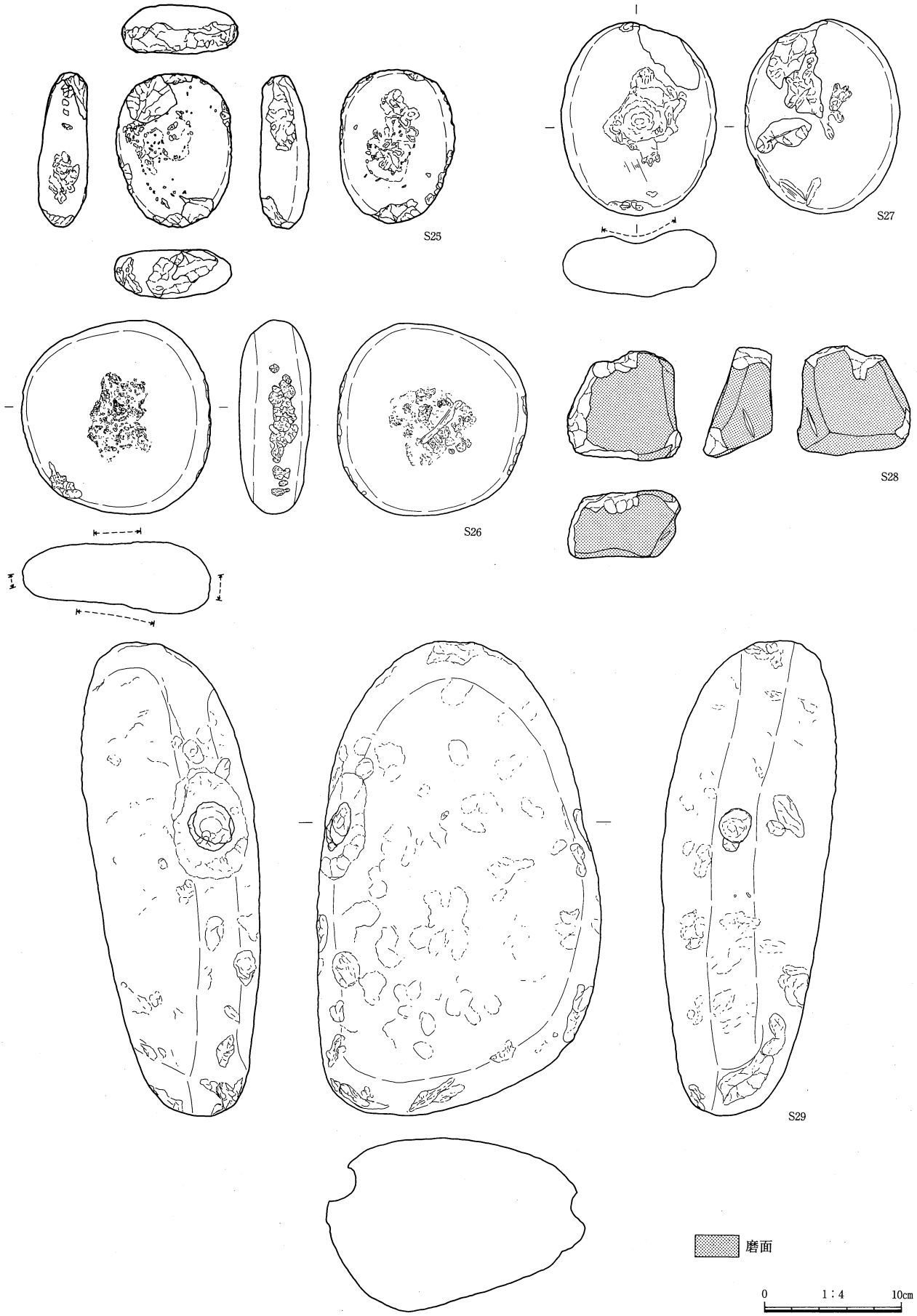


Fig. 42　SD－７・８出土遺物実測図（石器）

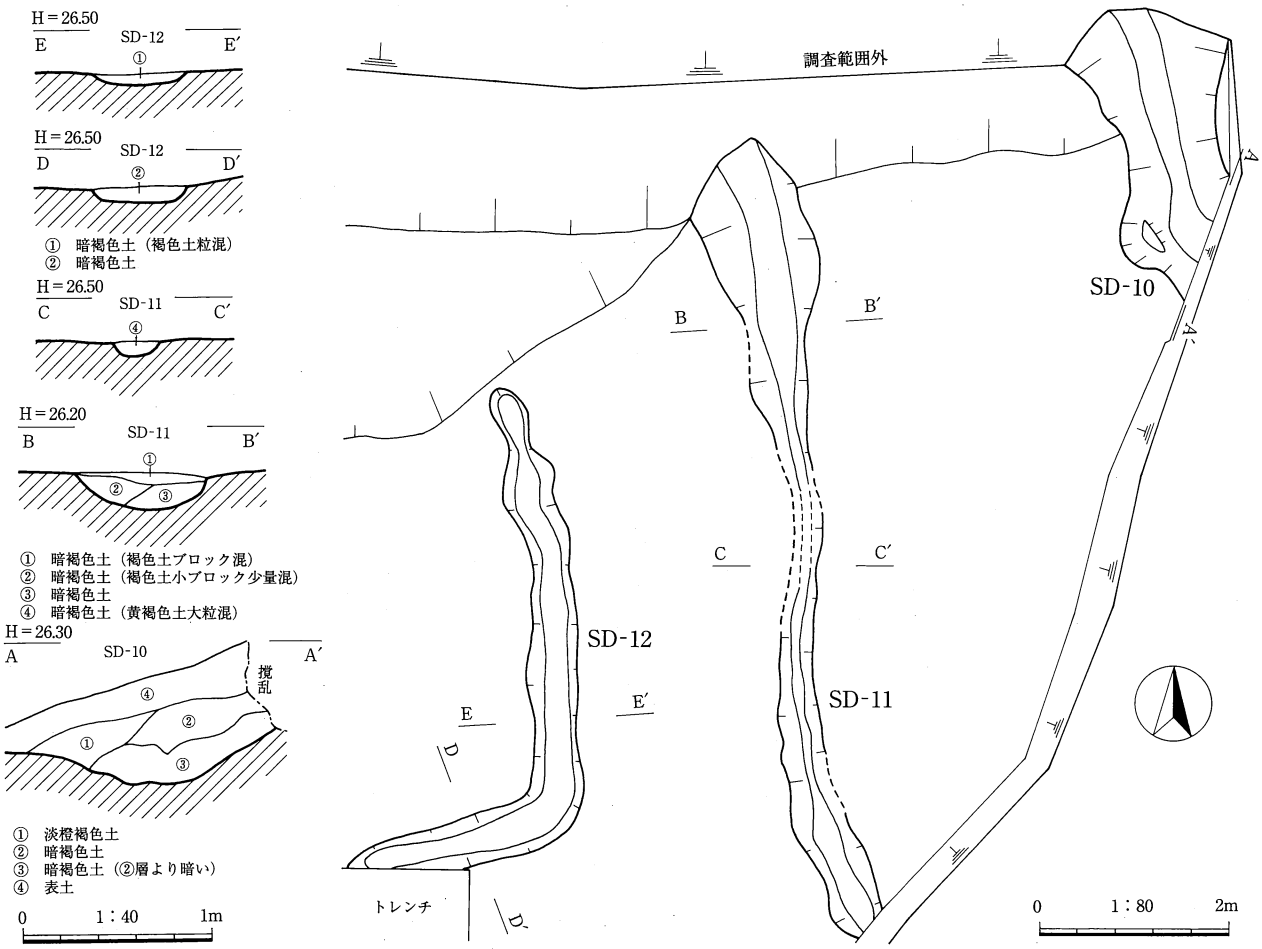


Fig. 43 SD-10・11・12遺構平面図、土層断面図

えることができる。しかし、底部近くから弥生土器が出土したことを重視すれば、弥生時代に掘削され、埋没の最終段階に陶器が混入したと考えることも可能であろう。

SD-7は多くの部分がSD-8によって再掘削されているため伴う遺物がほとんど無く、時期を明確に出来ないが、SD-8よりも古い遺構である。

SD-9（Fig. 37・41 PL. 12・21）

C-5、B-4グリッドに位置する。東西方向から南北方向へとL字状に屈曲する。東西方向に伸びる箇所はごく浅いが、南北方向へと屈曲してから徐々に深くなっていく。北端はSD-7（SD-8再掘削時の可能性もある）に影響を受けているようで、SD-7に向けて流水による抉れのような痕跡が存在する。遺物では弥生土器片に混じって備前系の擂鉢131が出土した。131は検出面近くから出土したもので、埋没過程の最終段階に混入したものであり、遺構の下限が推測できる。さらに、屈曲部近くから径が40cm程度のものも含む礫が集中して出土した。礫は底面から20～25cm浮いた位置からの出土であるが、SD-8部分から出土した礫と規模において類似しており、SD-1等の弥生時代前期の溝状遺構から出土したものとは異なる。

遺構の時期は、出土した擂鉢131から16世紀前葉と推測される。

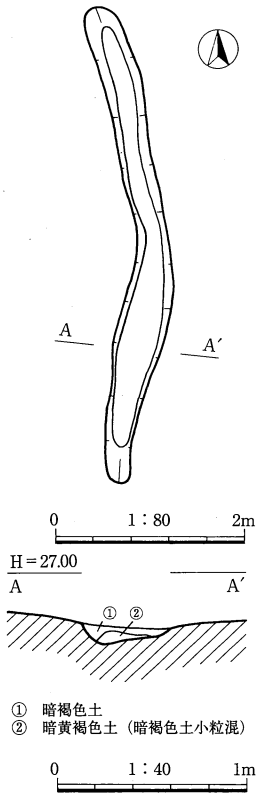


Fig. 44 SD-13遺構図

SD-10（Fig. 43 PL. 12）

調査地東端のB-6グリッドに位置する。調査部分はわずかであるが、ほぼ南北方向に主軸をとるもののやや

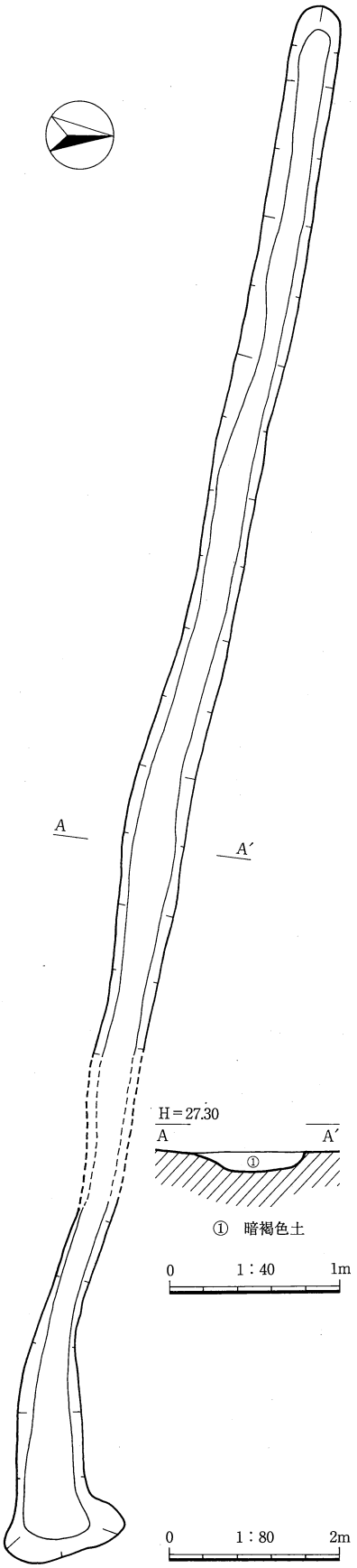


Fig. 45　SD-14遺構図

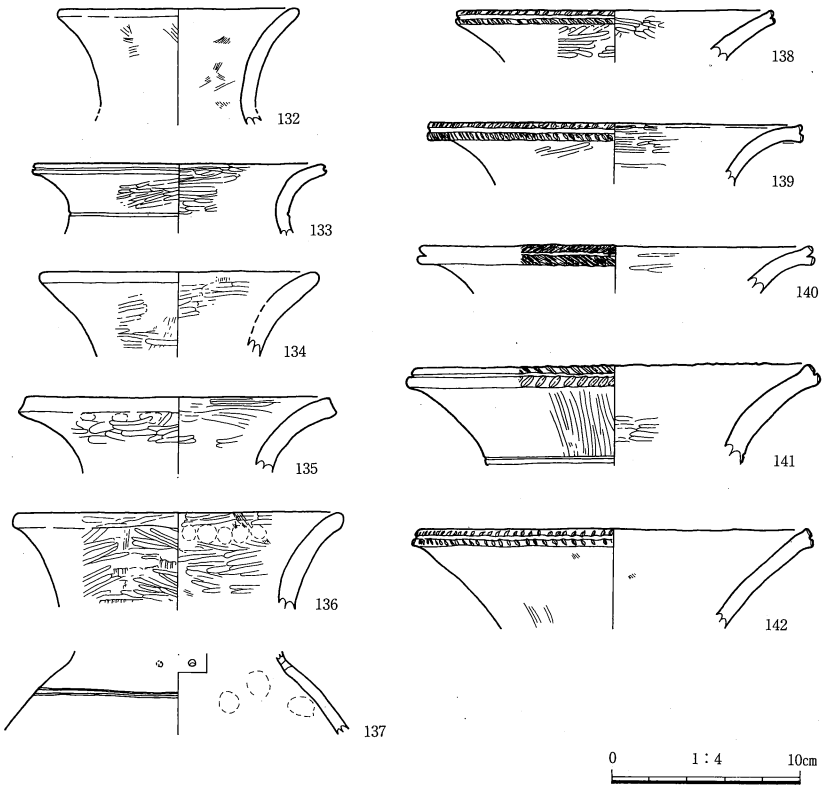


Fig. 46　遺構外出土遺物実測図（土器１）

西にふれる遺構と推測される。断面形はU字状に近いものだが、底面はいびつである。検出した規模は、全長3.1m、幅は１～1.7m、検出面からの深さは23～38cmである。

埋土は暗褐色系の土で、南側からの流入が認められる。

遺物が出土していないため、時期を判断することは出来ない。

SD-11（Fig. 43）

B-６グリッドに位置する。ほぼ南北方向であるがやや西に振れる。遺構の北端は削平されているが、本来はさらに北方向に伸びていたものと推測される。検出した規模は、全長8.5m、幅0.3～1.1m、検出面からの深さは７～30cmである。

埋土は暗褐色系の土である。

底面から弥生土器とみられる土器片が出土したが、図化できるものはない。

時期を判断することはできない。

SD-12（Fig. 43）

B-５、B-６グリッドに位置する。東西方向から南北方向へと逆L字状に屈曲する。遺構の北端は本来さらに北へ伸びていたのが削平されたものと推測される。検出した規模は、東西方向に約２m、南北方向に4.5m、幅は0.3～0.5m、検出面からの深さは６～10cmである。

埋土は暗褐色系の土であり、SD-11に類似する。

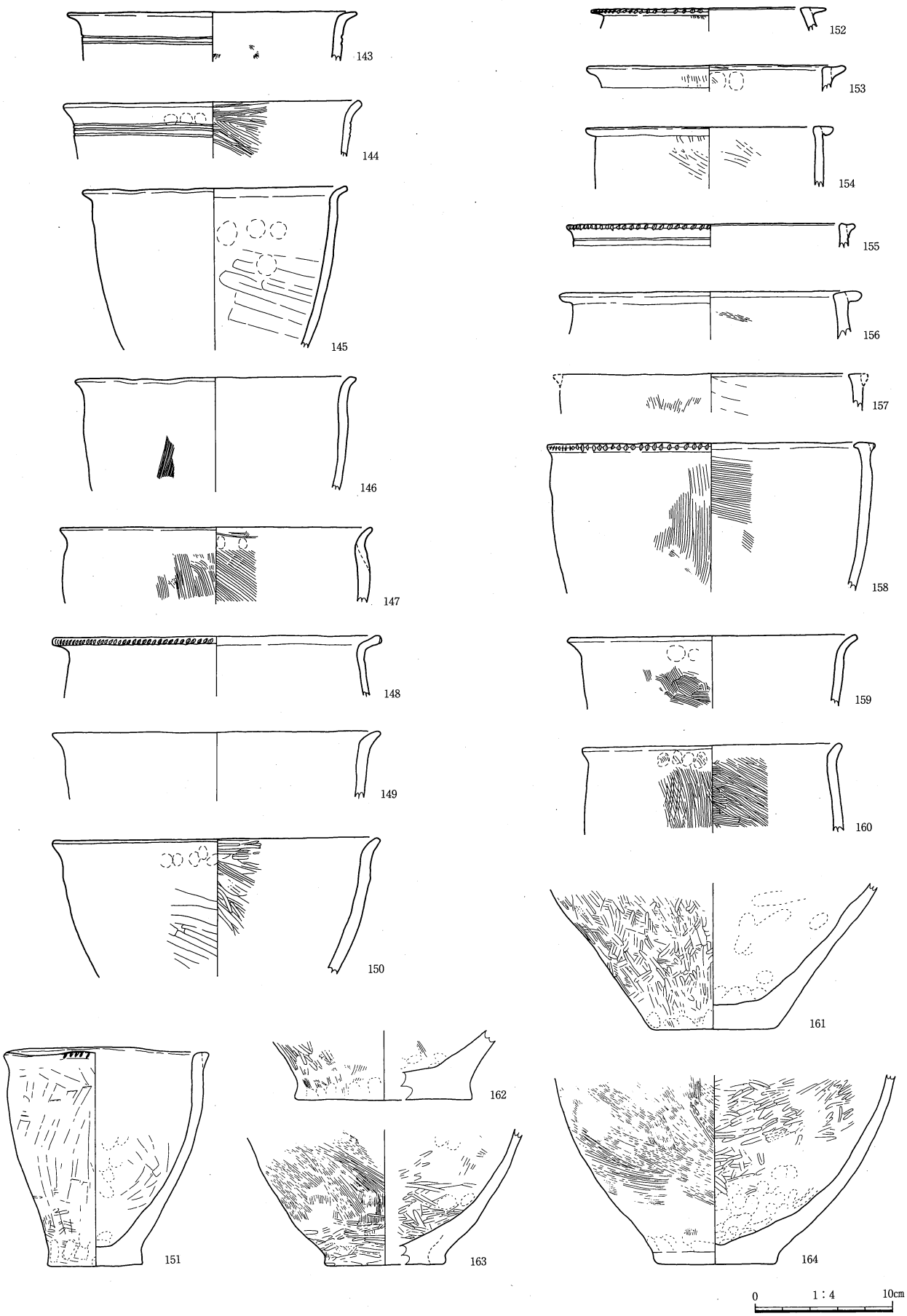


Fig. 47　遺構外出土遺物実測図（土器２）

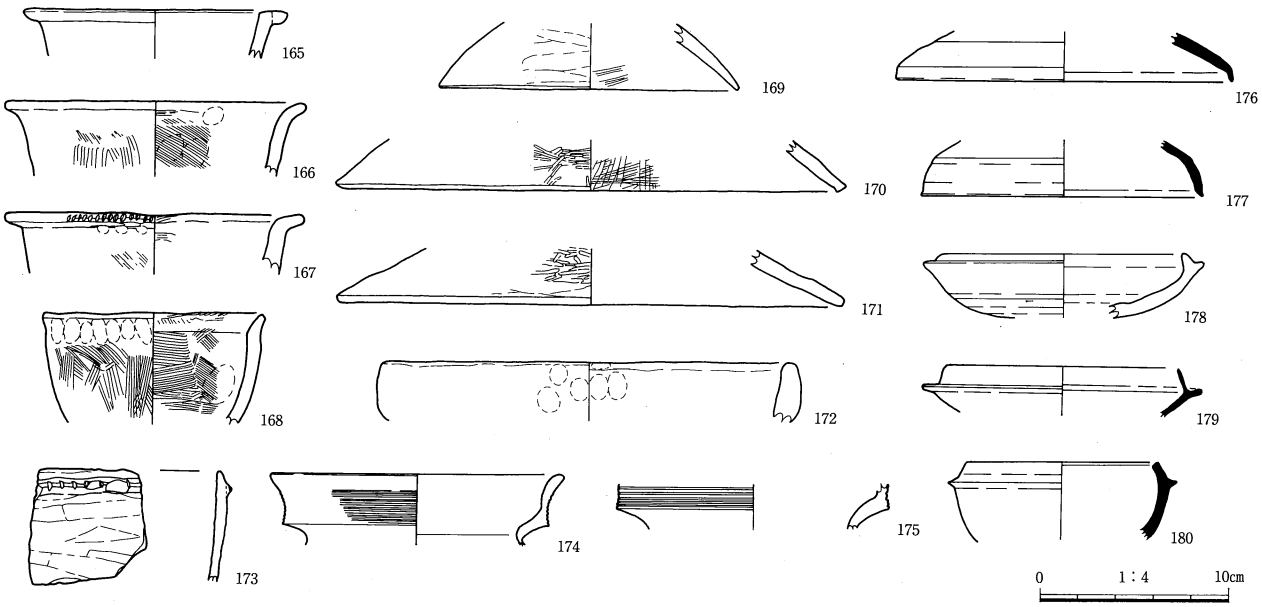


Fig. 48　遺構外出土遺物実測図（土器３）

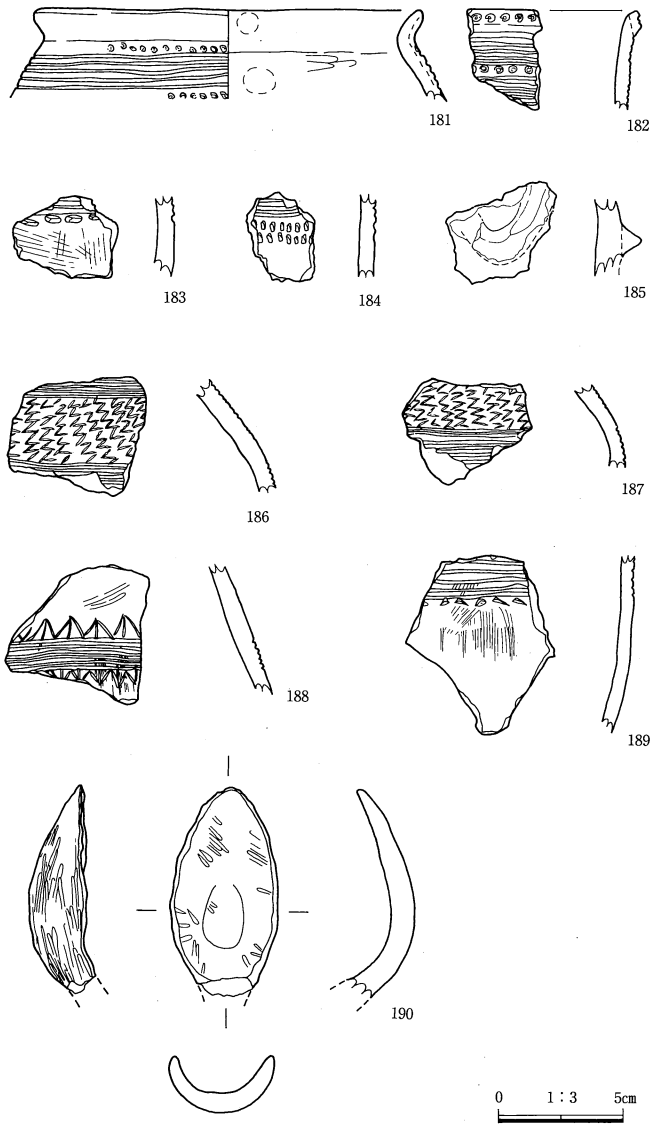


Fig. 49　遺構外出土遺物実測図（土器４）

遺物が出土していないため、時期を判断することは出来ない。

SD-13（Fig. 44）

C-４グリッドに位置する。南北方向の主軸をとるが、緩く西側に湾曲する。検出した規模は、全長5.1m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さは３～８cmである。

埋土は暗褐色系の土である。

遺物が出土しておらず、時期を判断することは出来ない。

SD-14（Fig. 45　PL. 12）

D-２、D-４グリッドに位置する。東西方向の主軸をとるもので、平面形はほぼ直線で幅も一定しているが、東端はやや屈曲し幅広くなる。底面はいびつである。検出した規模は、全長18.6m、幅0.4～0.8m、検出面からの深さは４～13cmである。

SD-５及びSK-２を切っており、両遺構より新しい。しかし、遺物が出土していないため時期は不明である。

(4)　ピット

ピット（Fig. 4　Tab. 4）

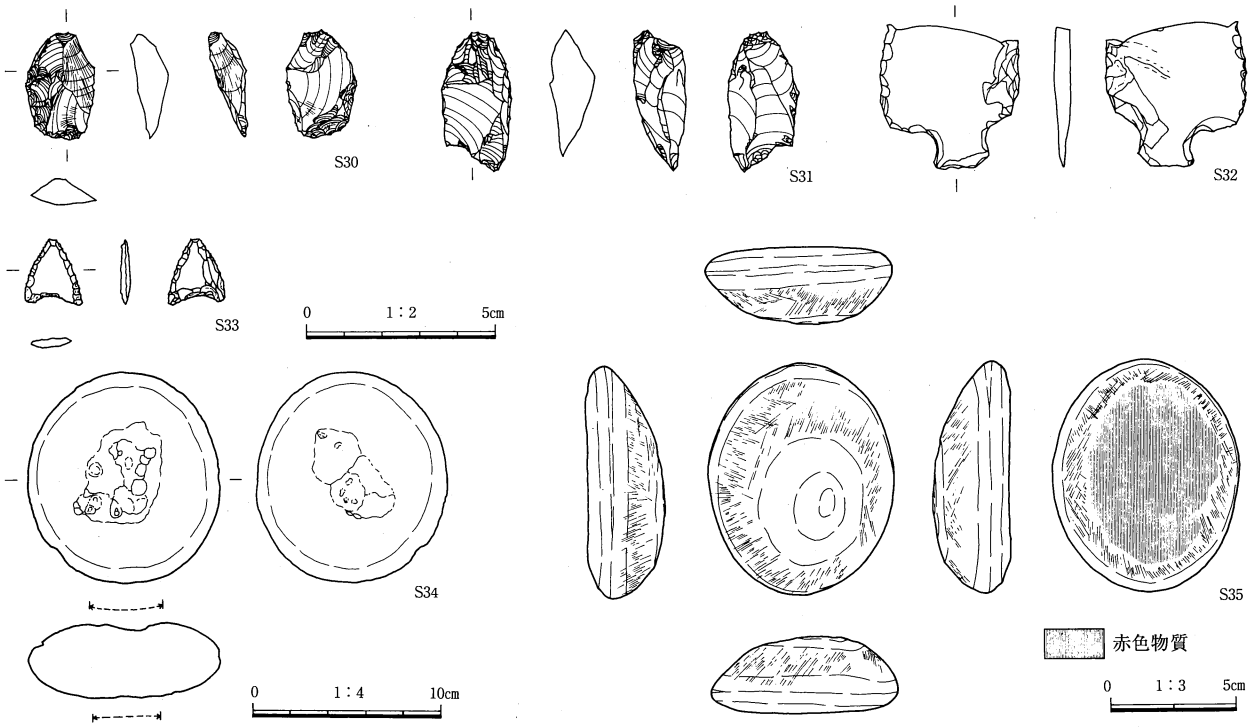


Fig. 50 遺構外出土遺物実測図（石器）

調査地東側からピットを検出した。そのうち、SI−1に関連すると判断したものを除くと計14基となるが、建物としては復元できない。これらのピットからは時期が判断できるような遺物は出土していないが、P−14についてはSI−1の中央部にある土坑に切られていることからそれよりも古いことが分かり、弥生時代ないし、それ以前の遺構である。規模については規模計測表（Tab. 4）を参照していただきたい。

ピット番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　物
P−1	28	25	15	—
P−2	25	23	14	—
P−3	30	24	13	—
P−4	40	34	30	—
P−5	34	32	25	—
P−6	34	31	44	—
P−7	35	29	33	—
P−8	25	22	10	—
P−9	26	16	12	—
P−10	44	37	27	—
P−11	38	34	19	—
P−12	41	39	15	—
P−13	37	26	7	—
P−14	31	27	27	—

Tab. 4 ピット規模計測表

(5) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（Fig. 46〜50 PL. 14〜17・21・22）

遺構外からも多くの遺物が出土している。その多くは遺構検出に至る前段階に黒色土の包含層掘り下げ中に出土したものである。そのため、溝状遺構等に伴っていた遺物が含まれることも推測される。

出土した遺物には、土器として弥生時代の壺132〜142、甕143〜160・165〜168・174・175、底部161〜164、蓋と推測されるもの169〜171、刺突などの文様を描く181〜189がある。このうち、181・182は外面に竹管文を施すもの、183・184・189は刺突を施すもの、185は湾曲する突帯を張り付けたもの、186・187は胴部上半に羽状文様を施すもの、188は6条のヘラ描沈線を挟んでヘラ描きによる連続する山形文が施されるもので、山形文の内部には沈線に対し垂直となる線が描かれている。土製品としては柄の部分が欠損しているが匙形土製品の匙部190が存在する。190は類例の少ない遺物で時期を判断することは困難ではあるが、胎土・調整から判断して弥生時代前期の遺物と推測される。その他には突帯文土器173。須恵器の坏蓋176・177。器形は須恵器の坏身であるが焼成が土師質の坏身178。須恵器の坏身179・180がある。石器には楔形石器S30・31、石匙と推測されるS32、石鏃S33、中央部に敲打痕をもつ石S34、磨石S35などがある。

４．近 世 墓

近世墓（Fig.51　Tab.５・６）

調査の過程で近世墓の掘り下げを行った。概略を記載する。

近世墓から出土した副葬品はTab.５・６のとおりである。土器類はほとんどないが、34墓から完形の徳利が１点出土した。鉄製品は多く出土しており、棺に使われたと推測される釘以外にも鎌や鋏などが比較的多い傾向にある。銭貨をもつ墓もかなりあり、銭種の判明したものは１点を除いて寛永通寶のみである。複数の銭貨が出土した例では銭貨の表面に布片が付着するものや錆に布の痕跡が残る例が多く、銭貨を布に包んで納めていることが推測される。また、煙管の出土例も多い。数珠と考えられる小玉が５墓と41墓から出土している。

No	形　態	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　　物
1	円	94	93	58	人骨、鉄鎌１、鉄釘１
2	不整方	86	75	43	鉄製片口鍋１、鉄鎌１
3	隅丸方	(95)	(74)	25	人骨、長方形板状鉄製品（四隅に鋲あり）
4	不明				人骨、不明鉄器１
5	方	86	(75)	30	人骨、鉄鎌１、銭貨１（布付着）、鉄釘１、赤色の小玉３以上
6	隅丸方	108	95	37	人骨、鉄鎌１、鉄釘３
7	円	87	84	43	人骨、銭貨６（うち新寛永１、布付着）、煙管２、鉄釘４
8	不整隅丸方	108	95	32	人骨、鉄鎌１、銭貨５（うち新寛永２）、煙管１、鉄釘１
9	方	115	110	23	人骨
10	円	106	95	46	人骨、鉄鎌１、鉄釘１、土師質土器皿１、磁器２
11	隅丸方	116	114	45	人骨、刀子状鉄器１、鉄釘１、銭貨６（うち古寛永１、熙寧元○１、布痕あり）
12	方	90	(84)	29	人骨、銭貨10（うち古寛永１、新寛永２）、鉄釘１
13	方	92	92	52	人骨、鋏１、毛抜き？１、鉄釘２
14	長方	126	(106)	51	銭貨４以上（うち新寛永２）
15	方	112	93	25	
16	長方	115	80	39	人骨、銭貨５（うち新寛永２）
17	方	(118)	93	42	人骨、鋏１、銭貨９（うち古寛永２）
18	円	112	(106)	84	人骨、鉄板１、鉄釘９、銭貨３（うち新寛永２）
19	方	(90)	74	33	人骨、鋏１、毛抜き？１、銭貨４（うち新寛永文銭２、新寛永１）
20	円	100	(100)	37	人骨、鉄鎌１、鋏１、鉄釘３、銭貨２（うち新寛永１）、磁器皿１
21	円	底84	底82	50	人骨、鋏or毛抜き１、鉄釘３
22	円	97	92	48	人骨、鉄釘16
23	方	118	(117)	60	人骨、煙管３
24	方	(104)	85	48	人骨
25	円	102	96	65	人骨、鉄鎌１、鉄釘27
26	円	90	86	42	人骨、銭貨３（うち古寛永２、布付着）
27	円	85	(77)	42	人骨、鉄釘３
28	長方	118	(93)	48	人骨、鋏１、鉄釘１
29	円	111	(100)	76	人骨
30	隅丸方	128	(110)	60	人骨、鉄鎌１、銭貨５（うち新寛永１、布付着）
31	円	104	100	86	人骨、飾り金具１、銅針１、鉄釘１、煙管１、不明品１
32	隅丸長方	120	103	65	人骨、鉄鎌１、鉄釘２
33	楕円	99	87	77	人骨、銭貨６（うち新寛永１、布付着）
34	円	79	74	56	人骨、鉄釘13、徳利１、土師質土器１
35	方	86	82	33	人骨、鉄釘３、土師質土器皿１
36	円	90	86	77	人骨、鉄鎌１、鉄釘38
37	隅丸方	102	100	77	人骨
38	不整隅丸方	106	100	38	人骨、銭貨６（布付着）
39	円	114	103	101	人骨、鉄釘９、漆器漆膜（器種不明）
40	円	87	78	15	人骨、鋏１、板状鉄器１、鉄釘２、銭貨５
41	方	117	110	16	人骨、鋏１、鉄釘２、銭貨６（布付着）、じゅず製の玉13以上
42	方	105	96	22	人骨、鉄釘66、煙管１、銭貨５（布付着）、櫛１
43	方	97	94	7	人骨
44	円	(100)	96	17	人骨
45	隅丸方	89	85	12	人骨、鉄鎌１、銭貨６（布付着）
46	長方	113	90	30	人骨、鉄釘４、土師皿
47	長方	99	82	40	人骨、鉄鎌１、鉄釘37
48	円	86	83	8	人骨、鋏？１、鉄釘２
49	円	96	(86)	35	人骨
50	円	77	76	15	人骨、鋏１（布付着）、鉄釘４、不明鉄器１（鉄鎌の柄？）

Tab.５　近世墓一覧表(1)

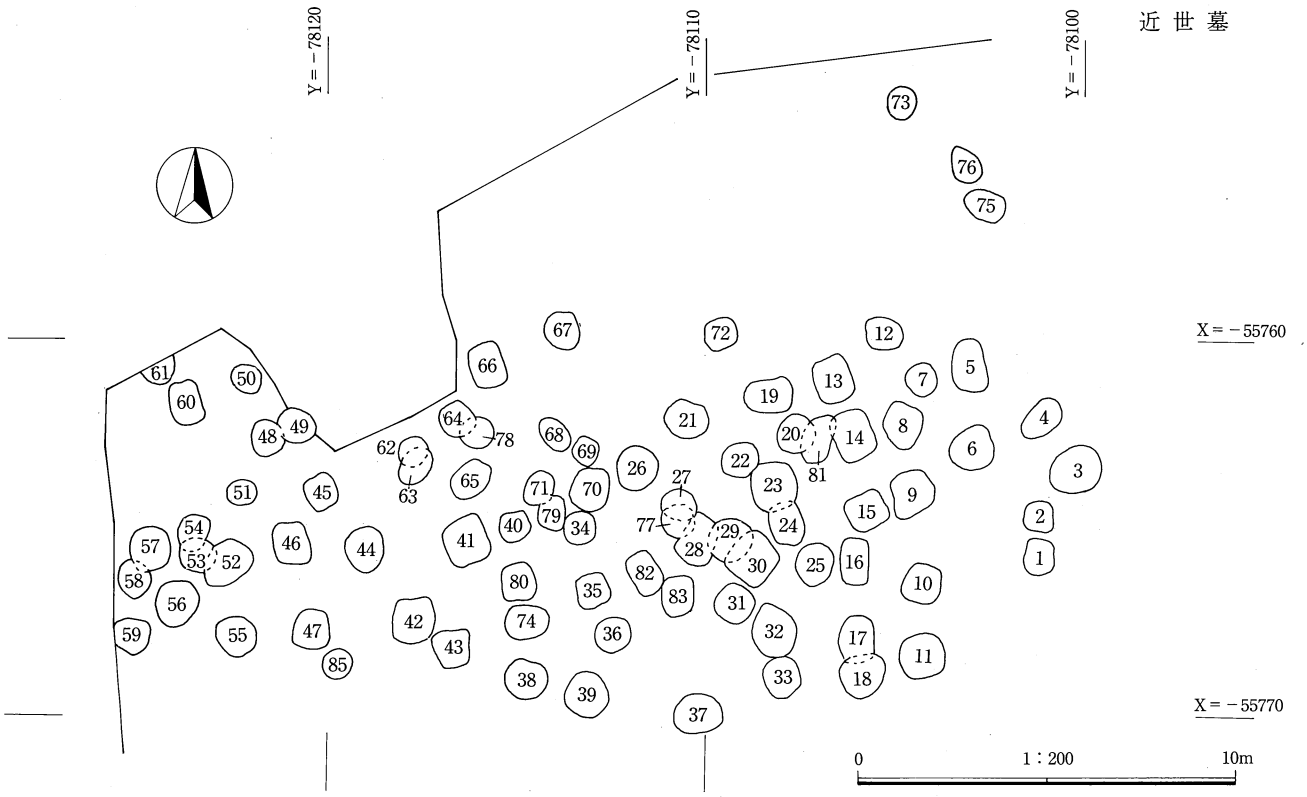


Fig. 51　近世墓位置図

No	形　態	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	遺　　物
51	円	75	70	7	人骨、鉄鎌１、銭貨５（うち古寛永１、布付着）
52	円	107	(100)	25	人骨、鋏？１、鉄釘１、銭貨６（うち新寛永１、布付着）
53	方	74	(71)	18	人骨
54	円	77	(70)	8	人骨、鋏？１、鉄釘２、銭貨12（うち新寛永１、布付着）
55	円	104	93	33	人骨、鉄釘23
56	隅丸方	119	109	21	人骨、鋏１、鉄釘１、銭貨４（うち新寛永１、布付着）
57	隅丸長方	113	88	19	人骨、鉄鎌１、銭貨１（古寛永）
58	円	89	76	19	人骨
59	円	100	(90)	13	人骨
60	長方	121	73	17	人骨
61	円	96	(70)	19	人骨、煙管１、銭貨４（うち新寛永１）
62	円	73	(53)	8	
63	楕円	104	(64)	13	人骨、鋏２、鉄釘17、銅線（簪１個体分？）、銭貨12（うち新寛永４）
64	方	84	75	10	人骨
65	楕円	100	76	12	人骨
66	長方	116	87	12	人骨
67	円	87	86	20	人骨
68	円	80	68	13	人骨、刀子状鉄器１、銭貨５（うち新寛永２）
69	隅丸方	68	68	9	人骨
70	方	101	95	19	人骨
71	円	(64)	(50)	1	人骨
72	円	89	80	17	人骨、鋏？、鉄鎌、釘
73	円	76	74	18	人骨、鋏、銭貨
74	円	99	(86)	25	人骨、鋏１、鉄釘２、銭貨11（うち古寛永１、布付着）
75	長方	(110)	(68)	13	人骨
76	円	(84)	(70)	9	銭貨
77	円	77	76	61	人骨、鉄鎌、煙管
78	円	84	(66)	5	銭貨４以上（うち新寛永２）
79	長方	86	63	12	人骨、銭貨、煙管、鉄板（鍋？）、漆器
80	長方	95	82	24	人骨、鎌、釘、銭貨
81	円	(125)	(77)	(38)	人骨、釘、煙管２
82	長方	106	70	7	人骨、煙管、銅線（簪？）、釘、鋲
83	長方	106	81	11	人骨、鋏？、銭貨
84	不明				人骨
85	円	74	71	21	人骨

１．（　）内の数値は推定値。　２．規模は墓壙上端における計測値。

Tab. 6　近世墓一覧表(2)

土 器 観 察 表

・矢印は、調整順序を示す。順序が不明なものについては読点（、）にて示した。
・土器の器面調整は数段階に分かれるが、前段階の調整は、次段階の調整により消されるため、調整部位は、おもに最終段階におけるものを記載した。
・調整の方向が記載されていないものは不定方向の調整である。
・表中には記載しないが、施文は、全て施文直下の器面調整の終了後に行われている。

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	SI-1	Fig. 6 PL. 21	甕底部	—	5.0	—	—	胴部：縦方向ハケ→ナデ、底部：ナデ・指オサエ	ナデ、底部：指オサエ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
2	SK-1	Fig. 10 PL. 19	甕	9.9	11.1	1	—	胴部板状工具による縦方向のナデ	不明	1～4㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良	外面口縁部～胴部上半煤付着
3	SK-1	Fig. 10 PL. 19	甕	14.8	13.4	1	—	ナデ、底部：指オサエ	口縁部：横方向ハケ、胴部以下：ナデ	1～4㎜内外の砂粒を多く含む	外面：にぶい橙色 内面：灰褐色	良好	外面口縁部～胴部上半煤付着
4	SK-1	Fig. 10	甕	19.2	6.2	1/12	口縁端部：タテ方向のキザミ、胴部上端：6条のヘラ描き沈線	口縁部：横方向ナデ、胴部：ナデ	口縁部：横方向ナデ、胴部：ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：灰黄褐色	良好	外面煤付着
5	SK-1	Fig. 10	深鉢	—	3.0	—	—	ナデ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色		—
6	SK-3	Fig. 17	底部	—	3.8	—	—	横方向ナデ	不明	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
7	SK-6	Fig. 17 PL. 19	須恵器坏身	13.3	4.6	1	—	底部：回転ヨコナデ→約4/5回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：灰色	良好	—
8	SK-6	Fig. 17 PL. 19	土師器碗	16.9	5.7	1	—	回転ヨコナデ→胴部～底部：回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	1～2㎜内外の砂粒を多く含む	外面：浅黄橙色 内面：にぶい橙色	良好	—
9	SK-7	Fig. 17 PL. 21	甕	19.9	10.8	1/4	—	ナデ→口縁部：横方向ミガキ	ナデ、不明瞭	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—
10	SD-1	Fig. 20 PL. 14	壺	26.0	2.0	1/20	口縁部内面：3条以上の貼付突帯	ナデ	ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：浅黄褐色	やや軟	—
11	SD-1	Fig. 20 PL. 14	壺	16.6	2.1	1/9	—	口縁端部：横方向ナデ→口縁部下半：横方向ミガキ	横方向ミガキ	0.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい褐色	良好	—
12	SD-1	Fig. 20 PL. 14	壺	14.5	4.3	1/5	—	横方向ナデ	横方向ナデ	1～3㎜の砂粒を粗に含む	内外面：にぶい橙色	やや軟	—
13	SD-1	Fig. 20 PL. 14	壺	14.2	3.9	1/5	頸部：1条以上のヘラ描き沈線	横方向ナデ	横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
14	SD-1	Fig. 20 PL. 13	壺	21.1	37.3	1	口縁端部：沈線のち縦方向キザミ、頸部：5条のヘラ描き沈線	口頸部：縦方向ハケ→ミガキ、胴部：ミガキ	口縁部：横方向ナデ→横方向ミガキ、胴部：縦方向ハケ→ナデ、底部：ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	胴部上半煤付着。内面頸部煤付着
15	SD-1	Fig. 20 PL. 14	無頸壺	15.0	3.7	1/12	頸部：1カ所以上の焼成後穿孔	ナデ	ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
16	SD-1	Fig. 20 PL. 14	甕	18.9	6.1	1/14	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：5条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部上端：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
17	SD-1	Fig. 20 PL. 14	甕	19.0	6.1	1/8	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：3条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部上端：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	0.5～4㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良	—
18	SD-1	Fig. 20 PL. 14	甕	22.0	6.1	1/7	胴部上端：6条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	—
19	SD-1	Fig. 20 PL. 14	甕	24.4	4.8	1/14	胴部上端：4条のヘラ描き沈線	胴部：縦・ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	口縁部：横方向ハケ→横方向ナデ、胴部ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
20	SD-1	Fig. 20 PL. 14	甕	28.0	3.7	1/12	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：5条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部上端：横方向ナデ	横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
21	SD-1	Fig. 20 PL. 14	鉢	26.9	6.2	1/8	胴部上半：12条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ハケ	2～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—

Tab. 7　土器観察表(1)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
22	SD-1	Fig.20 PL.14	甕	14.0	3.1	1/10	胴部上端：1条のヘラ描き沈線。口縁端部：1条の浅い沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ	0.5～1㎜内外の砂粒を含む	内外面：明褐色	良好	—
23	SD-1	Fig.20 PL.14	甕	21.0	5.4	1/9	口縁端部：1条の浅い沈線、胴部上端：2条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部上端：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	0.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい褐色	良好	—
24	SD-1	Fig.20 PL.14	甕	22.0	10.0	1/3	胴部上端：1条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部上端ナデ	胴部：ナデ→口縁部：横方向ナデ	0.5～1.5㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：橙色	良好	—
25	SD-1	Fig.20 PL.13	甕	21.7	25.9	1	口縁端部：タテ方向のキザミ、胴部上端：6条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→胴部：ナデ・口縁部：横方向ナデ？→胴部下半：横方向ミガキ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ・胴部下半～底部：ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
26	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	21.9	2.2	1/22	口縁端部：一部に縦方向キザミ、口縁端部貼り付け	胴部：縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	ナデ	0.5～1㎜内外の砂粒を含む	外面：明赤褐色 内面：にぶい橙色	良好	—
27	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	24.0	3.2	1/12	—	横方向ナデ	横方向ナデ、口縁部上端：横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
28	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	27.9	5.7	1/12	—	胴部：縦方向ハケ→口縁部～胴部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	—
29	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	35.6	7.7	1/10	—	胴部：ハケ→胴部：ナデ→口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良	—
30	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	18.1	4.3	1/8	—	胴部：縦方向ハケ→横方向ナデ	胴部：ナデ、口縁部：横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良好	—
31	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	17.9	5.0	1/8	—	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：灰黄褐色	良	—
32	SD-1	Fig.21 PL.14	甕	17.4	5.2	1/10	—	胴部：縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良好	—
33	SD-1	Fig.21 PL.15	甕底部	—	6.8	—	—	ミガキ	ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
34	SD-1	Fig.21 PL.15	底部	—	5.3	—	—	不明	不明	1～2㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：にぶい黄褐色	やや軟	—
35	SD-1	Fig.21 PL.15	甕底部	—	7.0	—	—	縦方向ハケ→底部下半：横方向ナデ	胴部：縦方向ハケ→底部付近横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良	内外面黒斑あり。外面煤付着
36	SD-1	Fig.21 PL.15	底部	—	7.3	—	—	ナデ→ミガキ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：橙色	やや不良	外面黒斑あり
37	SD-1	Fig.21 PL.15	底部	—	4.8	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	0.5～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい褐色	良好	外面煤付着
38	SD-1	Fig.21 PL.15	底部	—	5.7	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：黒褐色	良好	外面煤付着。内面黒斑あり
39	SD-1	Fig.21 PL.15	甕底部	—	8.7	—	—	ハケ→ナデ、底面ナデ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良	外面煤付着。内面黒斑あり
40	SD-1	Fig.21 PL.15	底部	—	5.2	—	—	縦方向ハケ→横方向ミガキ	ナデ	0.5～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
41	SD-1	Fig.21 PL.15	壺底部	—	15.4	—	—	縦方向ハケ→ナデ→縦方向ミガキ、底部下半：板状工具による縦方向ナデ	ナデ	0.5～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	やや軟	—
42	SD-2	Fig.26 PL.13	壺	16.5	14.0	1/2	頸部：1条のヘラ描き沈線	縦方向・ナナメ方向ハケ→ナデ→横方向ミガキ	横方向ハケ→横方向ナデ→口縁～胴部上半：横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好	—
43	SD-2	Fig.26 PL.18	壺	—	13.1	—	—	横方向ミガキ	ナデ、一部に横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	外面黒斑あり
44	SD-2	Fig.26	壺	—	11.6	—	—	不明瞭	横方向ハケ→ナデ・横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面黒斑あり
45	SD-2	Fig.26 PL.13	壺	11.9	21.4	1	頸部：5条のヘラ描き沈線	ナデ→ミガキ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	—
46	SD-2	Fig.26 PL.18	甕	20.7	17.2	1/3	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：7条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→ナデ、口縁部：横方向ナデ	ハケ→ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：黄橙色	良好	外面黒斑あり
47	SD-2	Fig.26	甕	19.3	2.6	1/32	口縁端部：縦方向キザミ	横方向ナデ	横方向ナデ→一部にミガキ	2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
48	SD-2	Fig.26 PL.18	甕	23.9	8.5	1/8	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：5条のヘラ描き沈線	ナナメ方向ハケ→ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：灰黄色	軟	—
49	SD-2	Fig.26 PL.18	甕	25.2	16.0	1/5	胴部上端：1条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良好	外面黒斑・煤付着。内面黒斑あり

Tab. 8　土器観察表(2)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
50	SD-2	Fig.26 PL.13	甕	26.4	22.2	1	—	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	横・ナナメ方向ハケ→ナデ・口縁部：横方向ナデ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：橙色	良好	外面煤付着
51	SD-2	Fig.26 PL.18	甕	25.0	13.8	1/3	口縁端部：タテ方向キザミ	縦方向ハケ→ナデ	横方向ナデ	１～２㎜内外の砂粒を粗に含む	外面：にぶい橙色 内面：橙色	やや軟	外面煤多量付着
52	SD-2	Fig.26 PL.13	甕	13.7	14.2	1	胴部上端：６条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→縦方向ナデ・口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：褐色 内面：明褐色	良好	外面煤付着。内面黒斑あり
53	SD-2	Fig.26	鉢	11.0	4.5	1/12	胴部上端：５条のヘラ描き沈線、口縁端部貼り付け	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙黄色	良	—
54	SD-2	Fig.26	蓋	14.2	2.4	—	—	不明	不明	0.5㎜内外の砂粒を密に含む		やや軟	—
55	SD-2	Fig.27	甕底部	—	8.2	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1.5～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：浅黄橙色	良	内面黒斑あり
56	SD-2	Fig.27	甕底部	—	9.8	—	—	縦方向ハケ	ハケ→ナデ	２～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：浅黄橙色	良好	内面煤付着
57	SD-2	Fig.27	底部	—	9.2	—	—	縦方向ハケ→縦方向ナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	外面黒斑あり
58	SD-2	Fig.27	底部	—	8.4	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1.5～２㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	良	内面黒斑あり
59	SD-3	Fig.29	甕	19.1	3.4	1/14	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：２条のヘラ描き沈線	口縁部：横方向・胴部：縦方向ハケ→横方向ナデ	横方向ハケ→横方向ナデ	１～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—
60	SD-3	Fig.29 PL.19	甕	24.3	13.7	1	—	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ハケ→口縁部～胴部：ナデ	0.5～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	外面煤付着
61	SD-4	Fig.29 PL.21	壺・鉢底部	—	8.4	—	—	ナデ	ナデ	１～3.5㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：黄橙色	良	—
62	SD-3	Fig.29	壺・鉢底部	—	3.9	—	—	縦方向ミガキ	ナデ、一部に縦方向ミガキ	１～3㎜内外の砂粒を密に含む	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	良	—
63	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	16.1	2.6	1/12	—	縦方向ハケ→ナデ、口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ→横方向ミガキ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	—
64	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	16.6	3.3	1/12	頸部：１条以上のヘラ描き沈線	横方向ナデ→横方向ミガキ	横方向ハケ→横方向ミガキ	１～４㎜内外の砂粒を含む	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
65	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	18.9	4.5	1/22	—	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ、胴部：一部にミガキ	ナデ→口縁部：横方向ミガキ	１㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	良好	—
66	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	14.1	8.6	1/5	—	縦方向ハケ→横方向ミガキ	横方向ハケ→横方向ミガキ・口縁部横方向ナデ	１～３㎜内外の砂粒を密に含む	外面：明赤褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	—
67	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	24.0	1.3	1/13	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）	不明瞭	横方向ナデ→横方向ミガキ	１㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙色	良好	—
68	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	24.0	2.8	1/13	口縁端部：一部に有軸羽状文	不明瞭	不明瞭	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	—
69	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	13.0	6.0	1/8	—	横方向ナデ→横方向ミガキ	ナデ→ミガキ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色・黒褐色 内面：橙色	良好	—
70	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	—	7.4	—	頸部：６条のヘラ描き沈線	ハケ→ミガキ	ミガキ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好	—
71	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	—	5.0	—	頸部：11条のヘラ描き沈線、沈線直下に断面V字形の刺突文	横方向ナデ	ナデ→ミガキ	１～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—
72	SD-5	Fig.32 PL.20	壺	—	9.4	—	頸部：２条の貼り付け突帯	横方向ナデ→横方向ミガキ	横方向ナデ→横方向ミガキ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	良好	—
73	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	20.7	3.2	1/12	胴部上端：２条のヘラ描き沈線	胴部：縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ	１㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
74	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	22.0	3.4	1/10	胴部上端：６条以上のヘラ描き沈線	不明	不明	１㎜内外の砂粒を密に含む	外面：浅黄橙色 内面：橙色	良好	—
75	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	23.0	4.3	1/14	口縁端部：ナナメ方向のキザミ、胴部上端：７条以上のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→横方向ナデ	横方向ナデ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙色	良好	外面煤付着
76	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	21.0	13.5	1/4	口縁端部：縦方向の浅いキザミ、胴部上端：４条のヘラ描き沈線	胴部：横方向ハケ→口縁部～胴部：横方向ナデ	横方向ナデ	１～４㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
77	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	24.9	9.4	1/24	口縁端部：縦方向のキザミ、胴部上端：７条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→縦方向ナデ・口縁部：横方向ナデ	横方向ハケ→縦方向ナデ・口縁部：横方向ナデ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	良好	外面煤付着
78	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	25.7	8.6	1/8	口縁端部：縦方向のキザミ、胴部上端：９条のヘラ描き沈線	タテ方向ハケ→横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—

Tab. 9　土器観察表(3)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
79	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	27.8	6.7	1/12	口縁端部：縦方向のキザミ	ナデ	ナデ	4㎜内外の砂粒を含む	外面：褐灰色 内面：にぶい橙色	良好	—
80	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	24.1	3.0	1/14	口縁端部：縦方向のキザミ	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→ナデ・口縁部：横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙色	良好	—
81	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	19.9	2.3	1/16	—	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
82	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	25.9	3.9	1/12	—	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	ハケ状工具によるヨコ方向の強いナデ、横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
83	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	28.9	4.0	1/16	—	横・ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	1～4㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	—
84	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	28.0	6.6	1/14	—	縦方向ハケ→縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ナデ→横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
85	SD-5	Fig.32 PL.20	甕	28.9	10.0	1/12	—	不明	ナナメ方向ハケ→ナデ	1～2㎜内外の砂粒を密に含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい赤褐色	良好	—
86	SD-5	Fig.33 PL.21	甕	14.9	4.0	1/10	—	ナデ	横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：橙色	良好	—
87	SD-5	Fig.33 PL.20	甕	18.9	3.7	1/20	—	横方向ナデ	横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
88	SD-5	Fig.33 PL.20	甕	19.0	4.6	1/18	—	縦方向ハケ→縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ミガキ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：橙色	良好	—
89	SD-5	Fig.33 PL.20	甕	17.3	6.9	1/10	—	縦方向ハケ→縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナデ	1～5㎜内外の砂粒を含む	内外面：黄橙色	良好	外面煤付着
90	SD-5	Fig.33 PL.21	鉢	18.9	6.8	1/12	口縁端部貼り付け	ナナメ方向ハケ→ナデ	横方向ハケ→ナデ	1㎜内外の粗砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
91	SD-5	Fig.33 PL.21	甕	24.0	1.5	1/28	口縁端部貼り付け	横方向ナデ	横方向ハケ→横方向ナデ	2～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい褐色	良好	—
92	SD-5	Fig.33 PL.21	甕	15.0	3.0	1/12	口縁端部貼り付け	不明	不明	1～4㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	良好	外面煤付着
93	SD-5	Fig.33 PL.20	甕	—	5.8	—	胴部上端：5条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→ナデ	横方向ハケ→横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	外面煤付着
94	SD-5	Fig.33 PL.21	甕	—	1.2	—	口縁端部：縦方向キザミ、口縁端部貼り付け	不明	不明	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
95	SD-5	Fig.33 PL.20	壺	—	2.6	—	胴部：ヘラ描き沈線の直下に貝殻腹縁による縦方向の区画線・羽状文	ナデ	不明	1～1.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
96	SD-5	Fig.33 PL.21	蓋	10.0	2.4	—	—	指による成形→軽いナデ	指による成形→軽いナデ	0.5㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	良好	—
97	SD-5	Fig.33 PL.21	無頸壺	9.3	7.2	1/6	—	横方向ミガキ	横方向・ナナメ方向ミガキ	1㎜内外の砂粒をわずかに含む	外面：にぶい黄橙色 内面：淡黄色	良好	—
98	SD-5	Fig.33 PL.21	深鉢	—	5.6	—	口縁端部よりやや下る位置に、断面V字状の貼り付け突帯	横方向ナデ	横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：灰黄褐色	良	—
99	SD-5	Fig.33	深鉢	—	5.5	—	口縁端部よりやや下る位置に透かし穴（焼成前穿孔）	横方向ナデ、一部ヘラ状工具によるナデ	横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	良	—
100	SD-5	Fig.33 PL.21	深鉢	36.2	3.3	—	口縁端部よりやや下る位置に、断面V字状の貼り付け突帯	横方向ナデ	横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：灰黄褐色	良	—
101	SD-5	Fig.33	底部	—	3.0	—	—	不明	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：灰褐色 内面：にぶい橙色	良好	—
102	SD-5	Fig.33	甕底部	—	5.0	—	—	縦方向ハケ→ナデ	不明	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
103	SD-5	Fig.33	甕底部	—	4.6	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良好	—
104	SD-5	Fig.33	底部	—	5.3	—	—	縦方向ハケ→ナデ	横方向の軽いケズリ	1～5㎜内外の砂粒を多く含む	外面：灰赤色 内面：にぶい赤橙色	やや良	—
105	SD-5	Fig.33	底部	—	3.8	—	—	ナデ	調整不明	1～3㎜内外の砂粒を多く含む	内外面：橙色	良好	—
106	SD-5	Fig.33	底部	—	3.9	—	—	縦方向ミガキ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
107	SD-5	Fig.33	底部	—	5.7	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1～5㎜内外の砂粒を多く含む	外面：にぶい赤褐色 内面：黒褐色	良好	—
108	SD-5	Fig.33	底部	—	4.8	—	—	ナデ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
109	SD-5	Fig.33	底部	—	3.5	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を密に含む	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—

Tab.10　土器観察表(4)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
110	SD-5	Fig.33	底部	—	4.1	—	—	縦方向ハケ	ナデ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色	良好	—
111	SD-5	Fig.33	底部	—	5.7	—	—	ナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：褐灰色	良好	—
112	SD-5	Fig.33	底部	—	6.6	—	—	縦方向ハケ→ナデ	ナデ	１～４㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好	—
113	SD-5	Fig.33	底部	—	2.7	—	—	ナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を少量含む	外面：にぶい褐色・黒褐色 内面：橙色	良好	—
114	SD-5	Fig.33	底部	—	9.1	—	—	縦方向ナデ→胴部：ミガキ	ナデ→胴部：ミガキ	１～４㎜内外の砂粒を密に含む	外面：にぶい赤褐色 内面：橙色	良好	—
115	SD-5	Fig.33	甕底部	—	12.5	—	—	板状工具によるナナメ方向のナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	良好	—
116	SD-6	Fig.36	甕	21.8	3.9	—	胴部上端：５条のヘラ描き沈線	横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	1.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
117	SD-6	Fig.36 PL.19	壺	—	16.5	—	胴部中程：３条のヘラ描き沈線	ハケ→横方向ミガキ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
118	SD-7·8	Fig.38	壺	10.0	2.6	—	口縁端部：ナナメ方向のキザミ、頸部：１条以上のヘラ描き沈線	ナデ	ナデ→一部ミガキ	0.5～2.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
119	SD-7·8	Fig.38	甕	14.0	1.9	—	—	ナデ	ナデ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：明褐色	良	—
120	SD-7·8	Fig.38	甕	15.8	1.8	—	口縁端部貼り付け	横方向ナデ	横方向ナデ	２㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：橙色	良	—
121	SD-7·8	Fig.38	甕	12.0	6.0	—	—	ナデ	ナデ	0.5～2.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
122	SD-7·8	Fig.38	壺	—	4.9	—	胴部上端：４条以上のヘラ描き沈線	横方向ナデ	横方向ナデ	0.5～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：明黄褐色	良	—
123	SD-7·8	Fig.38	甕？	—	4.4	—	胴部上端：６条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→ナデ	横方向ハケ	１～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄褐色	良	—
124	SD-7·8	Fig.38	甕	—	4.6	—	胴部上端：３条のヘラ描き沈線	縦方向ハケ→ナデ・口縁部：横方向ナデ	口縁部：横方向ハケ→横方向ナデ	３㎜以下の砂粒を密に含む	内外面：明赤褐色	良	—
125	SD-7·8	Fig.38	甕	—	5.9	—	胴部上端：６条のヘラ描き沈線	横方向ナデ	横方向ナデ	１～２㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：橙色	良	—
126	SD-7·8	Fig.38	甕底部	—	4.9	—	—	ナデ→底部下端：板状工具による横方向軽いケズリ	ナデ	１～３㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
127	SD-7·8	Fig.38	甕底部	—	5.5	—	—	不明	不明	２㎜以下の砂粒を密に含む	内外面：浅黄橙色	良	—
128	SD-7·8	Fig.38	陶器皿	9.4	2.7	1/6	外面：体部上半施釉、下半露胎、内面：施釉	体部上半：回転ヨコナデ、体部下半：回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒を少量含む	内外面：オリーブ灰色	良	唐津産、16世紀後葉
129	SD-7·8	Fig.38	陶器皿	12.0	2.5	1/6	体部上半施釉、下半露胎、施釉、底面に砂目２カ所	体部上半：回転ヨコナデ、体部下半：回転ヘラケズリ、高台部ケズリ出し	口縁部上面：回転ヨコナデによる浅い溝状の窪みをもつ、皿部：回転ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒を少量含む	内外面：灰オリーブ色	良	唐津産、17世紀前半
130	SD-8	Fig.40	甕	25.0	2.2	1/16	—	横方向ナデ	横方向ナデ	２㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
131	SD-9	Fig.41 PL.21	擂鉢	30.6	7.9	1/24	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒を少量含む	内外面：灰色	良	—
132	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	12.8	6.2	1/12	—	不明	不明	２～３㎜内外の砂粒をやや密に含む	外面：黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良	—
133	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	15.6	3.7	1/8	口縁端部：１条の浅い沈線、頸部：１条のヘラ描き沈線	ナデ→横方向ミガキ	ナデ→横方向ミガキ	３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	良	—
134	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	14.8	4.5	1/8	—	縦方向ハケ→ナデ→横方向ミガキ	ナデ→横方向ミガキ	１～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良	—
135	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	16.9	4.0	1/6	—	横方向ナデ→横方向ミガキ	横方向ナデ→横方向ミガキ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：赤褐色	良	—
136	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	17.0	5.2	—	—	縦方向ハケ・ナデ→横方向ミガキ	横方向ハケ→横方向ナデ→横方向ミガキ	１～２㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
137	遺構外	Fig.46 PL.22	無頸壺	—	4.5	—	肩部：２条のヘラ描き沈線、頸部：２個の透かし穴（焼成前穿孔）	ナデ	ナデ	１～３㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄橙色～黄灰色 内面：黄灰色	良	焼成前穿孔２ヶ所
138	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	17.0	2.7	1/12	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）	横方向ミガキ	横方向ミガキ	0.5～２㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：赤褐色	良	—
139	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	20.0	3.3	1/8	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）	横方向ナデ→横方向ミガキ	横方向ナデ→横方向ミガキ	１～３㎜内外の砂粒を含む	内外面：赤褐色	良	—

Tab.11　土器観察表(5)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
140	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	21.0	2.5	1/16	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）	不明	横方向ナデ→横方向ミガキ	1～3㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：橙色	良	—
141	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	22.0	5.2	1/12	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）、頸部：2条以上のヘラ描き沈線	縦方向ハケ	ナデ→一部に横方向ミガキ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
142	遺構外	Fig.46 PL.21	壺	21.3	5.3	1/10	口縁端部：有軸羽状文（沈線→ナナメ方向キザミ）	縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	ナデ	2㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
143	遺構外	Fig.47 PL.21	甕	21.2	3.6	1/8	胴部上端：2条のヘラ描き沈線	横方向ナデ	横方向ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
144	遺構外	Fig.47 PL.21	甕	22.0	4.1	1/12	胴部上端：3条のヘラ描き沈線	横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ハケ	1～2㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい赤褐色 内面：明赤褐色	良	外面黒斑あり
145	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	19.4	11.9	1/6	—	縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	板状工具によるナナメ方向のナデ	0.5～2㎜内 外の砂粒を含む	内外面：明褐色	良	外面炭化物付着
146	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	20.4	8.3	—	—	縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナデ→口縁部：横方向ナデ	0.5～2㎜内 外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	外面炭化物付着
147	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	22.8	5.6	1/8	—	横方向ナデ→胴部：縦方向ハケ	ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ハケ	3㎜以下の砂粒を多く含む	外面：橙色 内面：明赤褐色	良	—
148	遺構外	Fig.47 PL.21	甕	24.0	4.4	1/10	口縁端部：縦方向キザミ	横方向ナデ	横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良	—
149	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	24.0	5.0	1/16	—	ナデ	ナデ	2㎜内外の砂粒を含む	内外面：黄橙色	良	—
150	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	24.0	10.0	1/19	—	口縁部：横方向ナデ→胴部：ナナメ方向の丁寧なナデまたはミガキ	ナナメ方向ミガキ→口縁部：横方向ミガキ	0.5～3㎜内 外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
151	遺構外	Fig.47 PL.15	甕	15.0	16.0	1/3	口縁端部：一部に縦方向の浅いキザミ、口縁端部貼り付け	板状工具の縦方向ナデ→口縁部：横方向ナデ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
152	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	17.1	1.7	1/16	口縁端部：縦方向キザミ、口縁端部貼り付け	胴部ハケ→ナデ	ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
153	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	19.9	1.9	1/24	胴部上端：1条以上のヘラ描き沈線、口縁端部貼り付け	口縁部～胴部：縦方向ハケ→ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	2㎜以下の砂粒を含む	内外面：桃色	良	—
154	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	18.0	4.5	1/16	口縁端部貼り付け	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい赤褐色 内面：橙色	良	—
155	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	21.0	1.7	1/16	口縁端部：縦方向キザミ、胴部上端：2条以上のヘラ描き沈線、口縁端部貼り付け	ナデ	ナデ	0.5～2㎜内 外の砂粒を含む	内外面：黄橙色	良	—
156	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	25.0	3.5	1/24	口縁端部貼り付け	横方向ナデ	横方向ハケ→横方向ナデ	3㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良	—
157	遺構外	Fig.47	甕	22.0	2.8	1/14	口縁端部貼り付け	口縁部：横方向ナデ→胴部：縦方向ハケ	板状工具によるナナメ方向ナデ	1～3.5㎜内 外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
158	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	23.9	10.9	1/24	口縁端部：縦方向キザミ、口縁端部貼り付け	縦方向ハケ→ナデ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ、口縁部：横方向ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良	—
159	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	21.2	5.3	1/12	—	ハケ→口縁部：横方向ナデ	横方向ナデ	0.5～2.5㎜内外の砂粒を含む	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	良	—
160	遺構外	Fig.47 PL.22	甕	19.0	6.4	1/16	—	縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	ナナメ方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	1～4㎜内外の砂粒を含む	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面黒斑あり
161	遺構外	Fig.47	壺底部	—	10.6	—	—	ナナメ方向ハケ→縦方向ミガキ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を多く含む	内外面：にぶい橙色	良好	—
162	遺構外	Fig.47	壺底部	—	5.1	—	—	縦方向ハケ→縦方向ミガキ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい橙色～黒褐色 内面：褐灰色	良好	—
163	遺構外	Fig.47	壺底部	—	9.9	—	—	縦方向のハケ→底部付近：横方向ハケ	ナデ→横方向ミガキ	1～3㎜内外の砂粒を含む	内外面：橙色	良好	—
164	遺構外	Fig.47	壺底部	—	13.8	—	—	ナナメ方向ハケ→ナデ	胴部：ミガキ、底部：ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	良好	—
165	遺構外	Fig.48 PL.22	甕、鉢	14.0	2.6	1/12	口縁端部貼り付け	横方向ナデ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を多く含む	内外面：明黄褐色	良	—
166	遺構外	Fig.48 PL.22	甕、鉢	16.0	4.0	1/8	—	縦方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	胴部：ナナメ方向ハケ、口縁部：横方向ハケ→口縁部：横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を少量含む	内外面：にぶい赤褐色	良	—
167	遺構外	Fig.48	甕、鉢	15.9	3.2	—	口縁端部：縦方向キザミ	ナナメ方向ナデ→横方向ナデ	横方向ハケ→横方向ナデ	0.5～2㎜内 外の砂粒を含む	外面：黒色 内面：明赤褐色	良好	—
168	遺構外	Fig.48 PL.22	甕	11.8	5.9	1/2	—	ハケ→口縁部：横方向ナデ	ハケ	0.5～2㎜内 外の砂粒を含む	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	良	—
169	遺構外	Fig.48 PL.22	蓋	16.0	3.5	1/16	—	横方向のやや強いナデ	横方向ハケ→ナデ	0.5～1㎜内 外の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄橙色	良	—

Tab.12　土器観察表(6)

遺物No	遺構	Fig. PL.	器種	口径(cm)	器高(cm)	口縁残存率	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
170	遺構外	Fig.48 PL.22	蓋	27.0	2.7	1/16	—	ナデ→ミガキ	ハケ	0.5～3㎜内外の砂粒を含む	外面：灰褐色 内面：にぶい黄褐色	良	—
171	遺構外	Fig.48 PL.22	蓋	27.0	3.0	1/20	—	縦方向ハケ→ミガキ	ナデ	0.5～3㎜内外の砂粒を密に含む	外面：橙色 内面：赤色	良	—
172	遺構外	Fig.48 PL.22	口縁部	21.9	3.2	1/24	—	指オサエ→軽いナデ	ナデ	1.5㎜以下の砂粒を密に含む	内外面：にぶい黄橙色	良	手ずくね成形
173	遺構外	Fig.48 PL.22	深鉢	—	6.2	—	—	横方向のやや強いナデ	横方向ナデ	1.5㎜以下の砂粒を含む	内外面：灰黄色	良	—
174	遺構外	Fig.48 PL.22	甕	15.6	3.8	1/10	口縁部：櫛描き平行沈線	横方向ナデ	口縁部：横方向ナデ、胴部：ケズリ	1㎜内外の砂粒を密に含む	内外面：橙色	良	—
175	遺構外	Fig.48 PL.22	甕	—	2.4	—	口縁部：櫛描き平行沈線	横方向ナデ	横方向ナデ	1～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	—
176	遺構外	Fig.48	須恵器蓋	—	2.7	—	—	体部：回転ヨコナデ→天井部：約1/3回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	1㎜内外の砂粒を少量含む	内外面：灰色	良好	—
177	遺構外	Fig.48	須恵器坏蓋	15.0	3.0	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	1㎜内外の砂粒を少量含む	内外面：灰色	良好	—
178	遺構外	Fig.48 PL.22	須恵器坏身	12.6	3.4	1/6	—	口縁・受け部：回転ヨコナデ→底部：約1/2を回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	1㎜以下の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良	—
179	遺構外	Fig.48 PL.22	須恵器坏身	12.3	2.7	1/8	—	口縁・受け部：回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	1㎜内外の砂粒を少量含む	内外面：灰色	良	—
180	遺構外	Fig.48 PL.22	須恵器坏身	10.4	4.2	1/12	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	1㎜内外の砂粒を少量含む	内外面：灰色	良	—
181	遺構外	Fig.49 PL.22	甕	15.6	3.7	1/10	胴部上端：5条のヘラ描き沈線の上下に棒状工具による刺突文	横方向ナデ	横方向ミガキ	0.5～1.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	外面黒斑あり
182	遺構外	Fig.49 PL.22	甕	16.4	4.0	1/16	胴部上半：5条のヘラ描き沈線の間に棒状工具による竹管文状の刺突文、口縁端部貼り付け	横方向ナデ	横方向ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	外面：にぶい褐色 内面：橙色	良	竹管文を施す
183	遺構外	Fig.49 PL.22	甕	—	3.3	—	胴部：2条以上のヘラ描き沈線の直下に楕円形の刺突文	ハケ→ナデ	ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい黄橙色	良	外面黒斑あり
184	遺構外	Fig.49 PL.22	甕	—	3.6	—	胴部：3条以上のヘラ描き沈線の直下にヘラ状工具による刺突文	ナデ	ナデ	1～3㎜内外の砂粒を含む	外面：灰褐色 内面：にぶい褐色	良好	外面煤付着
185	遺構外	Fig.49 PL.22	壺	—	3.1	—	—	—	ナデ	密。0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：にぶい褐色	良	
186	遺構外	Fig.49 PL.22	壺	—	4.8	—	肩部：上下4条以上のヘラ描き沈線の間に、貝殻腹縁の刺突による羽状文	ナデ	ナデ	0.5～1.5㎜内外の砂粒を含む	内外面：明黄褐色	良好	貝殻腹縁による文様
187	遺構外	Fig.49 PL.22	壺	—	4.1	—	肩部：6条以上のヘラ描き沈線の直上に、貝殻腹縁の刺突による羽状文	ナデ	ナデ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良好	貝殻腹縁による文様
188	遺構外	Fig.49 PL.22	壺	—	5.3	—	胴部：6条以上のヘラ描き直線文の上下に、ヘラ描き沈線による三角形の文様（ヘラ描き直線文→三角形文）	ナデ→一部ミガキ	縦方向ナデ	0.5～1.5㎜内外の砂粒を少量含む	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	良好	ヘラ描文様
189	遺構外	Fig.49 PL.21	甕	—	7.1	—	胴部：5条以上のヘラ描き沈線の直下にヘラ状工具による三角形の刺突文	縦方向ハケ	ナデ	1㎜内外の砂粒を含む	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良好	—
190	遺構外	Fig.49 PL.14・22	匙形土製品	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	0.5～2㎜内外の砂粒を含む	内外面：明赤褐色	良	—

Tab.13　土器観察表(7)

遺物NO.	遺構	Fig. PL.	特　　徴	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石　　材
S1	SI-1	Fig. 7 PL.16	片面・小口部分に敲打痕	17.8	9.8	7.0	1.82	石英安山岩
S2	SK-1	Fig.11 PL.19	長軸方向に磨り痕、砥石	12.8	8.8	5.4	0.85	流紋岩質凝灰岩
S3	SK-1	Fig.11 PL.16	片面に磨り痕、砥石	13.3	11.2	6.3	1.03	石英安山岩
S4	SK-1	Fig.11 PL.19	片面に磨り痕、敲打痕	26.7	23.5	12.1	8.66	凝灰岩
S5	SD-1	Fig.24 PL.15	片面に敲打痕、端部に剥離痕	22.2	17.3	6.5	3.92	安山岩
S6	SD-1	Fig.24 PL.15	片面に敲打痕	13.9	18.8	6.8	2.44	石英安山岩
S7	SD-1	Fig.24 PL.15	片面に敲打痕	14.3	10.3	4.0	0.85	石英安山岩
S8	SD-1	Fig.24 PL.15	長軸側両端部に敲打痕	13.7	8.3	7.2	1.21	安山岩
S9	SD-1	Fig.24 PL.15	両面中央部周辺に敲打痕	8.9	7.3	3.8	0.35	石英安山岩
S10	SD-1	Fig.24 PL.15	両面中央部周辺に敲打痕	11.8	9.2	5.7	0.77	石英安山岩
S11	SD-1	Fig.26 PL.17	武器形の石製品、石剣・石戈の先端部か	5.0	1.5	0.5	4.9g	粘板岩
S12	SD-1	Fig.26 PL.17	石核、摩滅あり	6.2	3.4	2.6	51g	黒曜石
S13	SD-2	Fig.32 PL.17	表裏の両端に刃部の調整あり、打製の穂摘み具、石剣か	6.1	4.2	0.8	23g	粘板岩
S14	SD-2	Fig.32 PL.16	片面のほぼ全面に石の長軸に平行する磨り痕、砥石	30.5	18.4	9.6	4.56	安山岩質軽石
S15	SD-5	Fig.39 PL.16	両面中央部周辺に敲打痕	12.7	9.3	5.4	0.85	石英安山岩
S16	SD-5	Fig.39 PL.16	片面中央部周辺に敲打痕	13.0	10.7	5.3	1.08	石英安山岩
S17	SD-5	Fig.39 PL.16	長軸側片側端部に敲打痕	12.0	9.7	5.7	0.87	石英安山岩
S18	SD-5	Fig.39 PL.16	両面中央部周辺に敲打痕	12.3	10.4	2.8	0.51	安山岩
S19	SD-5	Fig.39 PL.16	両面中央部周辺に敲打痕	13.0	11.4	6.4	1.22	安山岩
S20	SD-5	Fig.39 PL.16	四面の短軸方向に敲打による溝状の窪み	12.4	お	5.3	0.90	安山岩
S21	SD-5	Fig.39 PL.16	片面に敲打による窪み	19.5	14.2	6.0	2.29	安山岩質軽石
S22	SD-5	Fig.40 PL.17	石材中央付近に両面からの穿孔、両面に自然剥離面を残す、打製の石包丁か	8.4	8.9	0.7	53.5g	粘板岩
S23	SD-5	Fig.40 PL.17	石材両端部分の両面に調整、打製の石鎌か	3.7	4.3	0.6	8.5g	安山岩（サヌカイト）
S24	SD-7	Fig.44 PL.17	太型蛤刃石斧	17.4	6.1	4.3	0.79	閃緑岩
S25	SD-7・8	Fig.47 PL.15	片面中央部に敲打痕、周囲の端面に敲打・剥離痕	11.3	8.4	3.5	0.46	安山岩
S26	SD-7・8	Fig.47 PL.15	両面中央部周辺・両端部に敲打痕	14.1	13.8	5.1	1.47	安山岩
S27	SD-7・8	Fig.47 PL.15	両面中央部付近に敲打痕	14.2	11.2	5.0	0.99	安山岩質凝灰岩
S28	SD-7・8	Fig.47 PL.15	三面に磨り痕、砥石	8.0	8.3	5.0	0.38	花崗岩
S29	SD-7・8	Fig.55 PL.15	石材中央部両端付近に2カ所の穿孔か	34.3	18.8	12.5		安山岩
S30	遺構外	Fig.55	両極方向からの剥離、楔形石器	2.8	1.8	0.8	3.40	黒曜石
S31	遺構外	Fig.55 PL.17	両極方向からの剥離、楔形石器	3.7	1.9	1.4	8.60	赤玉髄
S32	遺構外	Fig.55 PL.17	左右両端部の両面および突起部分に調整、石匙か	3.9	3.7	0.5	8.20	安山岩（サヌカイト）
S33	遺構外	Fig.55 PL.17	両面の外端部を調整、中央部は自然剥離面を残す、石鏃	1.8	1.5	0.2	0.6g	安山岩（サヌカイト）
S34	遺構外	Fig.55 PL.16	両面中央部付近に敲打痕	11.1	10.2	3.9	0.58	安山岩
S35	遺構外	Fig.55 PL.17	表裏に磨り痕、片面中央部付近に赤色の付着物	9.4	7.5	3.2	0.30	流紋岩

Tab.14　石器観察表

５．まとめ

今回の調査では、弥生時代前期後半の所産とみられる建物跡１、土坑２以上、溝状遺構６のほか、古墳時代後期の土坑１、16世紀前葉の溝状遺構１、中世～近世の可能性がある溝状遺構１などが出土した。以下、まとめと遺構についての二、三の解釈を提示しておきたい。

SK－１、SD－５埋土中から縄文時代晩期の突帯文土器が出土している。検出できなかったが周辺に当該期の遺構が存在した可能性がある。

弥生時代前期後半（Ⅰ－４）[1]の溝状遺構は、南北方向を主軸としながらも東側に緩やかに湾曲している。調査地の東側は南北方向の谷であることから、台地の縁辺部に沿い掘削されたものと想定される。北側は削平されているため明らかではないが、すべての溝状遺構が東側に湾曲することからみて、本来的な地形がやや東寄りに張り出していたか、もしくは、溝状遺構自体が東側の谷部分へ抜けていたかのいずれかであろう。SD－１～４・６がほぼ平行し、出土した遺物も顕著な時期差が見受けられないことから、同時に機能していた可能性がある。溝状遺構の西側には、これらと同時期の所産とみられる集落遺構がある。調査地の西側は平地が続いており、集落が溝状遺構により囲繞されていたのかどうか現状では分からない。弥生時代前期の溝状遺構は西日本の各地域で検出されており、とくに断面V字形を呈する大規模なものは集落域を囲繞する環濠として理解されている。西伯耆では、部分的な出土にとどまる例を含めて６遺跡で検出されている。とくに、西伯町清水谷遺跡では、内部に同時期の集落遺構はみられないものの、一定の区域を囲繞することが確認されている。

こうした、本遺跡における形態、および周辺地域の様相を鑑みるに、本遺跡の溝状遺構をいわゆる環濠として評価するのが現状では妥当と思われる。SD－１などから多量の礫が出土した。石材は安山岩、安山岩系の軽石が主であり、調査地周辺の河原や海岸で採取できるものである。環濠埋土中から多量の礫が出土した例は、西伯町清水谷遺跡、島根県三刀屋町要害遺跡[2]、中期後半の所産であるが、松江市田和山遺跡などで確認されている。環濠の機能を考える上で示唆的な要素であろう。

古墳時代後期の遺構にはSK－６がある。脂肪酸分析の結果埋葬は確認できなかったが、土坑の形状などからみて埋葬施設の可能性は高い。周辺からも、６世紀後半～７世紀初頭の須恵器が若干出土している。

SD－８は、時期決定の根拠が希薄であるが、北側に向かいスロープ状に下降する形態から、道として機能していた可能性がある。

註　(1)　松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社1992の編年観を用いている。詳細は、第５章考察69p 註(1)を参照いただきたい。

(2)　島根県埋蔵文化財調査センター　仁木 聡氏のご教示による。

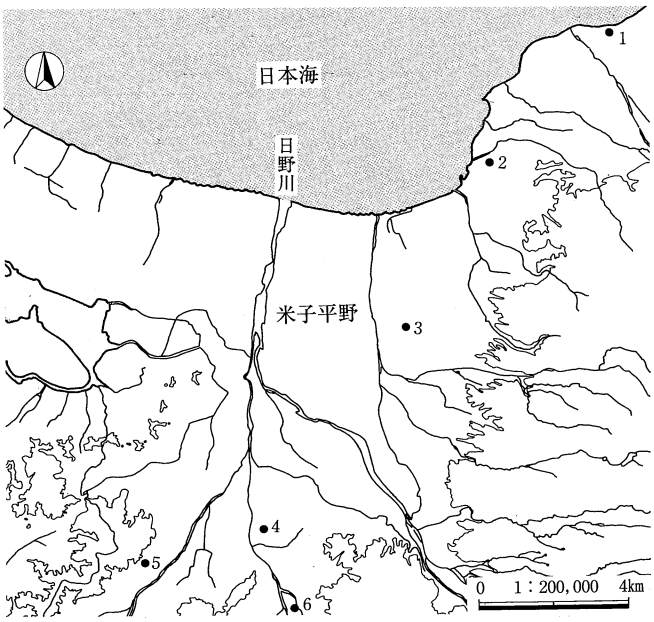


Fig. 52　西伯耆における弥生時代前期の環濠出土遺跡

No.	遺跡名	時期	立地	概　　要
1	大塚岩田遺跡	Ⅰ-4	標高27m前後の台地北端部	南北方向に平行する６本の溝状遺構。断面V字形、U字形。SD－１からは多量の円礫。溝の西側では集落遺構を検出。
2	今津岸の上遺跡	Ⅰ-4	標高10m前後の淀江平野の北端部	南北方向に弧状をなす溝状遺構。断面V字形。内部に同時期の集落遺構は未確認。
3	尾高御建山遺跡	前期後半	標高33m前後の丘陵西端部	東西方向に弧状を描く溝状遺構。断面V字形。内部の遺構は未確認。
4	諸木遺跡	前期後半	標高30m前後の丘陵上	詳細不明
5	清水谷遺跡	Ⅰ-4	標高52m前後の舌状尾根の先端部	長軸43m、短軸26m前後の範囲を環濠が囲繞する。環濠底面付近より多量の角礫。環濠内部に数基の土坑。
6	天王原遺跡	Ⅰ-4	舌状にのびる河岸段丘の北端部	弧状を描く溝状遺構。断面V字形。付近に４基の袋状土坑。末端部埋土中で円礫10数個体出土。

Tab. 15　環濠出土遺跡一覧表